



宮崎県立西都原考古博物館

研究紀要

第7号

【論文・資料紹介】

甲斐 貴充

宮崎県出土の胡籜金具二例 1

藤木 聡

弥生時代日向における伐採石斧 9

嶋田 史子・赤田 昌倫

大萩37号地下式横穴墓出土鉄鏃に残る繊維と黒色物質について 15

安藤 正純

宮崎県内出土の古代～中世の鏡 19

福田 泰典

宮崎県内出土の長沙窯陶器について 26

藤木 聡

東アジアにおける人と火の関係史解明に向けて～台湾編 34

嶋田 一郎

隼人の盾の文様についての一考察 39

犬木 努・近藤 麻美・金行美智子

西都原古墳群出土埴輪の補足調査 45

三辻 利一・近藤 麻美

西都原古墳群出土埴輪の蛍光X線分析 58

吉本 正典

宮崎市松添貝塚出土の縄文時代晩期土器 62

【体験講座成果報告】

島木 良浩

実験「古代の染色」Ⅱ～藍と茜～ 71

2011. 3

序

本書は、宮崎県立西都原考古博物館の平成22年度における研究紀要です。

開館以来7年目を迎えた当館では、宮崎県民をはじめ多くの皆様の御支援を受けながら、館運営に携わる全職員が一丸となり、館事業の一層の充実に向けて日々努力を重ねているところです。

なかでも、考古資料等の調査・研究は、当館の事業を根本から支える重要な活動であり、職員一人ひとりがたゆまず研鑽に努め、取り組みを進めているものです。

本年度もこうした調査・研究の成果を刊行できる運びとなりました。皆様の御批判や御指導を賜り、展示や講座等のさらなる充実に資することができれば幸いです。

また、本書には館外の研究者の方々からも御寄稿いただいております。このような連携は、本県の歴史の解明や当館の発展の可能性を広げていく上で欠かせないものであり、御多忙の中御執筆いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

おわりに、所載論文等の執筆にあたり、資料や情報の提供に御協力いただきました各関係機関や日頃より当館の運営に御助力をいただいている多くの方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

宮崎県立西都原考古博物館長 井 上 貴

宮崎県出土のころく胡籐金具二例

甲斐貴充

1. はじめに

胡籐とは矢を運搬・収納する武具である。古墳時代において、矢を運搬・収納する武具は、「鞞」と「胡籐」が存在するが、鞞は、古墳時代前半期に存在し、筒状または箱状を呈し、矢尻を上向きで収納する。一方、胡籐は、古墳時代後半期に出現し、腰から垂下するなど身体への装着を前提とした形状を呈し、矢尻を下向きで収納する。胡籐は、朝鮮半島南部を中心とする地域や日本列島で数多く出土しており、分布状況やその精巧な造りから朝鮮半島系遺物であると考えられている¹⁾。

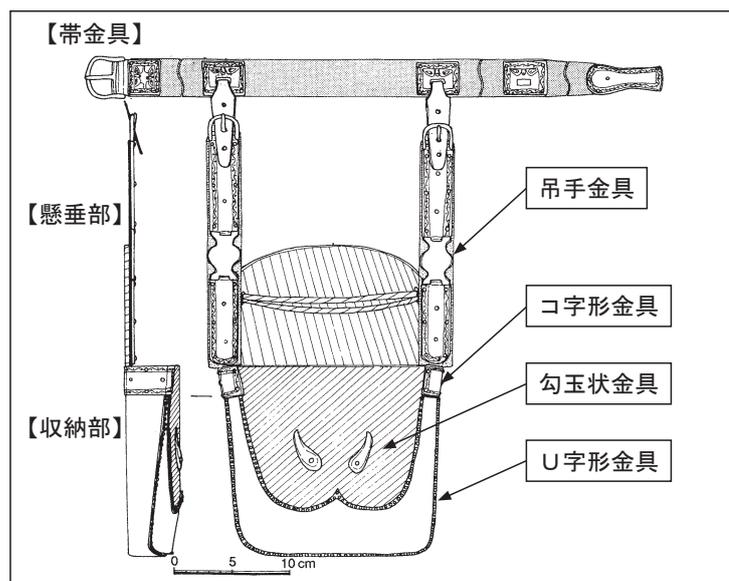
胡籐の研究については、主に1980年代から1990年代にかけて、特に朝鮮半島での良好な状況での出土例の増加により、日本及び韓国の両国で復元案を中心とした論考が展開され始めた（崔1987、鄭・申1983、全1985・1992、野上1977、早乙女1988、田中1988、坂1992など）。また、近年では、そうした論考からさらに発展させ、日本と韓国の両国資料を視野に入れた総合的な研究も見受けられる（西岡2007、児玉2007）。

宮崎県内の胡籐出例について、北郷泰道が1980年及び1981年の論考（北郷1980・1981）において、えびの市島内10号地下式横穴墓と児湯郡新富町石船塚古墳[新田原45号墳]の2例を挙げている。また、北郷は、同論考内において、他の国内出土例との比較検討をとおして、当時用途が不明瞭であった島内10号地下式横穴墓出土例の金銅製金具類を積極的に胡籐金具と評価している。

宮崎県内出土例について、現段階では1980年の北郷論考から追加された資料は無い。しかし、その後の研究によって得ることのできる新しい情報を踏まえて、この2例について、若干ではあるが考察を加えることとする。

2. 胡籐の構造

胡籐は、鏃を収納する「収納部（方立部）」と、袋状の収納部と腰を繫ぐ「懸垂部」によって大きく2つの部分によって構成される[第1図]²⁾。胡籐の大部分は革や布などの有機物と考えられ、完形として残存することは難しく、金具に付着物として残る程度である。しかし、縁部などに用いられた金具部分は残存し、これらの出土状況が胡籐の形状復元に大きく役立っている。これら胡籐に使用される金具（以下、「胡籐金具」と称する）は、研究者によって復元方法や金具の呼称が異なり、



第1図 胡籐各部名称 [全1992・西岡2007を引用]

系統や時期によって用いられる金具も異なるが、大きく「吊手金具」「勾玉状金具」「带状金具」「U字形金具」「コ字形金具」の5つの金具から構成される（第1図）。

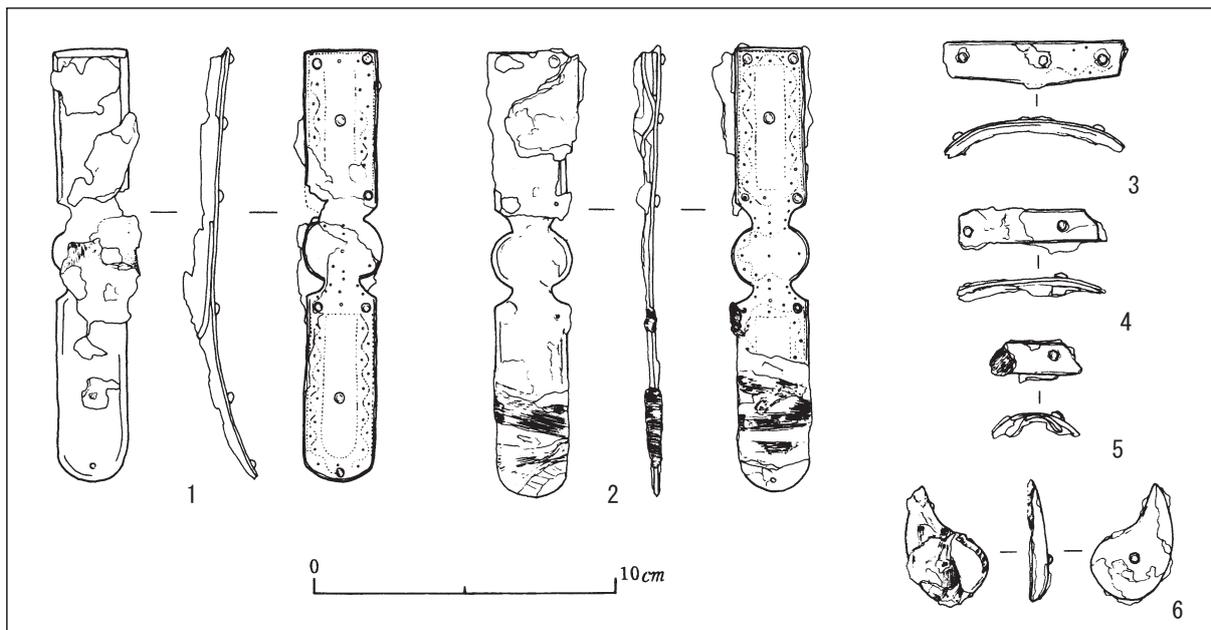
- ①「吊手金具」…腰帯と収納部を繋ぐ懸垂部の中心となる金具。懸垂部は、研究者によって吊手金具と同じ幅の吊り手を想定する場合と、収納部の幅と同じ革や布の両端を吊手金具によって補強する吊り手を想定する場合がある。また、吊手金具は形状から「中円板状金具」と呼称されることもある³⁾。
- ②「勾玉状金具」…収納部の表面に付けられていたと推測される金具。2個1対を成して邪視文を構成していたとも考えられる。形状は勾玉状や鳥形のものがある。
- ③「带状金具」…主に収納部の上縁部や下縁部に施されていたと推測される金具。装飾や縁部補強のために使用されていたと考えられる。三葉形立飾りを有するものや山形のものがある。
- ④「U字形金具」…前述した带状金具と重複する役割をもつ。収納部の表面下部に施されていたと推測される金具。U字形や漢字の山字形を呈するものがある。
- ⑤「コ字形金具」…带状金具と似ているが、带状ではなく、断面コ字形の長方板状を呈する。収納部の上端部の側面を覆うと推測される金具である。この金具を使用する胡籬は、U字形金具を有する場合が多く、方立形の収納部となると考えられる。

3. 宮崎県出土の胡籬金具

(1) えびの市島内10号地下式横穴墓群出土胡籬金具（第2図・写真2）

①出土状況

島内地下式横穴墓群は、えびの市の川内川左岸段丘上に展開する地下式横穴墓群である。現在、同地下式横穴墓群では、100基を超える地下式横穴墓が確認されている。出土した副葬品は、質・量ともに周辺の地下式横穴墓群に比べて突出している。



第2図 島内10号地下式横穴墓出土胡籬金具（宮崎県教育委員会1980より）

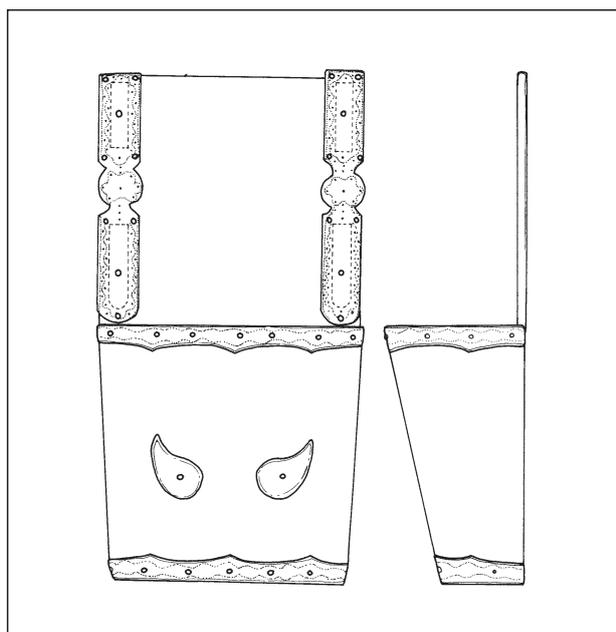
1979(昭和54)年に発掘調査が行われた10号地下式横穴墓(旧名:平松地下式古墳54-2号)からは、鉄剣1・刀子2・鉄鏃16・鉋様鉄器1・金銅製金具6が出土した。遺構の時期は5世紀後半頃に比定されている。報告書には、金銅製金具を「鞞あるいは胡籥金具」としている(宮崎県1980)⁴⁾。しかし、これらの金銅製金具は、北郷泰道の論考(北郷1980)によって「胡籥金具」と位置付けられている。現在の研究成果から考えても胡籥金具には間違いないと考えられる。胡籥金具の出土位置は、玄室奥壁近くで鉄鏃と一緒に出土した。現在、資料は県立西都原考古博物館が所有している。

②胡籥金具と復元状況

出土した金銅製胡籥金具は、中円状を呈する吊手金具2・勾玉状金具1・带状金具片3の3種類である[第2図]。埋葬時点での欠損などが無い限り、未盗掘での地下式横穴墓での出土状態は比較的安定しており、この3種の金具によって島内の胡籥は構成されていたと推測できる。

吊手金具[第2図-1・2]は、2個で1対を成すと考えられ、田中新史氏の指摘(田中1988)するように左右の長さが若干異なり、14.4cmと14.8cmである。短い方が右側になると考えられている。2点とも中円状を呈し、表面に波状列点文を施す。先端部に鉸具をもつタイプと持たないタイプがあるが、鉸具を持たないタイプだと考えられる。鉸の配置は、上方板部が2・1・2の3段、中円部が1段、下方板部が2・1・1の3段である。勾玉状金具[第3図-3]は、通常2個で1対を成すが、1個体のみ出土である。勾玉状金具が1個体分しか出土していない理由は不明である。带状金具片[第2図-4・5・6]は3個体あるがおそらく1個体分となる。带状金具には吊手金具同様、波状列点文を施し、わずかに山形を呈する山形带状金具と考えられる。また、断面は四角形ではなく、緩やかな弧状を描く。このことから、矢を入れる収納部は方立形ではなく、半円筒形(もしくは円筒形)となると推定される。しかし、山形带状金具は1本分である可能性があり、収納部の上縁か下縁に付属していたかは不明である。

こうしたことを総合的に考えると、中円状の吊手金具、半筒円形(もしくは円筒形)の収納部、収納部に勾玉金具、収納部上縁もしくは下縁に山形带状金具をもつ胡籥が復元できる[第3図]⁵⁾。

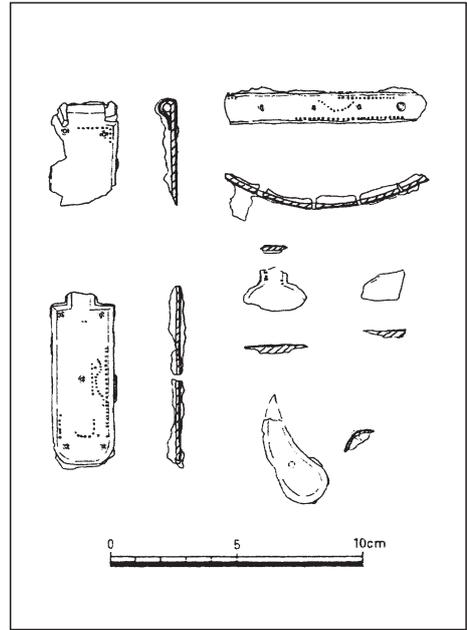


第3図 島内10号地下式横穴墓出土胡籥復元想定図

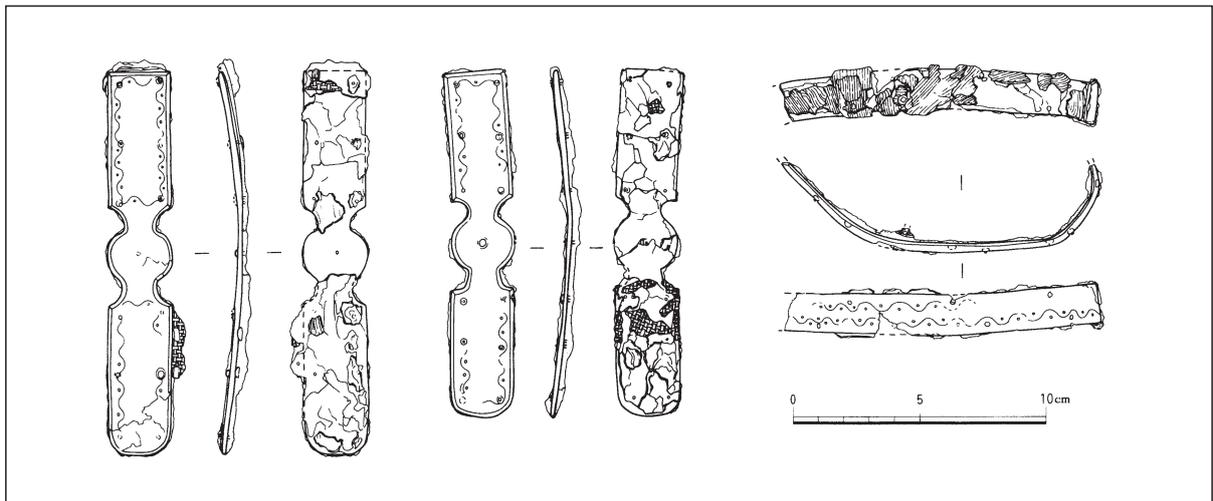
一般的に勾玉状金具を有する胡籥には、方立形の収納部とU字形金具とコ字形金具をセットで伴う場合が多い。しかし、島内の例は、勾玉状金具を有するものの、U字形金具とコ字形金具を伴わない特異な例と考えられる。こうした例は、国内では大谷古墳や市尾墓山古墳などで確認される。しかし、これら両古墳の胡籥には三葉文带状金具を有するという相違点がある。収納部形態(半円筒形)及び金具構成(吊手金具・带状金具・勾玉金具から構成される)の点から、最も近似する国内出土例として福

岡山竹並H-26号横穴墓の出土例が挙げられる(竹並遺跡調査会1979)。しかし、吊手金具の形態(島内は1枚造り、竹並は3連造り)など相違点もある。

また、朝鮮半島に類例を求めると、加耶地方の玉田古墳群出土例に類似したものがあり、加耶地方に起源をもとめることが可能かもしれない。特に、中円状を呈する吊手金具形態は加耶地方に集中する傾向がある(西岡2006)。その中でも、玉田5号墳出土例は、勾玉金具がなく、吊手金具の鉤の位置が異なる(島内は上方板部が2・1・2の3段、中円部が1段、下方板部が2・1・1の3段。玉田5号墳は上方板部が2・2・2の3段、中円部が1段、下方板部が2・2・2の3段)など異なる点があるものの、半円筒形もしくは円筒形の収納部、鉸具を持たない中円状の吊手金具の形態、波状列点文を施す吊手金具と帯状金具など共通点が多い(慶尚大 1999)。



第4図 竹並H-26号横穴墓出土胡籬金具



第5図 玉田5号墳出土胡籬金具

(2) 児湯郡新富町石船塚古墳 [新田原45号墳] 出土胡籬金具 (写真1)

①出土状況

石船塚古墳[新田原45号墳]は、新富町新田原台地に分布する新田原古墳群を構成する支群のひとつ「石船支群」(「石船古墳群」とも呼ばれる)にある墳長約65mの前方後円墳である。1939(昭和14)年、陸軍飛行場(現在の航空自衛隊新田原基地)の建設に伴い、梅原末治らにより周辺の4基(42号・43号・44号・45号)が発掘調査された。

石船塚古墳[新田原45号墳]の発掘調査において、家形石棺1基をもつ横穴式石室の調査が行われた。副葬品は、報告書(宮崎県1941)によれば、石室からは「坏2・鉄鏃2・鉸具1・金具残欠若干・石突2・雲珠2・革金具残欠若干」、前方部からは「鉄釘4個分・刀子断片1・馬具残欠1」が出土したと記されている。現在、出土遺物は所在不明である⁶⁾。この中で石室出土の「金具残欠若干」が胡籬にあたる

と思われる。この金具残欠を最初に胡籬と判断したのは北郷泰道の論考である(北郷1980)。また、『宮崎県史 資料編考古2』においても、胡籬と記述されている(宮崎県1992)。報告書のp25の第11図-3には実測図、図版14上(写真1)には写真が掲載しており、吊手金具と帯状金具と推定される金具片が確認できる。古墳の築造年代は、研究者によって若干異なるが、一般的に6世紀後半頃と考えられる⁷⁾。

② 胡籬金具と復元状況

埋葬主体である横穴式石室は大半が破壊され、胡籬が埋納されていたと考えられる石棺も搬出された状況であり、石室に残る出土状況から胡籬形態を復元することは勿論のこと、金具も全て揃っていないと判断している。また、現物の状況が確認できないので、写真から得る情報のみの状況である。こうした限られた情報からでも、ある程度の復元が想像できる。



写真1 石船塚古墳出土胡籬金具

金具構成は、中円状を呈する吊手金具が2個体分、波状文をもつ帯状金具は1個である。帯状金具はコ字状金具の可能性もあるが、長さなどから考えて帯状金具である可能性が高いと判断している。吊手金具は中円状を呈する。欠損著しく、鉸具の有無・鉸の配置・文様など詳細は不明である。帯状金具は、写真から波状列点文が確認される。また、島内の例と同じく中央部に鉸が並ぶタイプだと判断できる。しかし、写真からでは、帯状金具が直線的なものか曲線的なものか判断できず、収納部の形態が方立形か半円筒形もしくは円筒形か断定することができない。しかし、吊手金具形態・帯状金具の存在などの金具の特徴、及び古墳の築造年代などと併せて考えると、島内の例と同じような形態、つまり、中円状の吊手金具・半筒円形(もしくは円筒形)の収納部・収納部上縁もしくは下縁に帯状金具をもつ形態が想像できる。

4. おわりに

本稿は、一昨年度及び昨年度の研究紀要に掲載(甲斐2009、甲斐2010、諫早・甲斐2010)した古墳時代の宮崎県域における朝鮮半島渡来系と考えられる考古資料の基礎検討作業の一つである。

今回は、宮崎県内出土胡籬金具2例についての考察を行った。2例の内1例は現物が確認されず、写真からの情報のみであり、正確な検討とは言い難いものとなった。しかし、改めて県内出土例を検討すると、新たな発見がある。特に2例とも5世紀前期～中期頃に多い初期型の収納部が方立式の胡籬ではなく、どちらかというとも5世紀後期～6世紀代頃に多い後出型の収納部が半円筒形(もしくは円筒形)の可能性が指摘できたことは大きい。

2例のみで、全体の傾向を述べることは適切ではないが、現段階で宮崎県域から出土している胡籬は後出的な様相を示す。しかし、後出的とはいえ、島内の例は他の副葬品などと併せて考えて5世紀後半頃に時期比定できる。宮崎県域における渡来系考古資料は、馬具・馬埋葬土壇・鉄鐸なども5世紀後半頃から増加する傾向(甲斐2009・2010)がある。胡籬もそうした全体的な動きの中で取り込まれ

た可能性がある。しかし、六野原古墳群出土の渡来系馬具の検討(諫早・甲斐2010)などから、六野原古墳群周辺における騎馬文化の受容が、朝鮮半島南部の特定地域からの集団的渡来を示唆しない可能性を指摘したように、渡来系考古資料の増加が単純に渡来人の南九州への集団移動等を示すわけではないことは言うまでもない。

とは言え、古墳時代の宮崎県域における渡来系関連の考古資料は多種に及ぶ。それだけに、そうした文化を受容した構造は多種かつ複雑であろうと考えられる。今後もこうした考古資料の基礎検討作業を継続して行い、全体的な構造解明に繋がればと期待している。

最後に、本稿を作成するにあたり、下記の方々や諸機関にお世話になった。記して感謝申し上げます。

韓国国立加耶文化財研究所、韓国国立慶州文化財研究所、韓国国立中原文化財研究所、今塩屋毅行、嶋田史子、柳澤一男

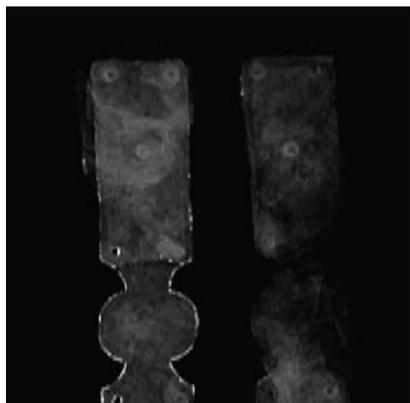
(本文は、東アジア地域の学術文化交流促進事業の研究成果を一部含んでいる。)

【註】

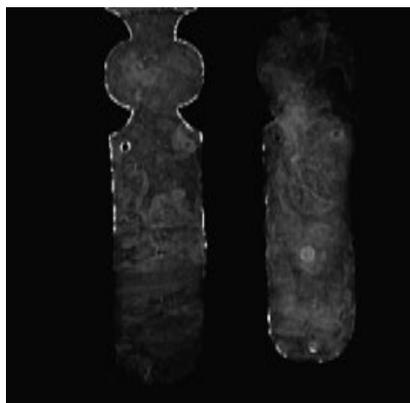
- 1) 「半島系遺物」とは、朝鮮半島で生産された資料のみを指すのではなく、朝鮮半島系の技術を用いて日本列島内で製作された資料も含む。胡籬も従来、朝鮮半島からの渡来遺物の代表のひとつであったが、他の半島系遺物同様、半島系技術を用いての列島内生産の可能性も含まれている。
- 2) 胡籬の収納部を指す場合、形状から「方立部」とする論考も多い。しかし、今回の島内地下式横穴墓出土例など方立形を呈しない可能性があるため、方立部という用語は本稿では用いない。また、胡籬は腰帯で固定されると考えられており、腰帯部も胡籬金具の範疇に入れる場合もあるが、本稿では腰帯部にまで言及しないので、胡籬の構成は「懸垂部」と「収納部」のみを扱う。
- 3) 吊手金具は、中円板形以外にも長方形板状や方形板状の組合せのタイプもあることから、形状ではなく、用途上の名称「吊手金具」を本稿では用いることとする。
- 4) 報告書(宮崎県1980)の54-2号の記述(p142)には「金銅製金具(鞞金具)」とあり、考察の頁(p122)には「鞞あるいは胡籬金具」と記述している。
- 5) 山形带状金具は、他の類例から収納部の上縁部か下縁部に付された可能性は高い。また、古墳時代以降の例や、大陸・半島などで壁画などに描かれた胡籬の表現から推測すると、带状金具は上縁部よりも下縁部に付された可能性がある。
- 6) 出土遺物の多くは、現在古墳のあった場所の近くで約1/20縮尺で復元された古墳に埋め戻された石棺の中に一緒に埋め戻されたという話がある。
- 7) 石船塚古墳の築造年代について、一般的には出土須恵器からTK43併行期(6世紀後半)頃が与えられているが、津曲大祐はMT15~TK10併行期(6世紀前半)頃と位置づけている(津曲2008)。

【引用参考文献】

- 崔鍾圭1987「盛矢具考」『釜山直轄市立博物館年報』第9輯
- 鄭澄元・申敬澈1983『東萊福泉洞古墳群』I 釜山大学校博物館
- 全玉年1985「東萊福泉洞第22号墳出土胡籥金具를 통해 본 胡籥의 復元」『伽耶通信』11・12号
- 全玉年1992「伽耶의 金工品에 對하여」『伽耶考古學論叢』1
- 野上丈助1977「武器・武具の16の謎」『歴史読本』22-12 新人物往来社
- 早乙女雅博1988「古代東アジアの盛矢具」『東京国立博物館紀要』第23集 東京国立博物館
- 田中新史1988「古墳出土の胡籥・鞍金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』
- 坂靖1992「胡籥の系譜」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV
- 西岡千絵2006「伽耶の胡籥」『第18回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』東アジア考古学会
- 西岡千絵2007「日韓胡籥金具考-分類と列島出土古式事例について-」『古文化談叢』第58集 九州古文化研究会
- 児玉真一2007「月岡古墳・塚堂古墳の副葬品に見る渡来系要素-とくに胡籥のU字形方立金具に注目して-」
『日中交流の考古学』同成社
- 北郷泰道1980「地下式横穴墓出土の胡籥金具」『宮崎考古』第6号
- 北郷泰道1981「地下式横穴墓出土の胡籥金具-補遺-」『宮崎考古』第7号
- 竹並遺跡調査会1979『竹並遺跡』東寧楽社出版
- 慶尚大學校博物館1999『陝川玉田古墳群VIII 5-7-35號墳』慶尚大學校博物館研究叢書第21輯
- 宮崎縣1941『宮崎縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十一輯 新田原古墳調査報告』
- 宮崎縣1992「47-3 石船支群」『宮崎縣史』資料編考古2
- 宮崎縣教育委員會1980「VI 平松地下式古墳54-1号発掘調査」「VII 平松地下式古墳54-2~4号発掘調査」『宮崎縣文化財調査報告書』第22集
- 甲斐貴充2009「宮崎県における古墳時代の馬埋葬土壙」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第5号 宮崎県立西都原考古博物館
- 甲斐貴充2010「古墳時代宮崎県出土の鉄鐸資料」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第6号 宮崎県立西都原考古博物館
- 諫早直人・甲斐貴充2010「伝 六野原古墳群出土の鎌轡について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第6号 宮崎県立西都原考古博物館
- 津曲大祐2008「南九州の後期古墳」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会実行委員会



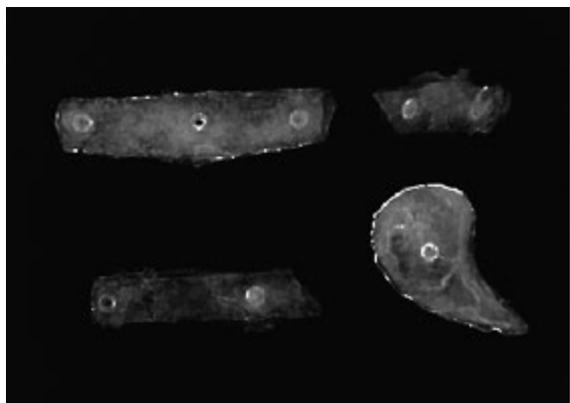
①



②



④



③



⑤

写真2 島内10号地下式横穴墓出土胡籜金具写真

[①②吊手金具X線, ③带状金具・勾玉状金具X線, ④吊手金具, ⑤带状金具・勾玉状金具]

弥生時代日向における伐採石斧

藤 木 聡

1. はじめに

筆者は以前、弥生時代日向における伐採石斧の様相について研究会発表を行なった（藤木2005b）。その際に県内出土資料の集成を試みたのであるが、高鍋町持田中尾遺跡ならびに県内博物館関連施設の所蔵品に見落した重要資料があると知った¹⁾。

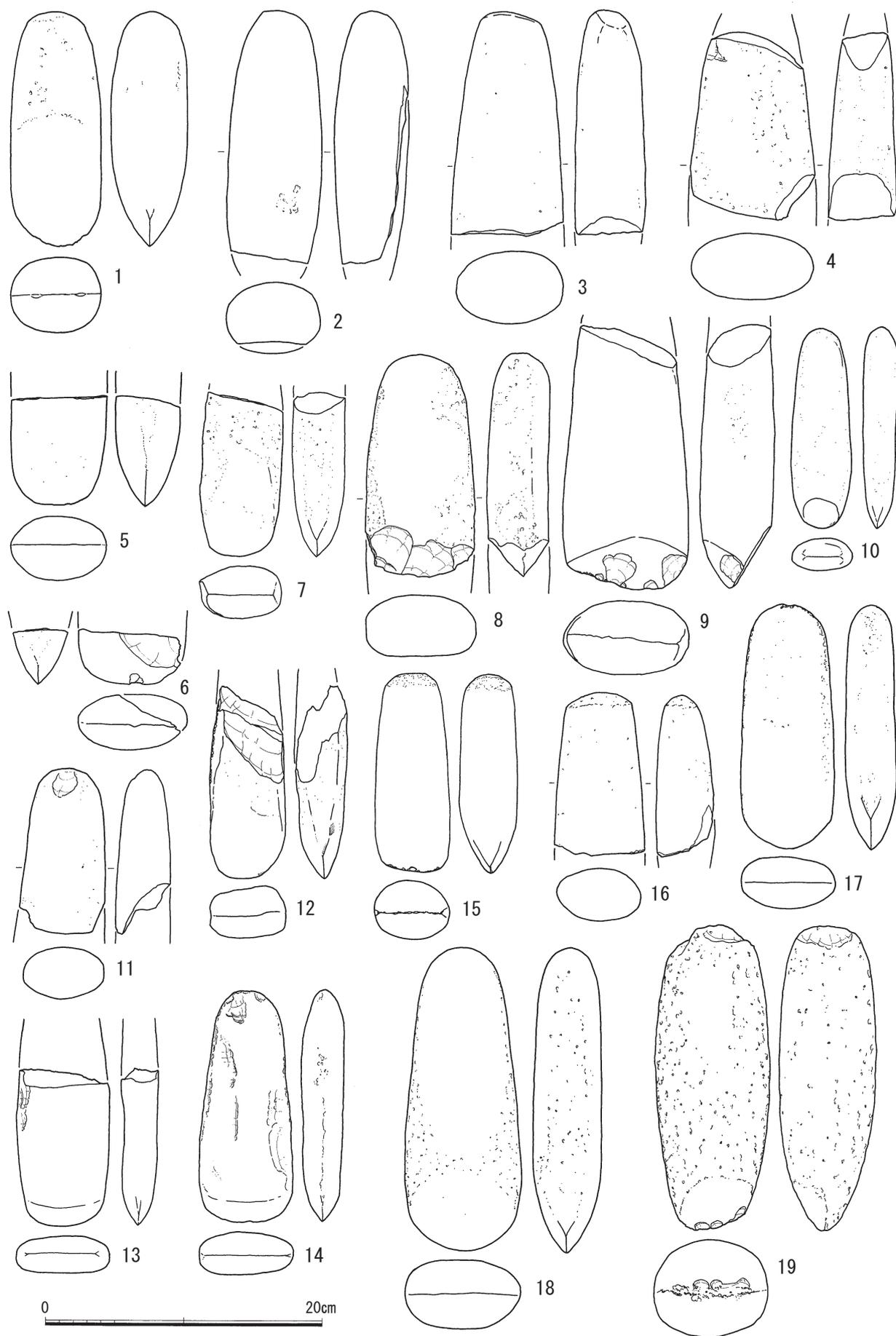
高鍋町持田中尾遺跡は日向の弥生時代前期末～中期初頭を代表する遺跡の一つであり、その出土品の特徴から北部九州的世界と日向の関係がこれまで強調されてきた（北郷1994ほか）。しかし、持田中尾遺跡の報告は概報が最新であるため（高鍋町1982）、出土遺物の全体が示されていないという問題がある。中でも、弥生時代の伐採石斧が大量に出土していることは、概要報告書に同石器の図面が皆無であったことからほとんど知られていないといつてよい。また、近い時期の伐採石斧には高鍋町大戸ノ口第2遺跡と新富町笠遺跡の2遺跡2点のみと極端に少ない。これらの状況からは、今回の報告は重要な作業といえる。また、県内博物館関連施設の所蔵品もまた、一部について図化された以外は一覧表や展示品としての公開にとどまっており（宮崎県総合博1982）、広く周知された状況ではなかった。そこで、上述の問題点の解消と前稿を補うため、弥生時代日向における伐採石斧24点について新たに実測し、若干の検討を加えた。

2. 高鍋町持田中尾遺跡出土ならびに県内博物館関連施設所蔵の弥生時代の伐採石斧

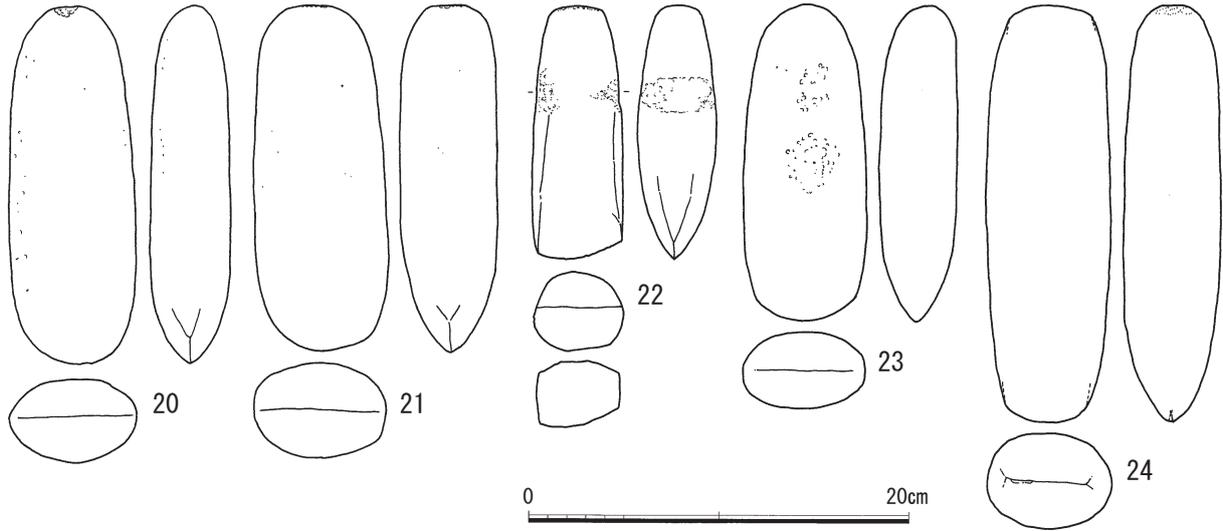
各資料の詳細は第1表を参照いただくとし、以下では資料の概要を簡単に記す。第1図1～14は、持田中尾遺跡より出土した伐採石斧であり、1は尾鈴山酸性岩類製、2～9は硬砂岩製伐採石斧である。いずれも厚手で鈍重な作りである。8は未製品の可能性がある。9は刃部欠損後に再研磨するもので、本来はかなり大きな伐採石斧である。10は細長い硬砂岩の扁平礫の一端のみを研磨して刃部を作り出した木材加工用と思われるものである。11～14はホルンフェルス製である。礫形状を活かし、凸部を敲打成形した上で刃部周辺のみ入念に研磨する。硬砂岩製の厚手で鈍重な石斧に比べて作りは粗い。

第1・2図15～21は当館保管のものである。とくに注目されるのが18の宮崎市高岡町小山田、20の宮崎市清武町下中野、21の宮崎市佐土原町佐野原例であり、これらの採集地点周辺は発掘資料のみでは分布上の空白となっていただけに、各資料のもつ意味は大きい。小山田例は日向出土品の中では最大級の伐採石斧である。19は全面敲打痕で覆われ刃部が明瞭でないことから未製品であろう。

第2図22～24は都城市教育委員会保管のものであり、弥生時代の伐採石斧の分布が希薄な都城盆地の資料として重要である。石材は宮崎平野部のものと共通する硬砂岩である。22は伐採石斧が研ぎ直されつつ使用された点がよくわかる。



第1図 日向出土の弥生時代の伐採石斧① (S=1/4)



第2図 日向出土の弥生時代の伐採斧② (S=1/4)

第1表 日向出土の弥生時代の伐採石斧観察表

| No | 遺跡名 | 遺構 | 石材 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 所見 | (単位:長・幅・厚=cm、重量=g) |
|----|---------------|---------|---------|------|-----|-----|--------|---|--------------------|
| 1 | 持田中尾 | | 尾鈴岩類 | 17.1 | 6.5 | 5.5 | 951.0 | 完形。基部側に敲打痕残る。基部は平坦。 | |
| 2 | 持田中尾 | | 硬砂岩 | 18.5 | 6.8 | 5.2 | 958.5 | 刃部と裏面欠損。全体によく研磨され、特に刃部周辺は強く研磨。一部、研ぎ残しあり。 | |
| 3 | 持田中尾 | NW | 硬砂岩 | 16.4 | 8.0 | 5.2 | 1015.7 | 全面敲打成形の後、頭部を研磨。全体に器面はこなれる。刃部大きく欠損。頭部付近にスス付着。 | |
| 4 | 持田中尾 | NE | 硬砂岩 | 14.7 | 9.0 | 4.9 | 905.9 | 全面敲打成形の後、研磨。研ぎ残し多く、器面はアバタ状。断面楕円形。頭部・刃部を大きく欠損。 | |
| 5 | 持田中尾 | SW-1 | 硬砂岩 | 8.0 | 6.9 | 4.7 | 353.4 | 刃部のみ資料。よく研磨される。 | |
| 6 | 持田中尾 | NW | 硬砂岩 | 4.1 | 7.4 | 4.1 | 105.4 | 破砕後、全面赤化。刃部のみ資料である。 | |
| 7 | 持田中尾 | NW | 硬砂岩 | 12.0 | 5.8 | 3.8 | 425.7 | 素材礫面をよく残し、右面・刃部周辺のみ強く研磨。基部側の突出部は敲打成形の後、弱い研磨。頭部を大きく欠損。 | |
| 8 | 持田中尾 | | 硬砂岩 | 16.2 | 7.9 | 4.5 | 958.0 | 凸部を中心に敲打成形。表面は平坦に研磨。刃部側は欠損する。敲打の後の研磨がなく、刃部周辺のみ入念に研磨した製品の欠損あるいは未製品か。 | |
| 9 | 持田中尾 | NW北土器溜り | 硬砂岩 | 19.2 | 9.1 | 5.4 | 1406.9 | 全面敲打成形の後、研磨。頭部欠損。刃部も欠損するものの、再研磨している。研磨前には器面全体が火熱にかかっており、再研磨部分のみ赤化していない。表面の再研磨部分は剥離面の凸部のみを粗く研磨した。 | |
| 10 | 持田中尾 | | 硬砂岩 | 14.5 | 4.4 | 2.4 | 238.3 | 完形。細長い扁平礫の一端を研磨して刃部を作り出したもの。研磨は刃部のみ。 | |
| 11 | 持田中尾 | NW | ホルンフェルス | 12.1 | 6.2 | 3.7 | 393.7 | 風化著しく、研磨等は不明。頭部に成形に伴うものが、剥離がある。刃部側半分を大きく欠損。 | |
| 12 | 持田中尾 | SW | ホルンフェルス | 14.1 | 5.5 | 3.8 | 404.3 | 礫形状を活かし、凸部を敲打成形。刃部周辺のみ研磨。頭部欠損。 | |
| 13 | 持田中尾 | 1号住6号土坑 | ホルンフェルス | 11.5 | 6.8 | 2.7 | 368.8 | 風化著しく、研磨等は不明。頭部側欠損。扁平。 | |
| 14 | 持田中尾 | NE | ホルンフェルス | 16.9 | 6.7 | 3.1 | 568.0 | 完形。礫形状を活かし、凸部を中心に敲打成形。側面には剥離・敲打成形に伴う凹部が残る。それ以外は弱い研磨で成形。刃部は入念に研磨。 | |
| 15 | 宮崎市下北方 | 表探 | 硬砂岩 | 14.3 | 5.5 | 4.3 | 520.1 | 完形。全面敲打の後、全面研磨。側面研磨弱。頭部は成形研磨との前後関係が不詳ながら敲打痕で覆われる。断面楕円形。刃縁は潰れる。墨書:昭和十七年六月 学校農場(下北方字織秋)、目録:p28-88磨製石斧 | |
| 16 | 宮崎市下北方 | 表探 | 硬砂岩 | 11.9 | 6.6 | 3.9 | 443.6 | 全面敲打の後に研磨。側面研磨弱。頭部は円基。断面楕円形。刃部側大きく欠損。墨書:下北方町農専茶園畑、シール:石斧35博物館/写番縄561宮崎市下北方町、黒マジック:894 | |
| 17 | 宮崎市島之内 | 表探 | 硬砂岩 | 17.8 | 6.7 | 3.8 | 737.5 | 全面敲打の後に研磨。側面研磨弱。断面弱い角ある楕円形。完形。頭部端に敲打痕あり。墨書:宮崎郡住吉村島ノ内、シール:石斧74神宮、朱書:宮、六七、目録:p28-92磨製石斧 | |
| 18 | 宮崎市高岡町小山田 | 表探 | 硬砂岩 | 22.3 | 8.4 | 5.0 | 1411.1 | 完形。全面敲打の後、全面研磨。側面研磨弱。断面楕円形。墨書:場所東諸県郡穆佐村大字小山田字永田西アグリ氏畑地ヨリ田地ニ●際発掘 出品者上代日向研究委員久木元芳之助、シール:石斧7博物館、黒マジック:866、目録:p29-117磨製石斧 | |
| 19 | 宮崎市?宮園 | 表探 | 硬砂岩 | 22.3 | 8.4 | 7.0 | 1917.1 | 全面敲打痕で刃部片面のみ研磨あり。頭部は剥離成形によるのか不整形。断面正円に近い楕円形。未製品であろう。シール:961宮崎・宮園石斧102、黒マジック:961、朱書:宮崎、五 | |
| 20 | 宮崎市清武町下中野 | 表探 | 硬砂岩 | 19.2 | 6.8 | 4.4 | 869.2 | 全面敲打の後、全面研磨。断面楕円形。完形。農具痕著しい。墨書:清武 下中野 大岩根勝行採集57.9、シール:222給刃石斧、黒マジック:1360、目録:p29-110磨製石斧 | |
| 21 | 宮崎市佐土原町上田島佐野原 | 表探 | 尾鈴岩類 | 18.4 | 7.1 | 5.1 | 1052.8 | 全面敲打の後、全面研磨。断面楕円形。完形。頭部端に敲打痕あり。器面全体は火熱によるものか赤みがかっている。墨書:日向国宮崎郡佐土原佐野原、シール:石斧78博物館/写番縄206佐土原町狭野原、黒マジック:937、朱書:宮、七八、目録:p29-104磨製石斧 | |
| 22 | 都城盆地 | 表探 | 硬砂岩 | 13.5 | 4.9 | 4.2 | 419.0 | 完形。断面の観察より、正面左側に幅広くなる大形斧であったが、使用等による再研磨で変形したとみられる。基部は平坦に敲打される。胴部に装着痕とも思われる敲打痕あり。 | |
| 23 | 都城盆地 | 表探 | 硬砂岩 | 16.8 | 6.5 | 4.1 | 720.0 | 完形。正面・裏面とも整形に伴うような弱い敲打痕残る。刃縁は摩滅。 | |
| 24 | 都城盆地 | 表探 | 硬砂岩 | 22.1 | 6.6 | 5.1 | 1215.0 | 完形。全面敲打の後に研磨。刃部周辺の研磨強く、刃端摩滅し小さな剥離あり。 | |

3. 弥生時代日向の伐採石斧の特質

弥生時代日向における伐採石斧は、まず前期末～中期初頭の高鍋町持田中尾遺跡（前掲）、高鍋町大戸ノ口第2遺跡13号土坑、新富町鏡遺跡1号住居があり、これ以前の伐採石斧は不詳である。次に、弥生中期中葉の宮崎市石ノ迫第2遺跡2号住居、中期後半の宮崎市堂地東遺跡2号住居、新富町向原第1遺跡3号住居11号ピット、後期初頭の新富町新田原遺跡4～6号住居、後期前半の新富町八幡上遺跡2号住居、宮崎市堂地東遺跡1号住居、後期末葉の川南町上ノ原遺跡5号住居が挙げられる。このほか、中期後半であろう宮崎市宮崎小学校遺跡包含層、中期の宮崎市石神遺跡包含層、中期以降の宮崎市垣下遺跡大溝等、後期前半の宮崎市堂地東遺跡XV区包含層、後期中葉～終末の宮崎市佐土原町下那珂遺跡包含層、後期後半？の新富町園田遺跡B地区包含層、弥生後期？の新富町園田遺跡C地区二次包含層等がある。宮崎市下郷遺跡、保木下遺跡、浄土江遺跡²⁾、松添遺跡、櫛1号墳、西都市宮ノ東遺跡、日向市東郷町鶴野内中水流遺跡、都城市肱穴第2遺跡³⁾、えびの市内採集品にもみられる。これらは、その法量でいえば幅5.5～9.1cm、厚み3.7～5.5cmで、重量500g～1kg超えがある。断面は円形あるいは楕円形で、胴部最大幅と厚みを保ったまま基部にいたるものが多い。重量1kg前後からそれ以上になるものは、たとえば北部九州の今山産石斧と比較しても遜色ないものである。石材は硬砂岩製でほぼ占められ、ごく少量のホルンフェルスあるいは尾鈴山酸性岩類製がある。硬砂岩製伐採石斧は、よく転磨されたおそらくは河原の転石に剥離を加えることなく直接敲打整形する。石材がホルンフェルス主体から硬砂岩主体へ変化した理由には、生産に伴う副産物の必要性の違いや、単純に硬砂岩の方が節理やそれによる予測の難しい割れに強く、さらには敲打・研磨加工がより確実かつ容易であったからと考えられる。製作遺跡は未確認であるが、おそらく宮崎平野内の河原等で石斧完成形に近い硬砂岩礫を用いて生産され、自家消費を基本にしつつ一部のは遠隔地まで流通したとみられる。弥生時代日向の片刃石斧の多くが北部九州や瀬戸内方面からの搬入品であった点と生産・流通の上で対照的である（藤木2010）。なお、伐採石斧の大ぶりなものは最終的に敲石・凹石等へ転用されることが多い。

また、縄文時代以来の薄手あるいは小形の伐採石斧が、中期後半の西都市宮ノ東遺跡5231号住居ほか、中期末～後期初頭の宮崎市田野町本野遺跡5号住居、後期前半の高千穂町南平第3遺跡4号住居、後期前葉～中葉の新富町銀代ヶ迫遺跡13・18号住居、後期中葉～終末の宮崎市佐土原町下那珂遺跡包含層、後期後半～末の生目周辺遺跡E-1トレンチ内二段掘り土坑墓内、終末の高千穂町神殿遺跡2号住居等から出土する。これらは規格性に乏しく、縄文時代以来用いられてきたホルンフェルスを中心に各種石材が用いられる。

縄文時代後半に多産された伐採石斧であるが（藤木2005a）、たとえば西都市宮ノ東遺跡では厚みが2.0～3.8cmに収まりその多くは3.0cm前後に集中し、断面楕円形で基部幅・厚みは胴部のそれと比べ顕著に小さくなり基端が尖るという特徴がある。縄文・弥生例を比較すると、弥生時代の伐採石斧は縄文時代のそれと比べて格段に厚斧化している。石斧の厚みの違いは、伐採対象木の硬さや太さへの対処である（山田2009ほか）。弥生時代中期から後期の新富町風早第Ⅱ遺跡・都城市高田遺跡や鹿児島県域では木製鋤身に硬材であるアカガシ亜属が好まれることから（川口2008）、たとえば水田等の農地の広がりや連動した鋤生産が厚みのある石斧を用いる背景となった可能性がある。高千穂盆地等

の山間部で厚斧化した伐採石斧を未見であることも同様の理由かもしれない。

なお、古墳時代以降にはほぼ完全に斧身は鉄製になるのであるが、その前段階である弥生時代日向においては、既存の集成（谷口1992・丹2005）でも鉄鏃や鉞といった小形工具・武具は一定数出土しているが、鉄斧にかんしては実に少ない。日向における弥生時代～古墳時代初頭の鉄斧出土例として、集落跡では古墳初頭？の延岡市中尾原16号住居2点、後期後半～終末の同18号住居板状鉄斧1点、後期の都城市加治屋A遺跡2号住居、えびの市内小野遺跡104号住居、墓からのものでは後期中葉～古墳初頭の新富町川床遺跡A-1号・A-5号・B-5号・B-108号・C-37号土壙墓からの各1点合計5点が挙げられる。また、異質な入り方をする鉄斧として、古墳前期の川南町湯牟田遺跡7号住居で出土した、後期前半以前に相当するとされる朝鮮半島産とみられる板状鉄斧があり、伝世品の可能性が高いと考えられている。これらの状況をめぐって、他地域でも多く積み重ねられたような“石器と鉄器の関係”をめぐる議論は、他の各種様相の検討を加えたいうで機会を設けたい。

謝辞

次に御名前を挙げる方々には、資料実測や文献収集等でお手を煩わせた。文末になったがこの場を借りて御礼申し上げたい（敬称略・個人から機関の順で五十音順）。

有馬絢子 甲斐貴充 栗山葉子 栗畑光博 樋渡将太郎 藤木晶子 増谷理絵 山下大輔 山本 格
 小林市教育委員会 西都原考古博物館 新富町教育委員会 高鍋町教育委員会 都城市教育委員会
 宮崎県埋蔵文化財センター 宮崎市生目の杜遊古館

【註】

- 1) 伐採石斧については藤木2005bに基づいているが、その後の新知見によって内容に変更が生じている。とくに大きな変更点としては持田中尾遺跡の伐採石斧の存在を知ったこと、硬砂岩製の縄文時代石斧が少量ながら確認された点、小林市黒仁田遺跡と田野町ズクノ山第1遺跡で磨製石斧と報告された資料は砥石等であり磨製石斧でないと実見確認できた点がある。
- 2) 浄土江遺跡（6C中葉～後葉の201号住居）出土の伐採石斧転用の敲石は、肉眼観察からは福岡市今山産玄武岩と思われ、今後、理化学的同定等での実証が待たれる。同質の石材について宮崎平野内の遺跡で見ることはない。仮に古墳時代のものでなく弥生時代以前の石器が混入したものであっても、北部九州産石材が遠く日向の地で利用された点は変わらない。浄土江遺跡は宮崎平野の中でも海岸寄りかつ大淀川近くに立地し、おそらくは海路を経て持ち込まれたものなのであろう。肉眼観察どおり今山産であった場合、日向の先史社会と北部九州の関係の一端を物語る興味深い事例となろう。
- 3) 都城市肱穴第2遺跡採集の伐採石斧には、四つ足の動物（報告者はシカと評価）と槍と思われる棒状のものを右手に持った人物が線刻されている（下田代1997）。

【主要参考・引用文献】

飯塚武司 2009 「農耕社会成立期の斧」『木・ひと・文化 ～出土木器研究会論集～』pp. 120-134

川口雅之 2008 「南部九州」『季刊考古学』第104号（特集 弥生・古墳時代の木製農具）、雄山閣、pp. 26-30

- 下條信行 2008 『大陸系磨製石器論-下條信行先生石器論攷集-』下條信行先生石器論攷集刊行会
- 谷口武範 1992 「鉄器」『日向の弥生時代後期から古墳時代初頭における諸問題』平成4年度宮崎考古学会秋季研究会
- 丹 俊詞 2005 「宮崎県における弥生時代の鉄製品」平成17年度宮崎考古学会（発表資料）
- 寺前直人 2002 「工具-石斧」『考古資料大観 9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』、小学館、pp.190-194
- 藤木 聡 2005a 「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」『StoneSources』No. 5、石器原産地研究会、pp. 47-56
- 藤木 聡 2005b 「宮崎県域における弥生時代の太形蛤刃石斧」『石器原産地研究会第7回研究集会』（発表要旨）
- 藤木 聡 2010 「弥生時代日向の片刃石斧の変遷とその背景（予察）」『宮崎考古』第22号、pp. 15-24
- 北郷泰道 1994 『熊襲・隼人の原像 古代日向の陰影』吉川弘文館
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 山田昌久 2009 「先史社会の環境交渉力を測る木質遺物研究試論～人工物観察研究の限界を超える情報収集と分析、用材関係に限定して～」『木・ひと・文化 ～出土木器研究会論集～』pp. 1-12
(弥生時代の伐採石斧掲載の発掘調査報告書等)
- えびの市1994『えびの市史上巻』／川南町教育委員会1986『上ノ原遺跡』報告4／下田代晴海1997「線刻絵画を有する磨製石斧について」『季刊 南九州文化』第71号、pp. 68-71、南九州文化研究会／新富町教育委員会1983『鏡遺跡・藤掛遺跡』第2集・1986『新田原遺跡 瀬戸口遺跡 藏園地下式横穴墓』第4集・1986『川床遺跡』・1992『八幡上遺跡 七又木遺跡 銀代ヶ迫遺跡』第13集／高鍋町教育委員会1982『持田中尾遺跡 発掘調査概要報告書』・1991『大戸ノ口第2遺跡』第5集／田野町教育委員会2000『本野遺跡(2)(弥生時代の調査)』第33集／宮崎県教育委員会1985『浦田遺跡 入料遺跡 堂地西遺跡 平畑遺跡 堂地東遺跡 熊野原遺跡』学園第2集・1986『保木下遺跡』・1992「園田遺跡B地区・C地区（二次）」『宮崎県文化財調査報告書』第35集／宮崎県総合博物館1982『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』／宮崎県埋蔵文化財センター1999『鶴野内中水流遺跡』第16集・1999『神殿遺跡B・C地区 南平第3遺跡 南平第4遺跡 中ノ原遺跡』第17集・2004『下那珂遺跡』第90集・2008『宮ノ東遺跡』第173集／宮崎市教育委員会1973『石神遺跡』第1集・1981『浄土江遺跡』第6集・1991『垣下遺跡』・1996『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』・1999『松添貝塚Ⅱ』第37集・1999『石ノ迫第2遺跡』第40集・1999『下郷遺跡』第41集・2002『宮崎小学校遺跡』第53集

大萩37号地下式横穴墓出土鉄鏃に残る繊維と黒色物質について

嶋田 史子・赤田 昌倫

1. はじめに

宮崎県内に分布する地下式横穴墓より出土する鉄器は、その保存状態の良さから、様々な情報を遺しており、鉄器本体はもとより、有機質の残存状態の良好さについても注目されている。

中でも、今回取り上げる大萩37号地下式横穴墓から出土した鉄鏃は、茎に巻かれている有機質が、ほとんど錆化しておらず、生のままの繊維が残存している。その繊維を実体顕微鏡で観察したところ、繊維の上に黒色物質が付着していることが確認できた。

そこで、今回、繊維の材質調査と黒色物質の同定を行うために、奈良文化財研究所のご協力を得て繊維のプレパラート作成、黒色物質の赤外分光分析を行った。

本稿では、1～3.5.6章を嶋田が、4章と6章の一部を赤田が執筆する。

2. 大萩37号地下式横穴墓について

大萩地下式横穴墓群は宮崎県小林市野尻町に所在し、岩瀬川北岸の標高195m～201mの広大な台地上に立地する。現在38基の地下式横穴墓が調査されており、37号は1981年に発掘調査された。

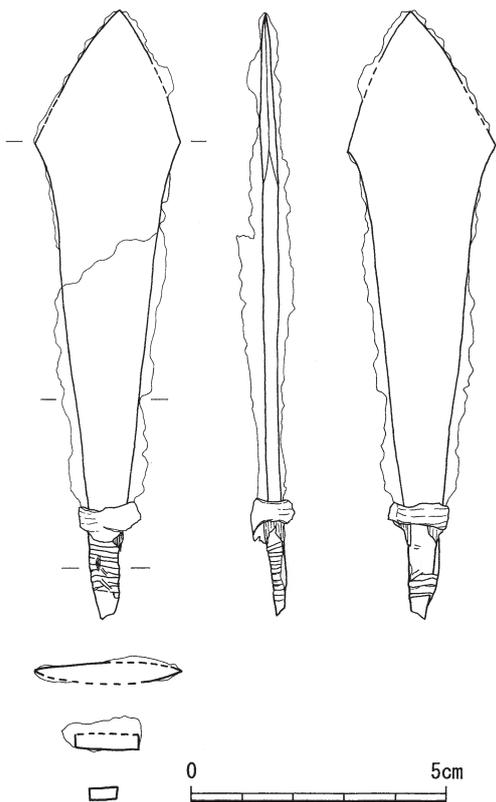
37号地下式横穴墓の玄室形態は、平入り右片袖で、奥行き2m、奥壁幅1.7m、羨道入口から奥壁までの長さは3.05mを測る。奥壁に平行して5体の人骨が埋葬されており、今回、対象とする鉄鏃は奥壁から4番目の人骨の頭上に刀子1点、鉄鏃1点と共に副葬されていた。時期は、鉄鏃の形態から5世紀後半段階であると考えられる。

3. 遺物の状況と分析

鉄鏃は圭頭鏃で、茎の端部は欠損しており残存長12.1cm、刃部最大幅2.9cmを測る。矢柄が抜けた状態で収蔵されており、矢柄部分は刀子1点、鉄鏃1点と錆着している。茎には繊維が巻かれており、一部、矢柄の木質と口巻きも残る。

茎に巻かれた繊維は、幅約1～1.3mmで横方向に巻かれており、その上に一部斜め方向の巻きが見られる。斜め方向の繊維は図面上での表面で左斜上、裏面で左斜下、右側面で左斜下の方向が追えることから、右方向に巻きつけた後、返し巻きをしている可能性が高い。さらに、この繊維の上には黒色物質が付着しており、部分的ではあるが、表裏側面で観察できる。

そこで、今回この繊維の材質調査を行うために、繊維1本をサンプリングして走査性電子顕微鏡にて側面観察を行った。断面についてはプレパラートを作成し、生物顕微鏡により観察を行った¹⁾。付着する黒色物質についても、一部をサンプリングして、赤外分光分析を行った(第4章)。



遺物実測図 (S=2/3)



写真1 繊維・黒色付着物
実体顕微鏡写真

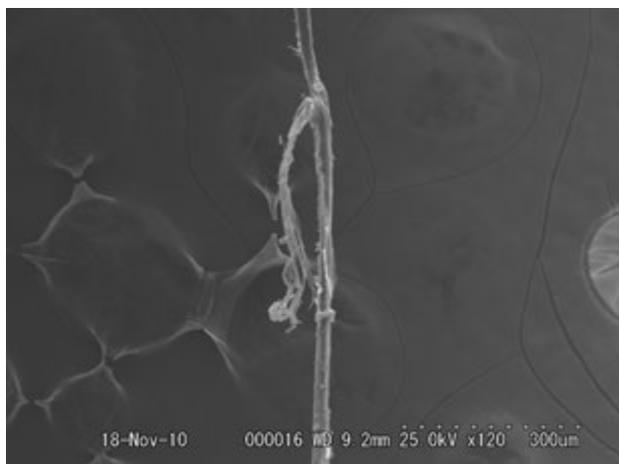


写真2
繊維側面
電子顕微鏡写真



写真1の拡大



写真4 繊維断面生物顕微鏡写真



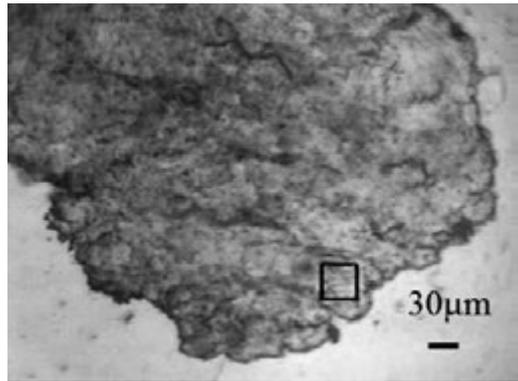
写真3 断面観察使用サンプル

4. 黒色物質の赤外分光分析

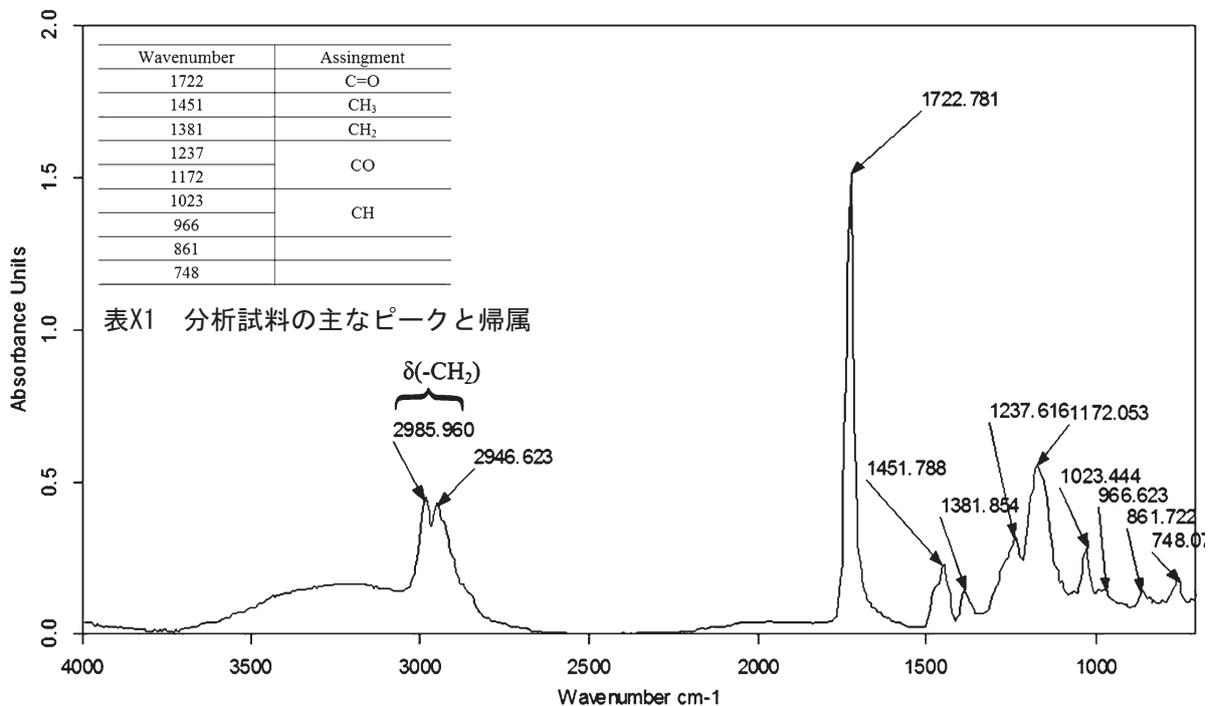
黒色物質について、赤外分光分析(FT-IR)による調査を行った。今回の調査は非破壊による分析が不可能であったため、鉄鏝表面をメスで掻き落とした物質を分析試料として破壊分析を行った。(図X1参照)

分析機器はShimadzu IR Prestige-21 (Reflectance Spectroscopic Analysis)を使用した。分析条件は、分解能 8cm^{-1} 、積算回数128回、アパーチャーサイズは $30\mu\text{m}$ とした。試料は金属板でプレスし薄層状態のものを機械付属の顕微鏡写真から、 0.5mm 前後の褐色部位について分析を行った。

図X1と表X1に分析試料のスペクトルと検出された主なピークの一覧を示す。分析の結果、 $3000\text{--}2700\text{cm}^{-1}$ の $\delta(-\text{CH}_2)$ 、 1722cm^{-1} ($\text{C}=\text{O}$)のカルボン酸、 $1023, 966\text{cm}^{-1}$ (CH)に特徴的なピークパターンが得られ、脂肪酸やアクリル樹脂に特徴的なスペクトルパターンであることがわかった。脂肪酸に関しては、具体的にはワックスなどの可能性が考えられたが、 $1600\text{--}1500\text{cm}^{-1}$ にピークが検出されない等、カルナバワックスやビーズワックスとはピークの一部が符合しないため、ビーズワックスとは異なる物質であると考えられる。全体のスペクトルパターンとしては、アクリル樹脂または松脂に酷似している。



図X1 鉄鏝表面付着物の顕微鏡写真



図X2 分析試料のIRスペクトル

5. 繊維の側面および断面観察

茎に巻かれている繊維の側面は、走査性電子顕微鏡での観察から、分岐している箇所が見られた(写真2)。布目順郎氏は、大麻の側面の特徴として「先端は細くなって鈍円、時には分岐して叉状をなす」ことを挙げており、分岐は亜麻、苧麻に見られない特徴であるという(布目1988)。生物顕微鏡による断面観察と、布目氏の示す断面模式図とを照合した結果も合わせ、総合的に見て、この繊維は大麻の可能性が高いと考える。

6. おわりに

鉄鏃や銅鏃と矢柄の装着方法については、茎に残る繊維や矢柄等、有機質の残存状況から、茎に繊維を巻きつけ、矢柄に挿入し、樹皮等で口巻きを施し固定する手法が一般的に復元されている。また、矢柄との固定、強化に膠や漆など何らかの接着剤が使用されていることも言及されている²⁾。

今回の大萩37号地下式横穴墓出土鉄鏃に残る、繊維の材質調査、及び黒色物質の赤外分光分析の結果より、茎に巻かれた繊維は大麻の可能性が考えられ、繊維の上に付着する黒色物質からは、アクリル樹脂または松脂の成分が検出された。松脂であれば矢柄との固定・接着の目的で使用されたことが考えられるが³⁾ 保存・修復作業の中でアクリル樹脂が使用された可能性も考えられる。

仮に松脂であれば、茎に大麻を巻き付け、その上に松脂を塗り、矢柄に差し込んで接着、固定したという、より具体的な復元図を示すことができる好例として、挙げる事ができる。

本稿を作成するにあたり、奈良文化財研究所、宮崎県立農業試験場のご協力を得ましたことを、ここで感謝申し上げます。

【注釈】

- 1) 断面観察については写真3の繊維を樹脂に包埋し、奈良文化財研究所のご指導を得てプレパラートを作成して行った。使用顕微鏡NIKON ECLIPSE55 i。
側面観察については、繊維の一本をサンプリングして行った。使用顕微鏡HITACHI S-300N。
- 2) 雪野山古墳の研究の中で、出土銅鏃と矢柄の結束方法についての記述があり、銅鏃の茎に芋麻を巻きつけ、膠などの膠着剤を塗り矢竹に差込み、さらに樺巻きとして桜等の樹皮を巻き、黒漆を塗り仕上げたことを想定している。
- 3) 花粉分析で松の花粉は全国的に見られる。鉄鏃の製作地は不明であるが、県内で花粉分析を行っている遺跡中、弥生時代中期以降の複数の遺跡で、松の花粉が確認されており、シイ・カシ等を中心とした照葉樹林に混じって生育している景観が復元されている。

【参考文献】

- 中川正人1996「雪野山古墳出土漆製品の材質と技法」『雪野山古墳の研究 考察編』 雪野山古墳発掘調査団
吉松茂信2008「第2節 桜井市赤尾熊ヶ谷古墳群の繊維調査報告」『赤尾熊ヶ谷古墳群』(財)桜井市文化財協会
布目順郎1988『絹と布の考古学』雄山閣出版
和田理啓 2007 「楠牟礼地下式横穴墓」宮崎県埋蔵文化財センター
宮崎県教育委員会 1985 『宮崎県文化財調査報告書』第28集

宮崎県内出土の古代～中世の鏡

安藤 正純

1 はじめに

宮崎県内における出土鏡は、弥生時代の破鏡や古墳時代の地下式横穴墓などからの出土品に注目があつまり、当該期の研究対象遺物の中でも重要な位置を占めている。一方、それ以後の時代（奈良時代以降）に関しても、一定の出土例はあり、ある程度の傾向や法則性を導き出せる状況にはあるのだが、研究に関してはほとんどなされていないと言ってもよい。

呪術的・宝器的意味合いのつよい古墳時代までの鏡に対して、仏教伝来にともなう社会の変化を背景とする奈良時代以降のものには実用品的な意味合いとともに、除魔や地鎮、寺院や仏像の装飾といった使用目的が生まれると言われ、前者と後方で出土鏡の性格が大きく変化する。よって、古墳時代までの鏡とそれ以降の鏡を同一の視点から論ずることが難しいという側面がある。また近世以降になると、鏡の用途はほぼ実用に限定されるようになり、貴重品でもあるが故に子々孫々に伝世されることから、土中から出土することがかなり稀になる。

このような理由から、本稿では、ある程度の研究が進んでいる弥生～古墳時代の鏡と出土例の少ない近世以降のものは除き¹⁾、古代～中世のものだけを検討することにする。

鏡の研究方法としては幾通りかがあると思うが、本稿では、出土遺構や出土状況の比較検討を行うことで、現時点での当該期の県内出土鏡のまとめとしたい。

2 全国的視点でみた場合の古代～中世出土鏡の性格

全国的にみた場合、鏡が出土する古代～中世期の遺構としては、代表的なものとして、経塚、池址、墓、祭祀遺構の4つがあるとされる²⁾ので、最初に簡単にその状況をまとめておきたい。

まず経塚であるが、これは土中に銅製や陶製の経筒を埋納し、はるか未来の弥勒菩薩降臨に備え仏教の経典を土中に保管しようとしたことから始まったとも言われている。一説には藤原道長が寛弘4(1007)年に初めてそれをつくったともされ、その後、末法思想(仏教が衰退していくとする思想)の流行を背景にこの風習は全国に広まった。そのピークは11世紀～12世紀にあり³⁾、13世紀頃までにかけて造られるとされる。

土中に埋納されるのは経典や経筒だけでなく、他にも仏像や法具、鏡、鉄製小刀、青磁や白磁の合子・小壺、銭といったものが一緒に埋められた。これらの中でも鏡は出土量が非常に多く、最も代表的な副納品とされる。

次に池址であるが、湖沼や池に鏡を投入した事例は全国各地に認められ、一般にそれらは鏡ヶ池と称される。ただし実際に鏡の出土を見るのは、湖沼としての役割を終えたものに限られるため遺構数としては多くはないとみられる。しかし、戦前の記録ではあるが、山形県羽黒山山頂の出羽神社境内の池址から600面を超える鏡が出土しているとされ、その多くが平安時代末期～鎌倉時代の所産であった。これらは修験道における山岳信仰に関わりが深いと考えられており、祈願奉納、祭祀具の投棄供養といった目的で、当該期に多くの鏡が投げ込まれていたものと考えられる。また、池址ではないが、

栃木県日光男体山山頂からも出羽神社境内出土と同時期にあたる鏡168面の出土例があり、鏡と山岳信仰との関わりが窺われる。

つぎに墓であるが、銭貨、土師器、陶磁器類など豊富な出土品に混じり、当該期の服飾品や化粧道具が出土する例があるという。ただし貴重品であるがゆえに鏡を副葬品として埋葬することは稀であるとされ、出土例自体にも時期的な偏りはないとされる。またその性格も、生前の身近な生活用具として死者に副葬したものだけではなく辟邪や魔除けとして埋納された例もある。

最後に祭祀遺構であるが、島嶼部を中心にみられる風習と考えられている。屋敷内の一隅に設営されている屋敷神の小祠付近や、畑地の一角の祠、または海辺の積石遺構等から出土している。時期的には平安時代末期～室町時代にかけての風習と見られ、海洋信仰、海神信仰に関連があると考えられる。なお付け足しておく、海神を鎮める目的で船などから直接、海中に投げられた鏡も数多いとされるが、海底であるがために全国的にみても出土例が少なく宮崎県沖での出土例はない。

3 県内出土鏡の検討

それでは宮崎県内における鏡の出土状況はどうであろうか。それをまとめたものが(表1)である。現時点で県内の遺跡から出土した古代～中世の鏡としては18面があげられる⁴⁾。そのうち遺構から出土したのは16面で、経塚、墓、祭祀遺構、土坑(使途不明)、溝状遺構からであるが、天神河内第1遺跡の溝状遺構出土の鏡に関しては、報告書上で廃棄後の流れ込みの可能性が高いと指摘されていることから検討の対象外とする⁵⁾。

次に遺構出土の上記15面に関して、(1)経塚、(2)墓、(3)祭祀遺構、(4)土坑(使途不明)の順番に詳細を見ていく。

(1) 経塚出土のもの

県内の経塚に関しては、茂山護氏の「宮崎の経塚地名録」⁶⁾がその代表的研究であり、論稿執筆時(1974年)の調査によって明らかになった計19基(礫石経塚を除く)に関する考証がなされている⁷⁾。氏自身は、その一つ一つについて遺構造成年代を明確に示している訳ではないが、前述のごとく経筒を地中に埋納する形態の経塚は、時期的には11世紀～13世紀のものであり、氏が考証している経塚のほとんどに関して、その範囲を外れるような積極的証拠を示す遺構はない。

唯一の例外は、都万神社境内経塚出土の経筒(恐らくは外容器)に「承広三年」の墨書があったとされることから、これを近世の承応三年(1654)にあたるものとしていることである。「広」字は、元号で使用されたことがない文字であるので、「応」字を書き誤ったものではないかと推測されたとされる。しかし経筒外容器自体は、現物を見る限りは12世紀のものである可能性が高い⁸⁾ので、「承」字の方に誤りが無いという前提で考えれば、「承」が先頭に付くという条件を満たす12世紀の元号「承安」(1171～1174)と考える方が無難である。ただし、場合によっては13世紀初期の「承元」(1207～1210)・「承久」(1219～1222)まではその範囲と考えるとよいかも知れない。

茂山氏が考証された以外では、県内で、何らかの検出記録を残す経塚は当館職員甲斐貴充氏の教示等をもとに筆者自身が史料調査し7基を確認している⁹⁾。したがって県内の経塚(古代～中世期)の

合計数は、茂山論稿で示されたものと合わせて現時点では計26基となる。

なお上記の新しく加えた7基の中には、都城市高崎町の鳩蘭遺跡の配石遺構(石積経塚)2基を含めている。出土遺物等からの考証では、1号配石遺構の造成時期が13世紀後半～14世紀台、2号配石遺構が14世紀代となるようであり、全国的に経塚造成が流行した時期を外れていることから、報告書上では1号遺構を経塚と断定することは避けており、また2号遺構に関しては経塚ではなく刀・鏡の埋納遺構としている¹⁰⁾。しかし、遺構形態と出土遺物から考える限りは経塚であったことを否定するほうが難しいと思われと同時に、この2基の遺構を経塚として認定している研究もある¹¹⁾ので、取りあえずは、本稿でも14世紀代に造成された可能性のある経塚としておく。もしそうであれば、県内で最も新しい時期の経塚(一字一石経塚・礫石経塚を除く)となる可能性もあるが、その前にこの2基の遺構の出土遺物に関しては、その比定時期を再検討する必要があると思われる。

なお宮崎県内では確実な証拠をもって11世紀代の造成とされる経塚は現時点では認められない。11世紀代の経塚は畿内と北部九州に多いとされ、そこから12世紀に全国に広まるとされるので¹²⁾、県内にもある程度の時差をもってこれらの地域から伝わったものと推定されよう¹³⁾。

計26基の県内经塚のうち、8基でしか鏡は出土していないが、茂山前掲論稿によると新富町竹淵の経塚の一つでは、陶製経筒の「口唇上面には緑青の付着が見え蓋として青銅製品が使用されていたことを証している」とのことであり、鏡が蓋となっていた可能性が考えられる。その他にも、経筒の同伴出土品が紛失しているものもあることから、本来的にはもっと多くの経塚で副納品として埋納されていたとも考えられる。

経塚において、鏡は経筒や中身の経を守るという役割があったようであり、除魔の意味合いが強いとされる。8面の鏡もこのような目的で副納されたものであろう。

(2) 墓から出土したもの

墓は新富町の上蘭遺跡出土のものが2面、宮崎市高岡町の八児遺跡のものが1面、宮崎市の源藤遺跡のものが1面の合計4面である。遺構造成時期は、上蘭遺跡と八児遺跡のものが平安時代、源藤遺跡のものが室町～戦国時代(15世紀～16世紀)とされている。この中で特に注目すべきは八児遺跡出土の湖州鏡である。

湖州鏡は平安時代中期末葉頃に中国から多量に輸入されており、経塚等から出土する鏡の中でも最も代表的なものとされる。その中でも、九州での出土例の大半を占めるとされるのは六花鏡(六弁の花の形を呈する)であり、県内出土湖州鏡6面の中でも5面までもが六花鏡である。しかし八児遺跡のものは四角形の方鏡であり、それは関西以東の日本海側に出土例がほぼ限定されると言われている。今後、宮崎県以外の九州各県の出土例を調べる必要があるとともに、そのデータをもとに詳細な検討が必要になってくるものと思われる。

宮崎県内における墓からの鏡の出土例は少なく、4面の鏡が出土した遺構の造成時期にもかなりの時間的な幅があるといえる。全国的な例に漏れず、当該期においては宮崎県内でも、鏡は貴重品として子々孫々に伝えられていくものだった可能性が高い。

表1 宮崎県内出土鏡（古代～中世）一覧

| | 鏡名 | 市町村名 | 地名 | 出土遺構 | 共伴出土品 | 遺構造成時期 | 鏡の製作時期 |
|----|------------------|------------|------------------|------------------|------------------------------|---------------------------|-------------|
| 1 | 不明(雌雄の 鶺鴒の模様) | 高千穂町 | 二上遺跡 | 経塚 | 経筒、至和通寶1枚、 大観通寶2枚 | 12世紀(共伴 の出土銭貨か ら推測) | 不明 |
| 2 | 草花飛雀鏡 | 延岡市 | 三須(延岡古 墳群1号墳) | 経塚 | 銅鑄製積上式経筒 | 12世紀? | 奈良時代 |
| 3 | 湖州六花鏡 | 延岡市 | 林遺跡 | A1区土坑 SC1 | (無) | 平安時代以降 | 平安時代 |
| 4 | 八角草葉胡 蝶鏡 | 延岡市 | 林遺跡 | A1区土坑 SC2 | 拳大の石 | 平安時代以降 | 平安時代 |
| 5 | 秋花双雀鏡 | 延岡市 | 林遺跡 | C4区(祭祀) 土坑SC1 | 鉄鍋(1)、短刀(1)、銭 (2束)、炭化した布片 | 中世後半 | 平安時代 |
| 6 | 菊枝双雀鏡 | 西都市 | 寺崎遺跡 | 経塚 | 長方硯、灰緑釉陶器? | 鎌倉時代? | 鎌倉時代 |
| 7 | 湖州六花鏡 | 新富町 | 上蘭遺跡 | 1号土墳墓 | 鉄製鎌 | 平安時代末 | 平安時代 |
| 8 | 松鶴鏡 | 新富町 | 上蘭遺跡 | 2号土墳墓 | 皇宋通寶 | 平安時代末 | 平安時代後期 |
| 9 | 湖州鏡(四 角) | 宮崎市 高岡町 | 八児遺跡 | 土墳墓 | 白磁合子、石鍋、鈴、 鎌 | 平安時代 | 平安時代 |
| 10 | 湖州鏡 | 宮崎市 | 源藤遺跡 | 1号土墳墓 | 土師器坏、小皿、刀子 | 15世紀～16 世紀前半 | 平安時代 |
| 11 | 草花文鏡 | 宮崎市 田野町 | 天神河内第 1遺跡 | 1号溝状遺 構 | | 13世紀～16 世紀? | 破片のため 不明 |
| 12 | 不明 | 宮崎市 田野町 | 天神河内第 1遺跡 | 不明 | | (不明) | 破片のため 不明 |
| 13 | 唐草双鳳鏡 | えびの市 | 古屋敷遺跡 | 不明 | | 奈良時代以降 | 奈良時代 |
| 14 | 萩山吹双鳥 鏡 | 都城市 高崎町 | 鳩蘭遺跡 | 配石遺構 1号(経塚) | 常滑壺・土師器皿 | 13世紀後半～ 14世紀代 | 鎌倉時代 |
| 15 | 竹垣秋草双 鳥鏡 | 都城市 高崎町 | 鳩蘭遺跡 | 配石遺構 2号(経塚) | 袋状遺物・ガラス玉・土 師器皿 | 14世紀代 | 鎌倉～ 室町時代 |
| 16 | 湖州六花鏡 | 都城市 | 早水神社境 内遺跡 | 経塚 | 軽石製外容器 | 平安時代末以降 | 平安時代 |
| 17 | 湖州六花鏡 | 都城市 | 安久町松迫 | 経塚 | 経筒、軽石の外容器? | 平安時代末以降 | 平安時代 |
| 18 | 不明(菊花と 鳥の模様) | 都城市 | 安久町中尾 | 経塚 | 経筒の周囲に木炭 | 平安時代末以降 | 平安時代 |

(3) 祭祀遺構出土のもの

延岡市の林遺跡では、祭祀に使用されたとされる土坑(C4区SC1、0.86m×0.72m)から1面の鏡が出土している。県北の延岡市内では、このような小土坑に十数枚～数十枚の銭貨や動物の骨等を埋納した中世の遺構がいくつか報告されているが、このような祭祀目的でつくられた土坑の中で鏡が出土しているのは林遺跡のC4区SC1土坑だけであり注目される。

全国的な傾向からすると鏡が出土する祭祀遺構というのは、島嶼部を中心にみられ、海洋信仰との関わりが深いということ述べたが、林遺跡の場合は島ではない。しかし延岡市内で検出されている祭祀遺構の中では最も海岸に近く(約1.5kmの距離)、当該遺跡の立地する伊形町の「伊形」は「干潟」の転化したものと考えられていること、当地には天正年間頃までは大潮時に海水が町内の山裾まで押し寄せていたという伝承が残っていること¹⁰などを考慮すると、全く無関係であるとも言えない。林遺跡C4区SC1土坑は、延岡市内の他の中世祭祀遺構とは違う別の祭祀行為が実施されていた可能性も指摘されよう。今後の調査で、中世の祭祀遺構と海洋・海神信仰との繋がりを示唆するような事例が県北や他地域で増えていくかどうか注目したい。

(4) その他の遺構出土のもの

前項で述べた林遺跡では、(祭祀)土坑のC4区SC1土坑以外にも2つの土坑(A1区SC1・SC2)で鏡が出土しているが、これに関しては報告書上で時期や機能を不明としている。SC1は大きさ不明で隅丸長方形を呈するといひ、SC2は1.40m×0.88mの隅丸長方形であると報告されている。同遺跡内では中世の供養塔である五輪塔と板碑も多数見つかったので、上記の土坑はそれに関連した埋め墓である可能性も指摘できる。その場合は2面の鏡は死者への副葬品ということになるが、本稿ではこれ以上の考察は実施しないものとする。

4 おわりに

本稿では、詳細な鏡一面ごとの年式・型式や模様等の比較・検討までには踏み込めなかった。この点に関しては今後の課題としたい。県内で6面が出土している湖州鏡だけを見ても、詳細な部分までみれば相違があり、前述内容とはまた違った側面から検討を実施できた可能性がある。ただし、県内出土鏡の枚数が18面では少なすぎることもあるので、今回は、発掘調査等の進展により、もう少し出土量が増えた状態で検討できることを期待している。



八児遺跡〔宮崎市高岡町〕
湖州鏡（方鏡）



林遺跡〔延岡市〕
湖州鏡（六花鏡）

【主要参考文献・報告書】

- 藤寺非寶編 1939『第一日向国白杵郡高千穂宮文献資料』高千穂保存会
- 駒井和愛・桜井清彦 1960「宮崎県児湯郡西都市寺原及び寺崎の遺跡」『高千穂 阿蘇』（財）神道文化会
- 茂山 護 1974「宮崎の経塚地名録」『研究紀要 昭和49年度』宮崎県総合博物館
- 青木 豊 1992『和鏡の文化史 ～水鑑から魔鏡まで～』刀水書房
- 杉山 洋 1994『浄土への祈り ～経塚が語る永遠の世界～』雄山閣
- 上村俊雄 1994「南九州出土の湖州鏡について」『鹿児島大学人文学科論集39号』鹿児島大学法文学部
- 横山哲英 1996「宮崎県内の経塚出土銭について」『出土銭貨 第6号』出土銭貨研究会
- 小林行雄 2000『古鏡』学生社
- 星野恵美 2008「服飾・化粧道具」『中世都市 博多を掘る』海鳥社
- 木下博文 2008「経塚・地鎮」『中世都市 博多を掘る』海鳥社
- 安藤正純 2010「宮崎県の中世の祭祀遺構について」『研究紀要 第6号』宮崎県立西都原考古博物館
- 村木二郎 2010「全国の経塚からみた堂ヶ谷」『平安時代の祈りと願い（シンポジウム発表要旨集）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 宮崎県 1927『宮崎県史蹟調査 第一輯』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『大岩田上村遺跡』
- 宮崎市教育委員会 1987『源藤遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1991『天神河内第1遺跡』
- 新富町 1992『新富町史 通史編』
- 宮崎県教育委員会 1994『鳩菌（東霧島神社）遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1995『学頭遺跡・八児遺跡』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『教塚遺跡・桁屋遺跡・大郎遺跡』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『林遺跡 II』

【註】

- 1) 県内での近世の鏡の出土例は、都城市の大岩田上村遺跡の柄鏡の事例がある。
- 2) 青木（1992）、小林（2000）を参考。
- 3) 木下（2008）
- 4) 他にも鏡が出土したという伝承は残っているようだが、確証がないため、この表では遺跡出土のものに限った。
- 5) 宮崎県教育委員会（1991）
- 6) 茂山（1974）
- 7) 正確に言うと、茂山氏は15箇所（経筒を埋納したと推定される遺構の数は計18、なお新富町新田竹淵は遺構数2基、都城市安久町中尾は遺構数3基でカウントした）の経塚が造成された地名をあげている。その一方で礫石経塚（一字一石経塚も含むものと思われる）に関しても12の地名をあげておられる。ただし、氏が礫石経塚の項目中であげておられる宮崎市愛宕神社境内経塚は、甕に経文（または経筒）を入れていたことが窺えるので、礫石経塚ではなく経筒埋納の経塚と考える方が無難である。（※この場合は、恐らく礫石には経文は書かれていなかった筈である。）よって茂山氏が記した経筒埋納の経塚は、地名で16箇所、遺構数では19基とさせていただいた。なお氏が掲載されている礫石経塚は大部分が近世の一字一石経塚とみられる。
- 8) 伝都万神社出土の経筒外容器は、旧西都原資料館で展示されていたことがあり、当館に残る当時のキャプションでは「平安時代」製作としている。また、宮崎県文化財課の堀田孝博氏の意見によると、この容器に関しては12世紀の東海地方での製作の可能性を指摘されている。なお私見ではあるが、県内の経塚で最も古いと考えられるのは、宮崎市の大島神社境内経塚である。金銅鑄経筒に「元永二年（1119）十一月十九日」、また施主の「惟宗氏」の刻銘があることから、12世紀初期のものと特定できる。さらに茂山（1974）論稿によると、惟宗氏が12世紀初期に日向国司であった時期があるとする。このように考えると宮崎県域に末法思想や経塚の風習を伝えたのは受領階級ではなかったかとも推定される。
- 9) 茂山掲載論稿（1974）以外で経塚の地名を確認できたのは、当館職員の甲斐氏の教示によるものが、高千穂町教塚遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2003）の1基、高千穂町二上遺跡経塚（藤寺非實 1939）の1基、新富町新田新町経塚（新富町 1992）の1基、宮崎市佐土原町平等寺趾経塚（宮崎県 1927）の1基で合計4基である。なお筆者自身の史料調査では西都市寺崎遺跡経塚（駒井・桜井 1960）の1基を確認し、さらに都城市高崎町鳩蘭（東霧島神社）遺跡（宮崎県教委 1994）の2基を暫定的に認定した。よって合計は7基となる。
- 10) 宮崎県教育委員会（1994）
- 11) 横山（1996）
- 12) 村木（2010）
- 13) 茂山論稿（1974）によると、県内では銅製積上式経筒が2筒（延岡市三須・宮崎市郡司分）出土している。また高千穂町教塚遺跡でも銅製積上式経筒片が3点出土している。村木論稿（2010）によると銅製積上式経筒は九州特有とされるが、註8）で述べたことから併せて考えると、県内への伝播は、畿内、北部九州、どちらの影響もあるのではないかと推測される。
- 14) 宮崎県埋蔵文化財センター（2008）

宮崎県内出土の長沙窯陶磁について

福田 泰典

はじめに

近年、県下における発掘調査において、これまで稀少資料として扱われてきた出土資料としての古代の貿易陶磁は、飛躍的にその数が増加したとは言えないまでも、その蓄積は確実に進んできている。例えば越州窯系青磁については、一昔前までは本県ではその出土点数も少なく特筆される稀少資料とされていたが、ここ数年の発掘調査によりその出土点数も増え、ある程度の比較検討ができるまでの量的蓄積が進んできた。また、それらの資料を有する遺跡の分布状況等の検討から、いかなる経路でそれらがもたらされたかなどの流通的側面からの研究も深化している。

しかし、越州窯系青磁等の量的蓄積に呼応せず、未だに県下では出土事例が少なく稀少資料といえる古代の貿易陶磁として、邢窯、定窯で生産された白磁や長沙窯の製品などがある。これらの貿易陶磁は、当時政治の中心であった京都を中心とする一帯や大宰府が置かれ海外との交易が盛んであった北部九州域では一定量の資料が出土している。その一方で、それ以外の地域では昨今の調査で出土事例が認められるようになってきたものの、未だにその出土点数は極めて少ない。

本稿では、このような稀少資料のうち、県内の3遺跡から出土した長沙窯陶磁を取り上げ、現時点での出土資料をここで再確認するとともに、これらの資料が出土したそれぞれの遺跡について、その性格等について考えてみたい。

1 長沙窯陶磁について

中国の湖南省長沙市望城県の湘江東岸に位置する石渚湖一帯にその窯跡は残されている。

長江の支流である湘江が北流し、その流れがもたらした肥沃な大地は、人々に豊穡をもたらした。そして同時に、その恵みを糧とする人々の営みは古くから様々な産業を発達させてきた。この地で生まれた窯業もその一つであり、現在にその伝統は引き継がれている。また、洞庭湖へと注ぎ、そこからさらに長江を介して海へと至る湘江の流れは、海外へと開かれた交易をも同時に約束した。長沙の地から広く海外へ製品がもたらされた要因は、この湘江の存在によるところが大きい。

長沙窯の操業開始時期は8世紀中葉頃とされ、晩唐期の9世紀にかけて盛期を迎えるものの、10世紀の初めには早くも衰退傾向に入る。その後、海外にまで広がった広域流通は次第に途絶え、中国内陸部の一地方窯として存続するに至ったとされている。しかしながら、発掘調査等で明らかになってきた長沙窯の製品は、比較的短期間のなかで数多くの特徴ある製品を生み出したことを物語る。

器種としては、碗・皿・鉢・壺・水注・唾壺・合子などがおもな製品としてあげられるが、これらの器種以外にも碾具灯明具・水滴・玩具など多様な製品が確認されている。これらの製品には、黄釉・青釉・緑釉・褐釉・黒釉などが施釉されるが、一つの特徴として青釉・黄釉のように透明感を求める製品の焼成に際し、釉下に白化粧を施すことがあげられる。褐釉などで銘文等を書いた装飾では、白地の胎土をベースとすることでその文字をさらに際立たせる効果もあった。その痕跡は、陶磁片の断面観察により比較的容易に観察することができる。

そしてもう一つの特徴として、貼花文による装飾がある。押型で作ったレリーフ状の文様を器表面に貼り付ける技法であり、水注の場合、貼花文、把手、耳、注口の範囲にのみ褐彩を施し、さらにその上から透明感のある黄釉を全体に施釉している。日本国内で出土する長沙窯陶器の大半は、この黄釉褐彩貼花文により装飾された水注であり、長沙窯製品のイメージとして想起される最も代表的な器種であると言えるであろう。



1 長沙窯 2 定窯 3 邢州窯 4 磁州窯
5 越州窯 6 景德鎮窯 7 龍泉窯 8 同安窯

第1図 長沙窯及び中国の主要窯跡の分布

2 県内の長沙窯陶器出土遺跡

宮崎県内でこれまでに長沙窯陶器が確認されている遺跡を第1表に示した。

現時点で情報として整理され、かつ、資料を実見することができたものを取り上げたが、県内ではその出土点数が極めて少ないこともあり、後出した資料が存在したとしても飛躍的に増加することはないと考える。

出土遺跡は今のところ3遺跡、資料点数として4片である。これらの遺跡の所在する場所は、いずれも古代日向を考える上で重要であり、長沙窯陶器の出土という事実と相まってその様相を考える手掛かりとなると考える。

この点については後で触れることとし、以下、出土遺跡と資料について概述する。



第2図 宮崎県内の長沙窯陶器出土遺跡

第1表 資料一覧

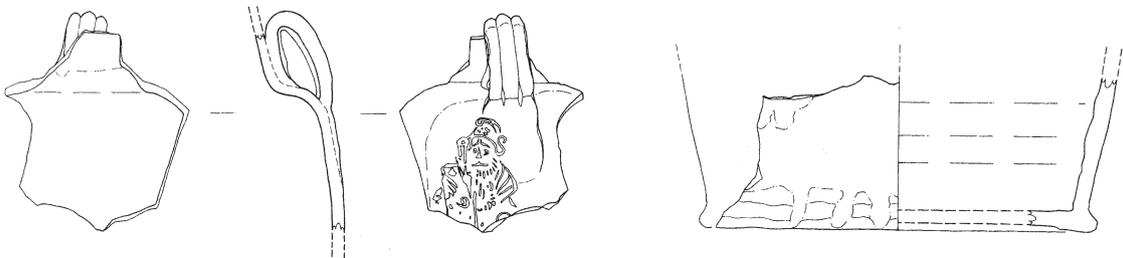
| | 遺跡名 | 所在地 | 出土資料 | 緯度(N)・経度(E) | 所蔵機関 |
|---|----------|----------------|-----------|---------------------------------|----------|
| 1 | 桜町遺跡 | 宮崎市花ヶ島町 | 黄釉褐彩貼花文水注 | N: 31° 57'03" E: 131° 26'25" 付近 | 宮崎市教育委員会 |
| 2 | 五反畑遺跡A地区 | 宮崎市清武町大字船形字五反畑 | 黄釉水注 | N: 31° 51'43" E: 131° 22'23" 付近 | 宮崎市教育委員会 |
| 3 | 堂ヶ嶋遺跡 | 西都市大字三宅字堂ヶ嶋 | 黄釉褐彩貼花文水注 | N: 31° 06'03" E: 131° 23'48" 付近 | 西都市教育委員会 |

桜町遺跡

遺跡は内陸側の丘陵地帯とその東側に南北に延びる第1砂丘との間、標高7m前後の堤間低地内の微高地（標高約8m前後、南北約210m、東西約110m）上で確認された。

平成15～17年度に宮崎市教育委員会により行われた調査では、古代のほかに弥生時代と近世の遺構が検出されている。このうち古代の遺構としては、掘立柱建物跡9棟、竪穴住居跡1軒、溝状遺構6条、土坑3基が認定されている。出土した長沙窯陶器は、資料①が5号土坑の遺構底面、資料②が10号土坑の検出面から1m弱の埋土中で確認された。この2基の土坑は上端の長軸で4m前後の規模があり、最下層で検出された硬化した鉄分沈殿層の自然科学分析等から井戸跡として報告されている。

資料①は頸部から胴部上位の破片であり、貼花人物文が確認できる。また、肩部には3本の粘土紐により成形された耳が完全な形で残るが、褐彩釉の剥落が激しい。人物文は腹部付近から上のみが残り、側面が反り返った唐代の特徴を示す冑と顎髭を蓄えた姿が印象的である。文様としては、右肩付近の角張った形状物の表現から串板を打つ姿（撃串板文）、もしくは右手の位置から鉞を打つ姿（撃鉞文）と考えられる。また、内面には鉄分と見られる茶褐色の付着物が認められる。資料②は褐彩が認められる胴部下位から底部の個体であり、残存高のほぼ半分の位置まで白化粧が施される。黄釉は底部までは施釉されず、底部外縁は無釉である。黄釉下に褐彩を用いる例としては、褐彩により曲線や連珠文様を描いたり、注口や貼花文付近へ部分的に施釉したりなど様々なヴァリエーションが存在するが、資料②の不規則に垂れ固まった褐釉は文様を構成するものではないと考えられる。したがって、貼花文の有無まで言及することはできないものの、一定の範囲にのみ施釉する褐彩と判断できる。残存高6cm程度の個体であるが、褐釉+黄釉、白化粧+黄釉、露胎の相異を一見することができる好資料でもある。



第3図 桜町遺跡出土資料実測図 (左:資料① 右:資料② S=1/3 文献1より転載)

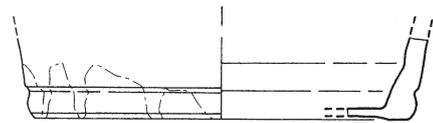
五反畑遺跡A地区

遺跡は、宮崎平野の南端に位置する鰐塚山山系に端を発する清武川を眼下に臨む、標高約35～36mの河岸段丘上に位置している。清武川の両側には河川の浸食により形成された河岸段丘が発達し、その段丘状には数多くの遺跡が点在している。遺跡が所在する船引地区一帯にも遺跡が数多く確認され、同地域の近年の調査で、清武上猪ノ原遺跡第5地区において縄文時代草創期の住居跡14軒がまとめて検出されたことや九州初となる矢柄研磨器があわせて出土したことは記憶に新しい。長沙窯の資料が出土した五反畑遺跡は、この上猪ノ原遺跡がある段丘面のすぐ下に位置する。

調査は平成19年度に清武町教育委員会（現宮崎市教育委員会）が実施し、古墳時代を除く縄文時代

から中近世までの遺構・遺物を確認している。古代の遺構としては、掘立柱建物跡3棟、土壙墓1基、溝状遺構1条、不明遺構1基を認定している。資料③は、13号溝状遺構から出土し、埋土中に含まれた9世紀後半から10世紀前半の時期幅に収まるその他の遺物とともに混在していた。

資料③は水注の底部である。残存高は約3.5cmであり黄釉が施釉されているが、褐彩や銘文等の痕跡は残存する部位には認められないことから、ここでは黄釉水注と判断するに留める。底部側面まで垂れた黄釉は一部が底部外面にまで回り込んでおり、施釉範囲と無釉となる範囲の境目付近で部分的に釉ちぢみが生じ、その下に施された白化粧の存在を視認することができる。資料を一見して、器表の内外面の調整がとても丁寧であり、桜町遺跡で出土した資料②と比べるとその点の相違が際立つ。残存する底部は非常に薄く仕上げられ、破断面の計測で厚みが2mmをわずかに越える程度である。底部の内外面に煤状の付着物が認められるが、内外面のほぼ対応する範囲に付着していることから、焼成時ではなく廃棄後の被熱により生じた痕跡と考えられる。同じく、胴部内外面に生じた微細な亀裂痕も、その間に釉が浸入しておらず、焼成時ではなく廃棄後の被熱等によるものと考えられる。



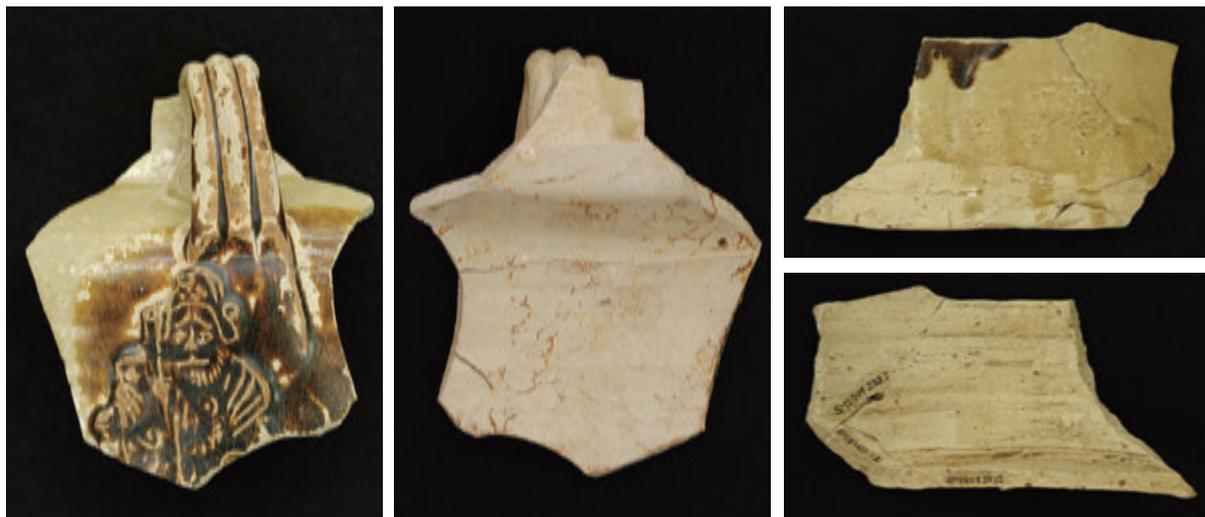
第4図 五反畑遺跡A地区出土資料実測図
(資料③ S=1/3 文献2より転載)

堂ヶ嶋遺跡

西都原古墳群が展開する台地の東側には、その一段下に南北方向に帯状に延びる標高20～30mの中間台地が形成され、さらにその東側に標高12m前後の沖積平地が広がっている。遺跡が確認されたのはこの中間台地上で、本遺跡のほかにも古代の日向国を考える上で重要な遺跡がこの台地上に多数点在している。平成12年に日向国衙跡と確定された寺崎遺跡の一带や、日向国分寺跡、国分尼寺跡（推定）などがその代表である。堂ヶ嶋遺跡は、この日向国衙跡の西に位置し、稚児ヶ池（稚児殿池）を挟んで国衙跡の西とは直線距離で400mほどしか離れていない。稚児ヶ池は、旧河道上に堤を築き造られた人造池で、堤の版築時期は15世紀代まで遡るといわれている。古代における付近の景観は判然としないが、小川もしくは旧河道の影響による湿地帯が周辺には広がっていたと考えられる。

今回の西都市教育委員会による調査は狭隘な範囲であり、時期的には古代の遺物が大半を占め、その他には近世の陶磁器が確認された程度である。長沙窯陶器と同時期の資料としては、越州窯系青磁や緑釉陶器などが出土している。遺跡付近は国衙跡の西と比してレベル的にわずかながら優位であることから、この付近に国衙跡を取り巻くように該期の遺構が展開している可能性も考えられる。遺構・遺物の詳細な検討は、近々刊行される調査報告書を参考されたい。

資料④は褐彩貼花人物文であり、黄釉褐彩貼花水注と判断できる。貼花のモチーフとなっている人物文は、左手を挙げ柔和な表情を見せる。着衣の襷の表現はリズムカルかつ優美なものであり、これは陶範の緻密な彫りを反映したものである。正面から見て顔の左側には、垂れ下がった一巾の布状の表現があり、着衣の表現とは明らかに異なることから手帕（手拭）舞文と考えられ、下げた右手から左にも文様の広がりを確認することができる。貼花文には焼成時に亀裂が生じ、5mm前後の豆粒状の膨らみが5箇所ほど認められる。貼花文を貼り付ける際の圧着が不十分であったことにより、胴部本体と貼り付けた貼花文の間に間隙が生じたことがその要因と考えられる。



資料①：頸部～胴部上位片 外面（上段左）
 同 内面（上段中）
 資料②：胴部下位～底部片 外面（上段右上）
 同 内面（上段右下）
 同 底部外面（下段左）

桜町遺跡出土資料（資料①・②）



資料③：胴部下位～底部 外面（上段左）
 同 内面（上段右）
 同 底部外面（下段左）

五反畑遺跡A地区出土資料（資料③）



資料④：胴部片 外面（左）
 同 内面（右）

堂ヶ嶋遺跡出土資料（資料④）

図版1 宮崎県内で確認された長沙窯陶器

3 資料の観察から

今回取り上げることができた資料は4点であり、比較検討する材料としては量的に乏しいが、これらの資料の実見から得た所見をまとめてみたい。

(1) 貼花文の断面痕跡について

陰型の陶範を用いて造られたレリーフ状の文様を貼り付ける貼花の技法は、その断面に明瞭な痕跡を残す。一見すると陰型をそのまま器表面に押し当てて立体的な文様とすることも可能に思えるが、器壁の厚さからして成形時に器壁に押圧を加えることは難しい。また、貼花文の文様構成は複雑かつ繊細であることに加え、文様の大きさからしても曲面に均一に押圧し文様を浮かびあがらせることは同じく困難である。したがって、文様を貼り付けるという技法は、貼花文があしらわれている部位等を考える時、理にかなった効率的な技法として採用されたことが分かる。

下の2枚写真は、資料①と資料④の断面である。詳細に観察すると、そこに一筋の白線状になった境目（▲印でその両端を印す）を確認することができる。写真では判然としないが、実見するとその存在をより明瞭に観察できる。白線状の筋は胴部本体に施された白化粧そのものであり、それを境に上が貼花文、下が胴部本体の器壁となる。このことから、成形 → 白化粧 → 貼花文貼付 → 褐彩 → 黄釉の施釉という一連の製作過程を確認することができる。また、資料のごく一部分に、褐釉と貼花文の間に極めて薄い白色の間層が認められた。貼花文の上からさらに白化粧を加えたようにも見えるが、貼花文の上から白化粧を加えることはその繊細な文様の凹凸を曖昧にすることになるとともに、褐彩という暗色系の釉下にさらに部分的に白化粧を施すことになることから考えにくい。この間層については、陶範から文様の剥離を容易にするために陶範自体を湿らしたり、剥離剤等を塗布したりしていたか、もしくは貼り付けた文様表面の調整に水を含んだ筆等を用いた際の影響かと考えるが推察の域を超えない。

資料同定に際し、白化粧の存在は大きな手掛かりとなる。ルーペ等を用いた観察でも釉下の白化粧の有無を確認することは比較的容易である。古代の貿易陶磁の同定で黄釉等の単色釉をもつ細片資料にあっては、白化粧の有無を確認する作業が必要となるであろう。

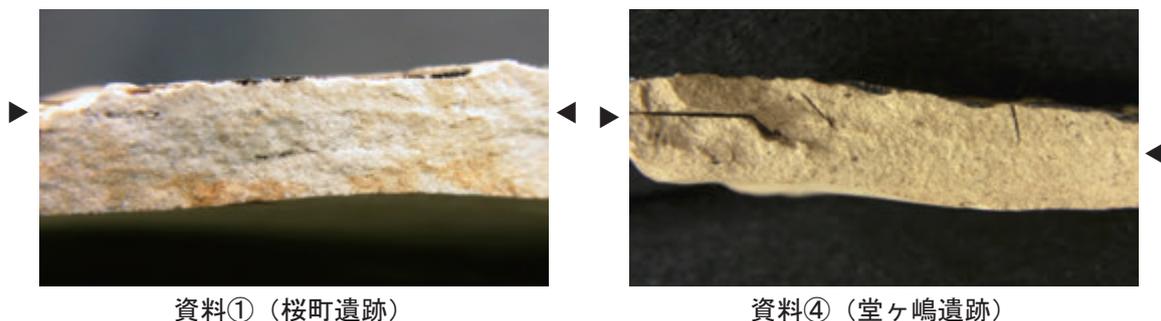


写真1 資料の断面に見る貼花と胴部の境目

(2) 胎土の観察

実見できた資料の胎土は、私的な感覚ではあるが色調としては灰白色もしくはわずかに鈍い黄色を帯びる灰色を呈していた。共通することは灰色をベースにした暗色系の胎土色調であり、それに灰色の濃淡の変化幅、もしくは弱い黄色が加わるということである。製品の製作過程において白化粧を施

す作業段階が存在することは、透明感のある黄釉の発色を期待する自然な発想と言えるかもしれない。

個々の資料については、その胎土を確認できる写真も示したが、蛍光灯、屋外間接光など撮影条件が一定でないことから資料本来の胎土色調を正確に反映していないことをここに明示する。したがって、4点の資料について色調という観点から写真情報のみで胎土を直接比較をすることは避けるが、胎土がもつ質感はある程度まで写真からも読み取ることができる。私的な見解ではあるが、胎土の雰囲気は一見すると瀬戸天目茶碗や漳州窯等に代表される華南系青花の胎土等に似た質感をもつ。断面の表面がやや粗く、そこに細砂粒や微細な気泡の痕跡を確認することができ、該期の越州窯系青磁の胎土と比べると粗い感じを受け、精良さにおいては格段の差がある。しかし、詳細に観察すると、胎土には珪酸成分に由来する光沢を放つ粒子が認められ、それが瓷石を原料とする瓷胎であることが明らかである。また、桜町遺跡から出土した資料②の胎土観察において、その胎土中に特徴的に含まれる約1.5mm前後の暗赤色粒状塊を確認した（写真2参照）。この粒状塊について、同遺跡から出土した資料①の胎土と比較検討を試みたが、同系色の微細粒をその胎土中にごくわずかに認めることができたものの、共通する粒状塊の確認には至らなかった。資料①と資料②については、この胎土の特徴と調整の相異から別個体として認識できる可能性を指摘しておきたい。

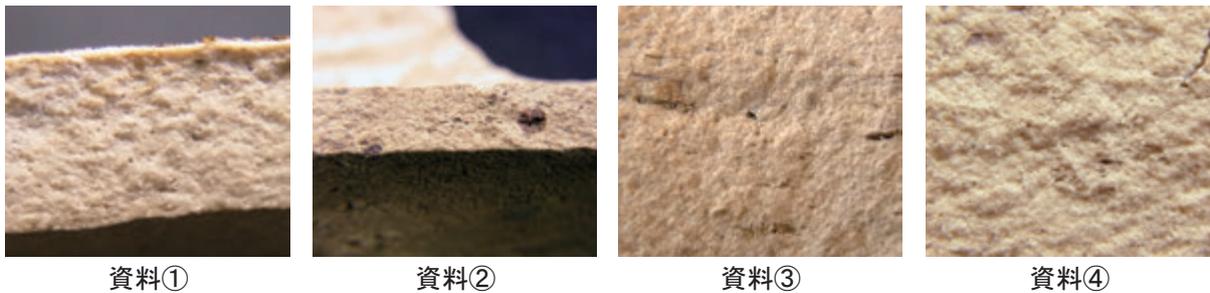


写真2 胎土の比較

4 出土遺跡の位置的理解

資料が出土した3遺跡については資料紹介の項で簡単ではあるがその概要を述べた。そこで、ここではこれらの遺跡が所在する場所についてさらに考えてみたい。このうち堂ヶ嶋遺跡については、国衙という当時の日向国の中枢に近接かつ併存した遺跡であり、周辺の該期の地域的様相もある程度明らかであることから、桜町遺跡、五反畑遺跡の2遺跡に絞り込みその位置的理解を試みる。

桜町遺跡の周辺には「坪平」や「七夕田」などの中世の名残を残す地名がわずかに残るが、遺跡の存在を意識させる手掛かりは皆無に近い。しかし、市街地周辺を含めやや広域の視点から俯瞰するとき、桜町遺跡と2つの地域の位置関係に着目する。地域の一つは桜町遺跡の東約2.8km付近に位置する江田神社を中心とする阿波岐原町一帯、そしてもう一つは、桜町遺跡から西に約2.5km付近に位置する下北方町一帯である。前者は弥生時代以降の各時代の遺跡が確認され、特に古墳時代の遺跡が濃集することや延喜式の日向国後期駅路の廣(石)田駅比定地として周知されている。そして後者の下北方町一帯でも数多くの遺跡が確認されており、下郷遺跡の弥生時代の環濠集落跡や下北方古墳群の存在が特筆される。加えて平成18年度に宮崎市教育委員会により調査が実施された下北方下郷第4遺跡では、検出された遺構や出土遺物の様相から古代郡衙の性格を付与されつつあり、その存在は今後も注視する必要がある。桜町遺跡とこの2つの地域はほぼ同一直線上に位置し、さらに桜町遺跡はこの

2つの地域の間付近に位置する。したがって、堤間低地の微高地に立地する桜町遺跡は、条件が整えば砂丘上に展開する阿波岐原町一帯と内陸丘陵の東端に位置する下北方町一帯の双方向からの視野に入る位置にあったと考えられる。また、古代の桜町遺跡については、郡衙別院や正倉別院といった郡衙関連施設的な性格を持ち合わせていた可能性も指摘されている(竹中2004)。未確定要素は多いものの、駅・郡衙・正倉といった公的施設を線で結ぶ「道」の存在も想起させる。

次に五反畑遺跡についてであるが、この遺跡の所在する船引地区付近を、古代駅路のルート上に想定する見方がある。これは、前述の廣(石)田駅の次に設置された救麻駅の比定地として、宮崎市熊野付近と同清武町杓掛付近とすることによる。未だ決着を見ないが、仮に杓掛付近とした場合、そのルートが都城盆地へ通じる現在の国道269号とほぼ沿う流れになり、いささかなりとも駅路を踏襲しているはずであるとする考え方が比定根拠の一つとなっている。また、僧俊寛等の鬼界島への遠流を題材とした『長門本平家物語』の海路日向国に至り南へと陸路を下る段に「… 鉄輪三足のさかに上りたまふ、…(中略)… それ室野、船引、大山、…(中略)…日向国西方が島津の庄に着給ふ…」とあり、この「船引」を現在の船引地区に比定し、古来から交通の要衝であったとする説もそれを補強するものとなっている。

このように桜町遺跡と五反畑遺跡の所在する位置は、古代日向の様相を探る上で注目すべき点を含んでおり、今後とも検討を要する。特に五反畑遺跡で検出された掘立柱建物跡3棟については、溝状遺構との関係においてそれが集落を構成する一要素であるのか、あるいはその他の主要施設に付随するものであるのかを検討する必要があると考える。

おわりに

長沙窯陶器が出土した3遺跡。個々の遺跡の性格をより明らかにするには、今後その周辺遺跡との関連等も踏まえた総合的判断が必要である。軽々にその評価が定まるとは考えにくい、その過程において長沙窯陶器が出土したという事実は、稀少資料であるが故に当該地域の様相を照らし出す一つの鍵となることは確かである。また、今回、長沙窯陶器を取り上げた理由は、稀少資料という性格に加え、これまでの自分の仕事の中で、細片として出土した長沙窯陶器を見逃してきたのではないかという自戒の念があるからである。拙稿が、長沙窯陶器の存在に留意する契機の一つになればと思う。

本稿の執筆に際し、下記の個人と機関に御協力いただいた。末筆ながら記して感謝申し上げる。

新名一仁(みやざき歴史文化館) 津曲大祐(西都市教育委員会) 宮崎市教育委員会 西都市教育委員会

【参考文献】

- 1 『桜町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第60集 竹中克繁 編 宮崎市教育委員会 2005
- 2 『五反畑遺跡A地区』清武町埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集 今村結記 編 清武町教育委員会 2009
- 3 『堂ヶ嶋第2遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第33集 釜瀬明宏 編 西都市教育委員会 2003
- 4 「長沙銅官鎮窯」三上次男『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』臨川書店 1993
- 5 「日本出土の古代貿易陶磁」土橋理子『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』臨川書店 1993
- 6 『長沙窯』周西榮・周聡 著 福田伸男 訳 二玄社 2003
- 7 『長沙窯 大唐文化輝煌之焦点』湖南美術出版社 2003
- 8 『長沙窯模印貼花 大唐陶器裝飾藝術之奇葩』湖南美術出版社 2008

東アジアにおける人と火の関係史解明に向けて ～台湾編

藤 木 聡

1. 問題の所在

人類の歴史において火の果たした役割は大きく、人は様々な方法で火を得てきた。私たちの住む日本列島における発火法は、火鑽棒と火鑽臼等を用いる摩擦式発火法ならびに火打金と火打石等を使う火花式発火法とに大別され（高嶋1985）、先行するのは各地の火鑽棒等の出土例から摩擦式発火法と判明している（たとえば小川1996・白鳥2005・中村2005）。火花式発火法の最古例は、宮崎をはじめ九州地方では、今のところ8世紀後半から9世紀初頭であり¹⁾、関東地方の調査研究成果（小川1996・関2002ほか）からはさらに7世紀後半にまで遡る可能性があり、その登場とは仏教や瓦等の大陸からの各種伝来と同期すると予想される（藤木2011）。

このような現状の中、問題となるのは、日本への文化伝来に関係すると予想される韓半島や中国大陸での発火具の様相把握が十分でない点である。また、日本九州と同じように東アジアの東端にあたる、台湾や琉球列島における発火具の歴史も積極的に説明されたことがない。北方ユーラシア地域における発火具の研究（林1994）を受けて日本への伝来の問題等が議論されたように（関2002ほか）、東アジア各地の人と火の関係史を解明し比較することは、文化の自生や伝播の流れを知ると同時にそれぞれに展開してきた固有の地域史をより深く知る材料としても期待される。

筆者はこれまでに、台湾大学図書館へ配架された遺跡発掘調査報告等の関連図書（2010年8月時点）を検索し、台湾における発火具出土遺跡等の把握に努めた。また、原住民族資料が豊富な台湾であるが、台湾大学人類学系博物館・台湾博物館・台湾史前文化博物館の所蔵資料について情報が得られ、台湾大学人類学系博物館が所蔵する原住民族資料について2010年12月に見学した。さらに、日本の国立民族学博物館のデータベースより台湾をはじめ世界各地の発火具に関する資料を検索した。

そこで今回は、台湾における発火具の関連資料について、これまでに把握できた中での成果と課題を挙げることで、東アジアにおける人と火の関係史解明に進んでゆきたい。とくに注目したいのは、火打石・火打金を用いた火花式発火法が、いつ、どういった経緯で台湾に登場するのかである。

2. 台湾の遺跡出土発火具の紹介

現在までに収集できた発掘資料のうち、台北縣十三行遺址・台南縣牛稠子遺址・宜蘭縣大竹園遺址・高雄市左營遺址が重要である。

十三行遺址（臧・劉2001）は十三行文化の標式となった金属器時代を代表する遺跡の1つである。報告によれば火打石が8点あり、金属器時代の包含層の上層となる近代漢文化層中²⁾より出土した。火打石はいずれも不規則で扁平で一端が尖ったような形状であり、周縁には使用による打撃痕が多数みられる。一般的な火打石あるいはガンフリント（槍用撃火石）³⁾である可能性が示されている（臧・劉2001：p116）。火打石の出土した近代漢文化層中には、火打石のほか、青花・硬陶・いくつかの銅製品・年代的に新しい銭貨が出土している⁴⁾。

牛稠子遺址（李1992）の火打石は2点あり、1トレンチ2層、14トレンチ1層中より各1点出土し

た。1層は表土（近代漢人文化層）であり、漢人の墓が掘り込まれ、層中には硬質土器・青花と少量の土器片が包含される。2層は先史時代の生活面ならびに包含層である。火打石は2点とも打ち割られた燧石⁵⁾ (flint) の小片製で、不定形であり、かなり鋭利な縁辺の部分もある。重量は小さい方が4gとかなり軽量である。火打石は2点とも地層上部出土であることから、先史時代の所産でなく、近代の漢人文化のものと考えられている。

大竹園遺址（劉1993）の火打石は1点あり、2トレンチの1層中より出土した。燧石（flint）製で平面は台形をしている。縁辺はいたるところに打撃による打ち欠けがある。2.07×1.03×2.37cm。近代の火打石と思われるとあり、写真図版中には“清代文化層”出土の火打石と記載される。清代文化層は清国中葉から日本統治時代初期に堆積したもので、主に磚・瓦・硬陶・釉陶・青花ならびに下層文化層由来の印紋陶片が出土する。

左營遺址（何・劉・鄭・陳2001）では、石質標本としてメノウ碎片4点が、発掘によるトレンチ中より出土した。1トレンチ2層出土は3.077×2.034×1.027cm・重量5.8g、2トレンチ2層出土は2.132×1.470cm・重量2.0g、2トレンチ5層出土は2.614×1.563×7.08cm・重量1.9g、6トレンチ2層出土は2.051×1.776×9.76cm・重量4.0gである。この類のものは清代の漢人に関連する遺跡あるいは晚期平埔族の遺跡において常に登場するが、用途は不詳と記載される。

この他、発掘資料として雲林縣及嘉義縣北港溪古笨港（崩溪缺）地点（何・劉2003）の火打石がある。採集品には花蓮縣復興遺址・萬寧遺址・竹田遺址・六十石山遺址・羅山遺址・公埔遺址・富里山遺址（張2006）、彰化縣菜園角遺址（彰化縣2008）、苗栗縣山佳遺址・山頂遺址（劉・林・伍2009）の例があり、すべて火打石である。

3. 台湾の発火具をめぐる若干の検討

一般に、台湾の発火具の変遷としては、摩擦式が古くより存在した後に火花式発火具が導入されたといくつかの原住民族資料の解説に付記されている。ここまで紹介したように、台湾における遺跡出土品の報告例は管見のかぎり火打石のみであり、火打金や摩擦式発火具はない。

まず、時期について言及可能な火打石の年代については、これまで検索しえた中では新石器時代から金属器時代にはなく、今のところいずれも清代以降の漢人文化に伴うとされる⁶⁾。漢人と台湾の関係について、たとえば宜蘭縣淇武蘭遺址では出土陶磁器数の増加と出土状況からみて、漢人の移住によって地域社会が変容してゆくことが示されている（謝2009）。陶磁器関連の研究結果と同様に、台湾における火花式発火具の登場は、漢人の移住に起因する可能性が高いとひとまずは位置づけておきたい⁷⁾。そうであれば、火花式発火具登場以前より用いられた摩擦式発火具の実態解明ならびに火花式発火具との共存の中で場面による使い分けがあったのか等について問題となってくる。また、火打石石材の産地やそこからの入手ならびに流通については、台湾内外の地質等を踏まえて広く探索される必要がある。これらは地学資料や原住民族資料をより精査する中で導いてゆくこととしよう。

次に、火打石に限られていた発掘資料について、火花式・摩擦式のいずれの発火具も存在する台湾の原住民族資料によって補うこととする⁸⁾。火打石とセットとなる火打金は多くの収蔵品があるが⁹⁾、台湾においては日本で多くみられるいわゆる山形や三角形、鋸形の火打金はない。台湾博物館・台湾



第1図 台湾の火打金と火打石

大学所蔵例も同様であるが、台湾原住民族資料の火打金は板状品である¹⁰⁾。法量の参考に、日本の国立民族学博物館所蔵標本例を挙げると、長6.8cm×幅2.1cm×厚0.3cm・重量23g (No. H0023639：魯凱 (Rukai) 族)、長7.5cm×幅2.7cm×厚0.4cm・重量34g (No. K0003651：泰雅 (Tayal) 族) である。国立民族学博物館標本を参照すると、板状の火打金は韓半島や中国大陸・日本・台湾・フィリピンに分布する。その年代観について判明している日本の例では、江戸時代以降等の新しい火打金として板状品は位置づけられる (山田1989・江戸東京博2002ほか)。今後、冒頭でも触れたが中国大陸の発火具の様相把握が重要であり、なぜなら出土火打石でみたように漢人の移住によって火花式発火具が定着してゆくのであれば、セットとなる火打金もその故地のものと共通する可能性があるからである。その上で、日本の板状の火打金の登場経緯も含め、相互の関係について議論を進める必要がある。

4. おわりに ～東アジアにおける人と火の関係史解明に向けて

ここまで、台湾における発火具について、遺跡出土品を中心に原住民族資料で補いつつみてきた。その結果、台湾における火花式発火具の登場は、漢人の移住に起因する可能性を考えた。また、火打石とセットの火打金の出土例は未見ながら、原住民族資料を参考にすれば板状の火打金であったと予

想され、故地となる中国大陸の発火具の様相把握の重要性が指摘された。

火花式発火具の導入をめぐる、台湾は17世紀清代以降の漢人移住に起因し、日本九州は7世紀以降の仏教や瓦等の大陸からの各種伝来に起因する可能性がある。同じ東アジアの東端に位置する島とはいえ、火花式発火法の導入される年代的開きは1,000年近いものがある。両者とも大陸方面からの影響による点では共通するものの、台湾と日本九州の両地域の歩んだ周辺地域との関係史の相違を強く感じさせるものとなった。

冒頭で触れたが、発火法等についてはほぼ不明なままとされている琉球においても、中国の王朝との接触により火花式発火具が登場するのではないかと予想することは勇み足であろうか。台湾・琉球・日本九州ほかにおける発火法の歴史からは、各地域の歩んだ歴史の個性が絡み合う東アジア史の一端が見えてくるものと期待する。

謝辞

本稿を進めるにあたり、特に台湾の多くの方に、資料や情報の提供から細かな点まで多くの御協力をいただいた。文末ではあるが御芳名を機関別に記し、感謝の意を表したい。

(台湾大学) 陳 有貝・侯 素蘭・謝 艾倫、(台湾博物館) 吳 伯禄、(台湾史前文化博物館) 葉 美珍・葉 長庚・王 勁之・張 雅惠、(国立民族学博物館) 塚部裕子、(江戸東京博物館) 小林 克

【註】

- 1) 発火具への認識不足から資料は未だ十分でなく、今後の更なる資料増と検討が求められている。
- 2) 「漢人文化」とはおおよそ清代以降に広東省や福建省等から台湾に移民した人々の文化を指す。
- 3) ガンフリントは16世紀以降のヨーロッパ諸国で火器の主力となり、たとえばイギリスのブランドン産の輸出網は中国や南米まで広がっていたという(西秋2006)。これまで日本列島周辺でガンフリントの出土例として、ロシア軍が北回りで持ち込んだと見られる千島列島の例(西秋2006)、オランダとの長崎出島貿易で輸入された銃に装着されていたと思われる長崎県岩原目付屋敷跡(長崎奉行所)の例(藤木2007)が挙げられ、台湾で出土するならばその履歴等を巡って大変興味深いものとなりうる。しかし、十三行遺跡出土品について図版(臧・劉2001)より判断したところ、淡褐色～黒褐色のフリント製で、ガンフリントではなく一般的な火打石とみられる。
- 4) なお、十三行文化層中に明代以前の青磁あるいは白磁質の碗・杯・瓶・匙等の中国陶磁器も包含されており、近代漢文化層の年代的上限をおおむね示していると思われる。
- 5) 「燧石(英名flint)」とは岩石名としての意味合いが強く、チャートやフリントあるいは石英そのものを指している。道具としての火打石は一般に「打火石(英名flint)」と表記され、たまに「燧石」の場合もある。
- 6) 採集品については時期特定が難しい。これは日本の資料でも同様であり、火打石が意図して作り出される型式を持つのではなく、使用の結果残された残滓であることに起因する。しかし、時代や地域によっては火打石石材の流行を見いだせるばあいもある。また、何をもちいて文化の指標・呼称の基準とするかという問題もあるが(たとえば陳2006)、ひとまず金属器時代とは漢人文化の登場以前という意味で用いることとした。

- 7) 筆者は当初、オランダとの接触が火花式発火具登場の一つの鍵になると予想していたが、これについては今のところ積極的な状況ではない。
- 8) 原住民族資料中の火打石にはプリント製のほか、石英・水晶（六角柱状のもの）等がみられる。摩擦式発火具は、数多くの資料がある。また、20世紀初頭に森丑之助らが進めた調査によると、火花を落として火種とする火口としてはヨモギあるいはバショウ（芭蕉）を干して繊維状にしたものが用いられたと記録されている。
- 9) 発火具等に関係する伝承・聞き取り等にも目を配る必要がある。
- 10) 発掘調査において板状の火打金が出土したばあい、明らかに火打石とセットで墓等の特定遺構中より発見される等の特殊な出土状況でないかぎり、特徴的な形状をなしていないが故に板状不明品や鉄片としか認識されない可能性である。日本でも同様の点が問題である。

【主要参考文献】

（中文・アルファベット順）

- 陳 有貝 2006 「淇武蘭遺址發掘對蘭陽平原史前研究的意義」『宜蘭文獻叢刊』27期
- 何 傳坤・劉 克竑 2003 『雲林縣及嘉義縣北港溪古笨港（崩溪缺）地点搶救考古調查及評估計畫』行政文化建設委員會
- 何 傳坤・劉 克竑・鄭 建文・陳 浩維 2001 『高雄市左營遺址範圍及保存價值研究計畫期末報告』
- 李 徳仁 1992 『台南縣仁徳郷牛稠子遺址試掘報告』国立台湾大学人類学研究所碩士論文
- 劉 益昌 1993 『宜蘭縣大竹園遺址初步調查報告』宜蘭文獻叢刊2、宜蘭縣立文化中心
- 劉 益昌・林 美智・伍 姜燕 2009 『苗栗縣考古遺址補查計畫成果報告書』苗栗縣政府国際文化局
- 謝 艾倫 2009 『宜蘭淇武蘭遺址出土外來陶瓷器之相關研究』国立台湾大学人類学研究所碩士論文
- 臧 振華・劉 益昌 2001 『十三行遺址：搶救與初步研究』台北縣政府文物局
- 彰化縣 2008 『彰化縣遺址普查計畫 第一期 彰化市 福興郷 花壇郷 芬園郷 員林鎮』
- 張 振岳 2006 「第三篇 史前」『富里郷誌』上卷、花蓮縣富里郷公所
- （日文・五十音順）
- 江戸東京博物館 2002 『火打ち道具の製作』東京都江戸東京博物館調査報告書第14集
- 小川貴司 1996 「火打石の提起する諸問題」『土筆』4
- 白鳥 章 2005 「千葉県内出土の発火具の集成と様相」『千葉県文化財センター研究紀要24』財団法人千葉県文化財センター
- 関 義則 2002 「埼玉県内出土の火打金」『埼玉考古』第37号、埼玉考古学会
- 高嶋幸男 1985 『火の道具』柏書房
- 中村 弘 2005 「兵庫県出土の木製発火具について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第4号
- 西秋良宏 2006 「東京大学総合研究博物館案内79 ガン・プリント」『文部科学教育通信』No.139
- 林 俊夫 1994 「北方ユーラシアの火打金－ウラル以東－」『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集
- 藤木 聡 2004 「九州における火打石・火打金－資料集成と基礎的な整理－」『古文化談叢』第51集、九州古文化研究会
- 藤木 聡 2007 「長崎発・火打石事情」『西海考古』第7号
- 藤木 聡 2011 「最古の火打石をめぐる諸問題」『古文化談叢』第65集、発刊35周年・小田先生喜寿記念号（3）
- 山田清朝 1989 「火打金について」『中尾城跡』兵庫県文化財調査報告書第67冊

隼人の楯の文様についての一考察

崎 田 一 郎

はじめに

隼人の楯は、昭和38年12月3日から昭和39年3月19日にかけて奈良国立文化財研究所が実施した平城宮発掘調査の第14次調査で出土した。この楯の表面には、渦文と鋸歯文の2種類の文様が描かれている(図1)。

今回は、かつて隼人が居住していた南九州や南西諸島の祭祀や儀礼から、楯に描かれた渦文について一つの考察を述べてみたいと思う。

1 出土した楯について

隼人の楯は、井戸杵として転用されていた状態で検出された。その点数は、完形品8、頭部のみの破片3、彩色の残る断片2、横棧板4であった。これらの他に腐植した小片も確認されている。

完形の8点の楯は、桧の一枚板からなり、その法量は、長さ149.6~153.0cm、幅45.3~50.8cmと8枚ともほぼ同じ大きさ(表1参照)で頂部を山形に作り出している。

これらは『延喜式』隼人司条で「枚別長五尺(約148cm)。廣一尺八寸(約53.28cm)。厚一寸(約2.96cm)。頭編著馬髪。以赤白土墨畫鈎形」と記された威儀用楯と法量がほぼ一致することから隼人の楯であることが判明した。

楯の表面には、頂部と底部に鋸歯文が描かれている。鋸歯文は、連続する5つの鋸歯を二重に施文しており、外側を黒、内側を赤で塗色している。渦文は、この上下の鋸歯文に挟まれる形で楯の広い面積を占めて描かれている。

渦文は上部と下部の2つの渦が中央部で繋がり逆S字形を形成している。この逆S字は赤と黒の2色で塗り分けられ、さらに余白の部分が白で塗色されているために、楯の中に3重の渦紋が視覚に映るデザインになっている。この渦文は、上部の渦文の外側を黒、内側を赤に塗色するもの(パターンA)と外側を赤、内側を黒に塗色するもの(パターンB)の2種類ある。

ここで注目したいのは、渦紋が独立した2つの円で構成されるのではなく、逆S字型の曲線で描かれている点である。

この様な独特の形状を描くのは、この逆S字型にはモデルとなるものがあり、それに何らかの意味が含まれているように思われる。



図1 隼人の楯復元図

奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮発掘調査報告Ⅸ 宮城門・大垣の調査』 奈良国立文化財研究所学報第34冊より

2 隼人の居住地と南西諸島との交流

隼人は、南九州から西九州の一部、種子島、甕島に居住していた先住民と考えられている。この隼人の居住地の遺跡からゴホウラ、オオツタノハ、イモガイ等の沖縄・南西諸島の珊瑚礁に生息する大型の貝類を加工した製品が出土している。これらの貝は、南海から九州へと繋がる「貝の道」(図2)によってもたらされたものと考えられている。

その他、日本列島への人類の移動や稲の伝来に南西諸島を北上する経路が考えられているように、この地域は紀元前から沖縄・南西諸島との交流が盛んであったと思われる。そして長い年月にわたる交流は、物質以外の祭司や儀礼といった精神文化も伝えることになったと考えられる。

3 蔓草を用いた南九州と南西諸島の祭司と儀礼

平成6(1994)年6月24日から平成7(1995)年3月28日にかけて実施された鹿児島県国分市上野原遺跡の発掘調査で赤色顔料を塗布した縄文早期の耳栓が出土した。

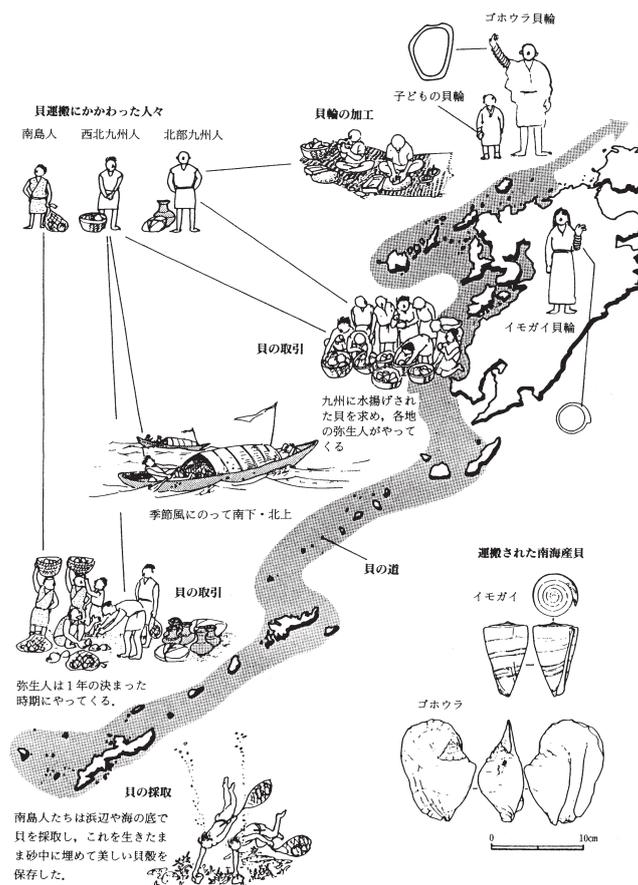
この耳栓には、隼人の盾の逆S字によく似たS字型の文様が描かれている(図3)。

これは、S字文が太古から南九州の地で描かれ続けられており、人々の生活に深く浸透し、周知さ

| No | 全長 | 幅 | 厚さ | | 渦文の パターン |
|----|-------|-------|-----|-----|-------------|
| | | | 最大 | 最小 | |
| 1 | 152.2 | 48.0 | 2.6 | 1.6 | A |
| 2 | 151.0 | 48.5 | 2.7 | 1.4 | B |
| 3 | 150.4 | 50.8 | 2.5 | 1.4 | B |
| 4 | 153.0 | 50.0 | 3.0 | 1.4 | B |
| 5 | 149.6 | 45.3 | 2.1 | 1.4 | B |
| 6 | 151.8 | 50.7 | 2.2 | 1.4 | A |
| 7 | 150.0 | 50.7 | 2.1 | 1.0 | B |
| 8 | 150.6 | 503.6 | 2.6 | 1.6 | B |

表1 隼人の楯寸法表

奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮発掘調査報告IX 宮城門・大垣の調査』 奈良国立文化財研究所学報第34冊より



貝の道 模式図

(南海産貝輪交易の前半の状況を、いくつかの推定と想像を混えて示してみた)

図2 貝の道

木下尚子1996『南島貝文化の研究』 (財)法政大学出版局より

れていた形状であったことをしめしている。

また、南九州と南西諸島の人々の精神文化を表す祭祀や儀礼の中には、来訪神の装束や儀式用具に特異な素材を用いるものがいくつかある。

図4は宮崎県串間市の広野地区に伝承されている「メゴスリ」と呼ばれる来訪神である。来訪神とは異界からこの世へ定期的に現れて来る神のことで、多くは、季節

の変わり目に集落に現れ、穀物の豊穰や厄除け・魔除けをして人々に幸福をもたらすとされている。

これらの来訪神は日本各地の祭司や儀礼に登場するが、その際、メゴスリのようにミノを身につけて集落に現れるものが多く見られる。ミノは、昔話「テングの隠れ蓑」で語られているように姿を隠したり、変身するときに用いる道具として登場している。これは、ミノをまとうことで非日常性や人間を超える能力が与えられるという信仰を表すものと言われている。

一方、南九州や南西諸島ではミノの代わりに蔓草を身にまとう来訪神が各地で見られる。図5は倉岡神社（宮崎市糸原）の御神幸祭に現れる「ハレハレ」と呼ばれる来訪神である。ハレハレはシュロミノの上から全身に葉の付いたカズラを巻き付け、腰に魚を入れるピクをさげて現れる。

また、南西諸島では、沖縄県宮古島の「パーントゥ」（図6）や沖縄県波照間島の「フサマラー」（図7）と呼ばれる来訪神にも同じ様な傾向が見られる。パーントゥは全身に泥を塗り、その上に蔓草の「キャン」をまとう。一方、「フサマラー」は、蔓草の「夕顔」と「ナーベ」を全身にまもって現れる。

来訪神以外のものでは、宮崎県えびの市水流地区の菅原神社の大祓（夏越し祓い）の祭司があげられる。ここでは祭司のために竹の輪にチガヤと野ブドウのつるを巻いた直径2mほどの茅の輪が作られる。この茅の輪は、7月25日の祭典（地元では「夏越し祭り」と呼ばれる。）まで神社の鳥居に飾られ（図9）、祭典に合わせて拝殿に運ばれる。祭典では、神主、氏子の順にこの輪をくぐった後、床の上に茅の輪を置き、その輪の中に入って、神殿を拝む儀式が行われる（図10）。

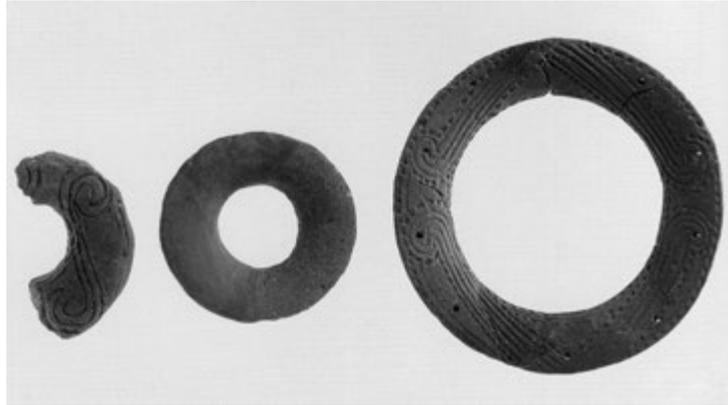


図3 上野原遺跡から出土した耳栓

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 『上野原遺跡（第10地点）』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集より



図4 メゴスリ



図5 ハレハレ



図8 九州・南西諸島位置図



図6 パーントウ



図7 フサマラー

これらの祭祀での蔓草の用い方をみてみると、来訪神の体につけられた蔓草は、先に述べたミノと同じ役割を果たしていることが考えられる。また蔓草製の茅の輪は、大祓の祭祀が心身を祓い清め、家内安全・無病息災を願うものであることから、蔓草が心身の清浄と護持の媒体としての役割も果たしていると考えられる。



図9 鳥居に付けられた茅の輪

4 まとめ

5世紀半、隼人は大和政権に服属し、その一部は近畿地方に移住した。移住した隼人の職務について『日本書紀』は、「是を以て、火酢芹命の苗裔、諸の隼人等、今に至るまで天皇の宮牆の傍を離れずして、代に吠ゆる狗して奉事する者なり」と記し、『延喜式』隼人司条は、「凡遠従駕行者、官人二人、史生二人、率大衣二人、番上隼人四人、及今来隼人十人供奉、番上已上並帶横刀騎馬、但大衣已下著木綿鬘、今来着緋肩巾、木綿鬘、帶横刀、執槍歩行、其駕経国界及山川道路之曲、今来隼人為吠」と記している。



図10 夏越し祭りの様子

これらの記述を見ると、「吠える」という行為が隼人の重要な任務であったことが読み取れる。これは、楯や槍等の通常の武器に加えて、邪気などを払う呪力が隼人の朝廷を守る重要な力の一つと認識されていた表れであろう。

戦闘において楯は、敵から身を隠し、敵の攻撃を防ぐ役割を果たしている。先に述べたように隼人は朝廷の守衛において呪術面を重視されていた。そして隼人の故地において蔓草は、姿を隠し、人間を超える能力を与えるとともに心身の清浄と護持の媒体の役割をされると考えられていた。以上のことから楯に描かれた逆S字状の渦文は、蔓草をモチーフにしたもので、これによって呪力を楯にやどし、その防御機能を高めようとしたことが考えられる。

4 終わりに

以上、隼人の楯の渦文について、一つの考察を述べてみた。今後も南九州や南西諸島、東アジア南部や東南アジアの習俗を調査し、過去から現在にいたる日本とこれらの地域との様々なつながりを見出していきたいと思う。また、今回論じることのできなかつた楯の上下に描かれた鋸歯文についても

何らかの見解を示せるよう資料収集に努めたいと思う。

5 謝辞

本稿の作成にあたり、パーントゥ、フサマラーの貴重な写真を提供してくださった宮古島市教育委員会と竹富町観光協会に心より感謝の意を表する。

参考文献

奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮発掘調査報告Ⅸ 宮城門・大垣の調査』 奈良国立文化財研究所学報第34冊

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 『上野原遺跡（第10地点）』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集

中村明蔵 1993 『隼人の研究』 丸山学芸図書

中村明蔵 2000 『神になった隼人 日向神話の誕生と再生』 南日本新聞社

杉岡幸徳 2007 『奇妙な祭り 日本全国〈奇祭・珍祭〉四四選』 角川書店

木下尚子1996『南島貝文化の研究』 (財)法政大学出版局

田中聡 2007 「隼人・熊襲と古代国家」『日向・薩摩・大隅の原像 南九州の弥生文化』大阪府立弥生文化博物館

橋本美佳 2006 「南海産貝製品とは」『特別展 貝の来た道 ～東の道は存在したか～』宮崎県立西都原考古博物館

西都原古墳群出土埴輪の補足調査

—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—

犬木 努・近藤 麻美・金行美智子

1. はじめに

西都原古墳群では、1995（平成7）年以来、史跡整備に伴う発掘調査が実施され、様々な新知見が得られている。なかでも、西都原169号墳・170号墳・171号墳の発掘調査では多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土し、それらについては、既に報告書が刊行されている（松林2003、同2004、犬木ほか2008、同2010）。

また筆者らは、上記のような「平成の発掘調査」の関連調査として、大正調査における西都原171号墳出土埴輪（京都大学総合博物館所蔵）や女狭穂塚古墳出土埴輪（宮内庁書陵部所蔵）についても、大半の埴輪の実測等を終了しており、報告書として近刊の予定である。大正調査における西都原169号墳出土埴輪（東京国立博物館所蔵）の調査成果については、既に刊行済である（犬木ほか2010）。

小稿は、上記のような西都原古墳群出土埴輪に関する基礎的資料調査の一環として、宮崎県総合博物館から宮崎県立西都原考古博物館に移管された埴輪について、今日的視点から再検討することを目的とする¹⁾。

2. 本稿で検討する埴輪について

現在、宮崎県立西都原考古博物館には、宮崎県総合博物館（西都原資料館）から移管された埴輪がいくつか所蔵されている。西都原資料館は、宮崎県総合博物館の分館として、昭和43（1968）年に西都原風土記の丘内に設置された展示施設である。

宮崎県総合博物館から刊行されている収藏品目録（宮崎県総合博物館1983b）によると、かつて同館に所蔵されていた西都原古墳群出土埴輪は下記の通りである。記載内容は、番号：品名／出土地／数量／収蔵経緯／登録番号／備考の順である。「G L」は宮崎神宮からの寄託品であることを示す記号である。

71：埴輪片／西都市西都原古墳／3／（宮崎神宮）／G L 23～25／

74：埴輪円筒／西都市西都原古墳／5／／172／資料館

110：円筒埴輪片／西都市西都原女狭穂塚／2／（宮崎神宮）／G L 40／

111：円筒埴輪片／西都市西都原／10／（宮崎神宮）／G L 22～26／

また、ほぼ同時期に刊行された西都原資料館の収藏品目録（宮崎県総合博物館1983a）によると、同資料館の収藏品として下記の埴輪が記載されている。

158：象形埴輪残欠^マ／西都市大字三宅西都原周辺／3／／／本館より移管

159：円筒埴輪／西都市大字三宅西都原周辺／6／／／本館より移管

現在、宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている埴輪との対応関係については不明瞭な点も多いが、次節以下で紹介する円筒埴輪10個体（図1-1～10）が上記の111、円筒埴輪片1点（図1-12）が上記の110、埴輪片6点（図2-14～19）が上記の159に相当するものと考えている。なお、円筒埴輪片1点（図1-11）には「G L 40-3」という注記がなされており、上記110の2点に付属するもの

とも考えられる。また、形象埴輪片1点(図2-13)には「GL29」と記載されたラベルが貼付されており、宮崎神宮徴古館からの寄託品と思われるが、上記目録には記載されていない番号である。

3. 宮崎神宮徴古館旧蔵の埴輪について

(1) 概要

宮崎神宮徴古館に所蔵されていた埴輪のうち、現在、西都原考古博物館において確認できるのは、①基底部が残存する円筒埴輪10個体(図1-1~10)、②「女狭穂塚」古墳出土とされる円筒埴輪片1点(図1-12)、③蓋形埴輪片1点(図3-20)、④円筒埴輪片1点(図1-11)、⑤形象埴輪片1点(図2-13)である。これらの埴輪の多くには、「宮崎神宮徴古館」のラベルが付されている。いずれも「西都原出土」と記載されており、『宮崎神宮徴古館陳列品解説書』(宮崎神宮社務所1941)に所収されている西都原古墳群出土埴輪に該当すると思われる。なお、②のみ「女狭穂塚」と記された別のラベルも貼付されている。

(2) 西都原古墳群出土の円筒埴輪について

上記の通り、宮崎神宮徴古館に所蔵されていた埴輪のうち、基底部が残存する円筒埴輪は10個体確認できる。この円筒埴輪10個体に付されている宮崎県総合博物館時代のラベルを見ると、各円筒埴輪に1~10という番号が付されているので、本稿でもそれを踏襲し、それぞれ円筒埴輪No.1~No.10と呼称しておく。

なお、埴輪の底面拓本は、実測図正面の中軸線に相当する部分が上になるように配置している。また、底面拓本には、基部粘土帯の接合方法に応じて、下記のような記号を付した。粘土帯の接合面の両端に▲印、基部粘土帯の内外に分厚く粘土が付加されている場合はその両端に△印を付している。

1) 円筒埴輪No.1 (図1-1、図2-1、図版1-1)

概要 第2段目途中まで残る。器壁は基部から直立気味に立ち上がり、重厚な印象を受ける。全体にしっかりとした作りである。

底部・基部 基部は粘土板1枚を1箇所接合する。R接合である。底面には太い棒状圧痕が目立つほか、茎状圧痕や砂礫痕も見られる。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が幅広く見られる。

成整形 外面は第1・2段目とも縦方向の刷毛目調整を施す。刷毛目は細かく、やや鈍い印象である。内面には縦方向ないし斜方向の指ナデ調整を施す。第1突帯内面には横方向の指ナデが見られる。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。貼付粘土量が多く、突帯の上稜・下稜はそれほど鋭くはないが、全体としてしっかりとした作りである。上稜に比べて下稜の突出度が小さい。突帯下側の指ナデは丁寧である。透孔は残存しない。第3段目のみに透孔を穿孔していたと思われる。

焼成・色調 外面は淡褐色~淡灰褐色を呈し、焼成はやや良好である。

法量 底面の短径21.6cm、長径22.5cm。第1段幅15.4cm。残存高23.0cm。

備考 『西都原発掘75周年展図録』(以下、『75周年展図録』)114頁No.13。

2) 円筒埴輪No.2 (図1-2、図2-2、図版1-2)

概要 第2段目の途中まで残る。底部および第1突帯は全周する。器壁は基部から直立気味に立ち上がり、やや細身のプロポーションである。

底部・基部 基部は粘土板2枚を2箇所て接合する。一方はL接合、もう一方はR接合である。底面には、細い茎状圧痕や礫・細砂の圧痕が見られる。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が幅広く看取できる。

成整形 第1段目外面には、縦方向のナデ調整ののち上半部のみB種横刷毛を施す。第2段目外面にはB種横刷毛調整を施す。第1段目横刷毛の工具幅は約3.7cm、静止痕間隔は3.0~3.5cm程度である。内面には縦方向の指ナデ調整を非常に丁寧に施す。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。上稜と下稜の突出度がほぼ等しい箇所と、下稜の突出度が僅かに小さい箇所がある。端面が僅かに凹面をなす部分がある。突帯下側の指ナデは丁寧である。突帯は剥離しておらず、凹線の有無は不明である。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色をなし、焼成はやや良好である。

法量 底面の短径は18.9cm、長径は19.5cm。第1段幅15.9cm。残存高24.1cm。

備考 『75周年展図録』113頁No.11。

3) 円筒埴輪No.3 (図1-3、図2-3、図版1-3)

概要 第2段目の上端部、第2突帯の剥離箇所まで残存する。底部および第1突帯は全周する。器壁は、基部から僅かに内湾したのち、外傾気味に立ち上がる。器壁・突帯とも重厚な印象を受ける。第1段目がやや広く、第2段目がやや狭い。

底部・基部 基部は粘土板2枚を2箇所て接合する。一方はL接合、もう一方はR接合である。底面は磨滅のため不明瞭であるが、細い茎状圧痕が残ると思われる。基部外面には、突帯間隔設定に伴う横位擦痕が見られる。

成整形 外面は第1・2段目とも縦方向のナデ調整を施す。内面には縦方向の指ナデ調整を施す。第1段目下半内面および第2段目中位内面に粘土紐接合痕が目立つ。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。突出度が高く、広い端面をもつ。貼付粘土量が多く、断面コ字状のしっかりとした突帯である。上稜に比べて下稜の突出度がわずかに低く、貼付位置は僅かに波打っている。突帯下側の指ナデは丁寧である。第2突帯の剥離痕が残るが、凹線は見られない。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色~淡橙褐色を呈し、焼成はやや不良である。第1段目上半から第1突帯にかけて、一部に黒斑が認められる。

法量 底面の短径18.5cm、長径20.2cm。第1段幅14.7cm、第2段幅10.8cm(推定)。残存高26.2cm。

備考 『75周年展図録』115頁No.16。

4) 円筒埴輪No.4 (図1-4、図2-4、図版1-4)

概要 第2段目の下半まで残存する。底部および第1突帯は全周する。器壁は、基部から直立気味に

立ち上がる。底径はやや小さく、第1段目の幅はやや広い。全体として端正な作りである。

底部・基部 基部粘土板の接合箇所は不明瞭である。底面には太い棒状の圧痕のほか、細い茎状の圧痕が残る。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が広く残る。

成整形 第1段目外面には、縦方向の刷毛調整ののち上半部のみB種横刷毛を施す。第2段目外面にはB種横刷毛を施す。第1段目の横刷毛の工具幅は約6.5cm、静止痕間隔は2.5～3.5cm程度である。内面には縦方向の指ナデ調整を行う。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。突出度はそれほど高くなく、端面は凹面をなす。突帯下面はやや丸みを帯び、突帯下側の指ナデはやや不十分である。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色～淡黄橙褐色を呈し、焼成はやや良好である。黒斑はほぼ対向する2箇所に残る。一方の黒斑は、第1段目下半部に僅かに残る。もう一方の黒斑は、第1段目中位から第1突帯にかけてわずかに灰色化している。

法量 底面の短径18.4cm、長径18.8cm。第1段幅15.8cm。残存高19.8cm。

備考 『75周年展図録』113頁No.9。

5) 円筒埴輪No.5 (図1-5、図2-5、図版1-5)

概要 第3段目の途中まで残る。底部および第1突帯は全周するが、第2突帯は剥離する。底径は大きく、器壁は基部から直立気味に立ち上がる。全体に端正な作りで、重厚な印象を受ける。第1段目がやや広く、第2段目がやや狭い。

底部・基部 基部は粘土板2枚を2箇所接合する。一方はL接合、もう一方はR接合である。底面は比較的平滑で、一部に棒状や茎状の圧痕が残る。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が見られる。

成整形 外面は第1段目から第3段目まで縦方向の刷毛目調整を施す。刷毛目は細かく浅い。第1段目の内面には斜方向の指ナデ調整を施し、それより上部には横方向・斜方向の刷毛目調整を行う。第2突帯内面付近には明瞭な粘土紐接合痕が見られる。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。上稜に比べて下稜の突出度が低い台形をなす。明瞭な端面が作出されている箇所と、下稜が不明瞭で突帯下面が丸みを帯びる箇所がある。突帯下側の指ナデは丁寧である。第2突帯の剥離箇所には、幅6.5mm程度の凹線が残る。透孔は残存しない。第3段目にのみ透孔を穿孔していたと思われる。

焼成・色調 外面は淡褐色を呈し、焼成は良好である。第1段目から第2段目にかけて黒斑が見られる。透孔の下に当たる位置である。

法量 底面の短径20.5cm、長径25.5cm。第1段幅15.6cm、第2段幅12.4cm(推定)。残存高30.1cm。

備考 『75周年展図録』115頁No.15。

6) 円筒埴輪No.6 (図1-6、図2-6、図版1-6)

概要 第2段目の途中まで残る。底部および第1突帯が全周する。第1段中位で僅かに内湾するプローションを呈する。器壁が全体としてやや厚い。

底部・基部 基部は粘土板1枚を1箇所て接合する。L接合である。底面には細い茎状圧痕のほか、礫および礫の圧痕が多数残る。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が見られる。

成整形 外面の第1段目には縦方向の刷毛目調整を施し、第2段目には縦方向の刷毛目調整ののち、横方向の刷毛目調整を行う。横刷毛は上下に大きく波打ち、静止痕は不明瞭である。内面には縦方向の指ナデののち、横方向・斜方向の刷毛目調整を行う。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。上稜と下稜の突出度はほとんど変わらず、端面は凹面状をなす。突帯下側の指ナデは不十分である。突帯の剥離箇所には幅5～6mm程度の弱い指ナデが残るが明瞭な凹線は見られない。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色～淡黄褐色を呈し、焼成はやや良好である。黒斑はほぼ対向する2箇所に残る。一方の黒斑は、第1段目および第1突帯上に点々と残る。もう一方の黒斑は、第1段目上端から第2段目下端にかけて認められる。

法量 底面の短径22.7cm、長径23.9cm。第1段幅14.6cm。残存幅22.3cm。

備考 『75周年展図録』112頁No.8.

7) 円筒埴輪No.7 (図1-7、図2-7、図版1-7)

概要 第2段目下端まで残存する。底部は全周し、第1突帯も一部剥離している以外は全周する。基部はやや歪んでおり、全体として端正な作りではない。やや細身の印象を受ける。

底部・基部 基部は粘土板2枚を2箇所て接合する。一方はL接合、もう一方はR接合である。底面は平滑で、茎状圧痕が残る。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が幅広く残る。

成整形 外面は第1・2段目とも縦方向の刷毛目調整を施す。刷毛目は浅く細かいが、板ナデに近い。内面には縦方向の指ナデ調整を丁寧に施す。所々に粘土紐接合痕が看取できる。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。上稜に比べて下稜の突出度が小さく、下面は丸みを帯びる。突帯下側の指ナデは粗雑な箇所が多い。突帯の剥離箇所には凹線は看取できない。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色・淡灰褐色・淡黄褐色を呈し、焼成は普通である。黒斑は認められない。

法量 底面の短径20.7cm、長径21.2cm。第1段幅14.9cm。残存高20.1cm。

備考 『75周年展図録』115頁No.17。

8) 円筒埴輪No.8 (図1-8、図2-8、図版1-8)

概要 第2段目途中まで残存する。底部および第1突帯は全周する。底径はやや小さく、器壁は僅かに外傾気味に直線的に立ち上がる。

底部・基部 基部は粘土板2枚を2箇所て接合する。2箇所ともL接合である。底面は磨滅のため不明瞭であるが、茎状圧痕が看取できる。磨滅のため、基部外面の横位擦痕の有無は不明である。

成整形 第1段目外面には縦方向の刷毛目調整が僅かに残るが、第2段目の外面調整は磨滅のため不明である。内面には縦方向の指ナデ調整を施す。内面の一部に粘土紐接合痕が残る。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。貼付粘土量は少なく、突出度はやや低い。上稜および下稜の突出度はほぼ同じで、端面はそれほど広くない。突帯下側の指ナデは丁寧である。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色～淡橙褐色を呈し、焼成は不良である。黒斑は第1段目の一部に認められる。

法量 底面の短径17.6cm、長径19.5cm。第1段幅15.3cm。残存高20.9cm。

備考 『75周年展図録』114頁No.12。

9) 円筒埴輪No.9 (図1-9、図2-9、図版2-9)

概要 第2段目の途中まで残る。底部は全周する。第1突帯は全体の4分の3程度残り、剥離箇所はない。器壁は基部から外傾気味に直立する。底径はやや小さく、全体として端正な作りである。

底部・基部 基部は粘土板2枚を2箇所接合する。一方はL接合、もう一方はR接合である。底面は比較的平滑で、一部に棒状や茎状の圧痕が残る。基部外面には突帯間隔設定に伴う横位擦痕が幅広く残る。

成整形 第1段目外面には、縦方向のナデ調整ののち上半部のみB種横刷毛を施す。第2段目外面には下半部および上半部にB種横刷毛を施す。第1・2段目とも、横刷毛の工具幅は約7cm、静止痕間隔は2～3cm程度である。内面には縦方向の指ナデ調整を行う。

突帯・透孔 第1突帯のみ残存する。突帯の貼付粘土量はそれほど多くない。上稜・下稜とも明瞭で、直線的に伸びる突帯は非常に端正な作りである。上稜より下稜の方が僅かに突出度が低い。突帯上下とも指ナデは丁寧である。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は淡褐色を呈し、焼成は良好である。黒斑は、第1段目の一部に点々と残る。

法量 底面の短径18.3cm、長径18.9cm。第1段幅15.4cm。残存高23.0cm。

備考 『75周年展図録』113頁No.10。

10) 円筒埴輪No.10 (図1-10、図2-10、図版2-10)

概要 第2段目の途中まで残る。底部および第1突帯は全周する。やや細身のプロポーションを呈する。器壁は底部直上付近で僅かに内湾したのち、緩やかに外傾気味に伸びる。

底部・基部 基部粘土板の接合箇所は不明瞭である。基部の外側に薄く粘土を付加している。底面には直径1.5～2cm程度の棒状圧痕が残る。磨滅のため、基部外面の横位擦痕の有無は不明である。

成整形 外面は第1・2段目とも縦方向の刷毛目調整を施す。刷毛目は細かい。内面には縦方向の指ナデ調整を施す。

突帯・透孔 上稜よりも下稜の方がわずかに突出度が低い。貼付される粘土量は多くなく、突出度も高くない。突帯上側の指ナデはやや強く、凹面をなしている。突帯下側の指ナデは丁寧である。透孔は残存しない。

焼成・色調 外面は橙褐色～黄橙褐色を呈し、焼成はやや不良である。第1段目から第2段目にかけて黒斑が見られる。黒斑部分は焼成良好である。

法量 底面の短径19.0cm、長径22.4cm。第1段幅15.1cm。残存高22.6cm。

備考 『75周年展図録』114頁No.14。

(3) その他の埴輪について

1) 「女狭穂塚」出土の円筒埴輪破片 (図1-12、図版2-12)

胴部の破片。突帯が残存する。「女狭穂塚古墳」というラベルが貼付され、「GL40」という注記が見られる。焼成不良で摩滅しており、内外面の調整や突帯の形状は不明瞭である。

2) 蓋形埴輪破片 (図3-20、図版2-20)

立飾板および受部の破片。宮崎神宮徴古館のラベルには「西都原出土」と記載されている。立飾板の各面には線刻紋様が確認できる。焼成は良好で、淡褐色を呈する。

3) 円筒埴輪破片 (図1-11、図版2-11)

胴部の破片。突帯を含む。「GL40-3」という注記が見られる。外面調整は縦刷毛のちB種横刷毛が施される。

4) 形象埴輪破片 (図2-13、図版2-13)

器種は不確定であるが、衝立形埴輪などの可能性がある²⁾。宮崎神宮徴古館のラベルには「西都原出土」と記載されている。

4. 宮崎県総合博物館に所蔵されていたその他の埴輪について

上記以外にも、宮崎県総合博物館にはいくつかの埴輪片が所蔵されていた。当該埴輪片6点(図2-14~19、図版2-14~19)には、同筆による「169号」という注記がなされ、一部の埴輪には「52.3.25」という注記も見られる。おそらく「昭和52年」を指しており、採集年月日を示す可能性が高い。西都原資料館開館後に採集された埴輪と思われる。

普通円筒埴輪の体部の破片(図2-19)のほか、朝顔形円筒埴輪の肩部の破片(図2-18)も見られる。図2-17は罌付壺形埴輪の罌部の破片である。図2-14~16は罌付壺形埴輪ないし朝顔形円筒埴輪の破片と思われる。図2-14は口縁端部、15は口縁部突帯、16は肩部の破片である。

5. まとめに代えて

西都原古墳群の多くが立地する上位段丘面において、埴輪の樹立が明確に確認されているのは、女狭穂塚・男狭穂塚・西都原169号墳・170号墳・171号墳という5基の古墳に限定されている³⁾。筆者らによるこれまでの調査研究において、上記5古墳の出土埴輪が、①女狭穂塚古墳・西都原171号墳・169号墳、②男狭穂塚古墳・西都原170号墳という二つのグループに大別できることが明らかになっている(犬木2007)。筆者の一人である犬木は、前者を「女狭穂塚系列」、後者を「男狭穂塚系列」と仮称している。

小稿において再実測図を提示した宮崎神宮徴古館旧蔵の円筒埴輪10個体(図1-1~10、図版1-1~8、図版2-9・10)は、出土古墳が不明であるが、各部の特徴を見る限り、明らかに「女狭穂塚系列」に帰属するものである。これだけ多くの円筒埴輪が女狭穂塚古墳から採集されたとは考え難いし、大正調査や平成調査で西都原169号墳・171号墳から出土した埴輪と酷似していることから、現時点では、両古墳のいずれかから出土したものと推測しておきたい。

また、蓋形埴輪(図3-20)については、出土古墳が不明であるが、現段階では、171号墳から出土

した可能性を想定しておきたい。170号墳では蓋形埴輪の樹立が確認されておらず、また169号墳出土の蓋形埴輪は総じて焼成不良で橙褐色を呈する破片が多数を占めており、171号墳から出土した蓋形埴輪の焼成・色調と類似する点などがその根拠である。

今後、上記の円筒埴輪10個体や蓋形埴輪については、「女狭穂塚系列」を構成する埴輪工人との異同などを詳細に検討する必要があるが、それについては、女狭穂塚古墳や西都原171号墳・169号墳から出土した埴輪と合わせて検討することとし、機会を改めたいと思う。小稿で提示した基礎資料が、西都原古墳群研究の一助となれば幸いである。

謝辞 小稿で紹介した埴輪も含めて、宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている埴輪の調査研究に際しては、宮崎県立西都原考古博物館の北郷泰道・東 憲章・二宮満夫・橋本英俊・吉本正典・甲斐貴充・福田泰典・藤木 聡の諸氏、宮崎県教育委員会の松林豊樹氏のお世話になりました（所属は全て調査時、年次順）。心より感謝申し上げます。また本紀要への掲載にあたっては、福田泰典氏のご高配を得ました。記して深謝いたします。

付記 実測は犬木（大阪大谷大学）・近藤（大阪大谷大学大学院生）・金行（同前）、トレースは近藤、拓本は犬木・近藤・児玉翔太（大阪大谷大学学生）が行った。写真撮影は、近藤の協力を得て犬木が行った。挿図および写真図版の版組は近藤の協力を得て犬木が行った。原稿執筆は、1・2・5を犬木、3・4を犬木・近藤・金行が行った。

註

- 1) 宮崎県総合博物館旧蔵の埴輪については、1988年に宮崎県総合博物館で実施された「西都原発掘75周年展」において、おそらく初めて全容が紹介された（石川悦雄1988）。西都原古墳群の埴輪というと、東京国立博物館所蔵の子持家形埴輪や船形埴輪のイメージが、長い間一人歩きしてきたが、上記の展示は、長い間忘れてきた埴輪に光を当てた基礎作業として高く評価されるべき仕事である。それ以前には、石川恒太郎が、『宮崎県の考古学』（石川恒太郎1969）において、西都原古墳群出土の円筒埴輪1個体の写真を掲載しているのが眼につく（同書240頁）。当該埴輪は小稿における円筒埴輪No.9に該当する。
- 2) この形象埴輪から採取したサンプルについて蛍光X線分析を行った結果、他の西都原古墳群出土埴輪とは大きく異なる数値を示した（三辻2011、本紀要所収）。本埴輪片は比較的明るい橙褐色を呈しており、これまでに確認されている西都原古墳群出土埴輪（女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳・西都原169号墳・170号墳・171号墳）には見られない色調を示す点とも矛盾しない。以上から、当該破片については、現時点では上記5古墳以外の古墳からの出土品である可能性が高いと考えられる。ただし、西都原古墳群内の上記5古墳以外の古墳から出土した可能性をも否定するものではない。
- 3) 西都原台地の中位面では、西都原212号墳で埴輪の出土が確認されている。当該埴輪については松林豊樹氏（宮崎県埋蔵文化財センター）のご教示を得た。

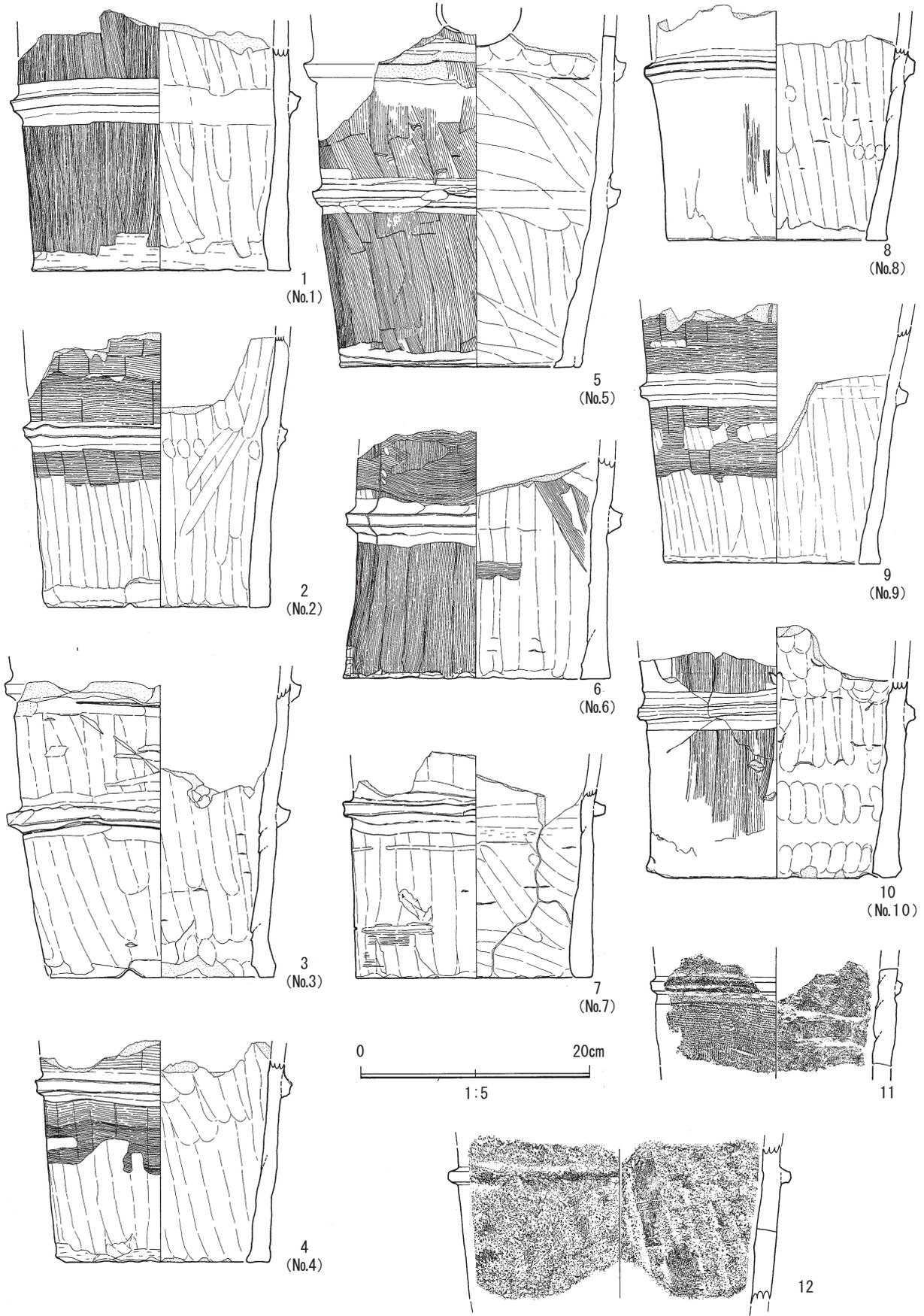


図1 西都原古墳群出土埴輪実測図(1)

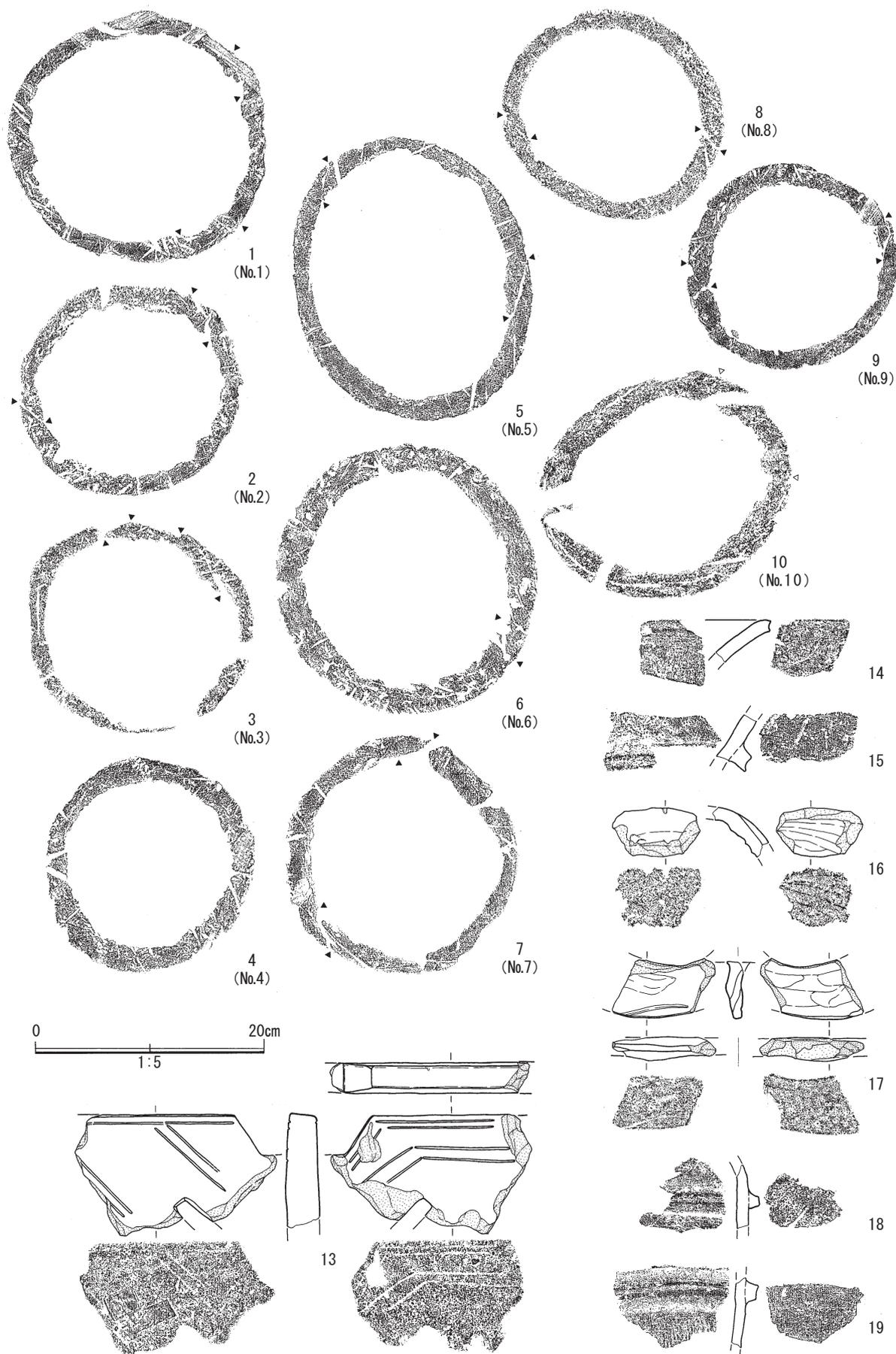


図2 西都原古墳群出土埴輪実測図(2)

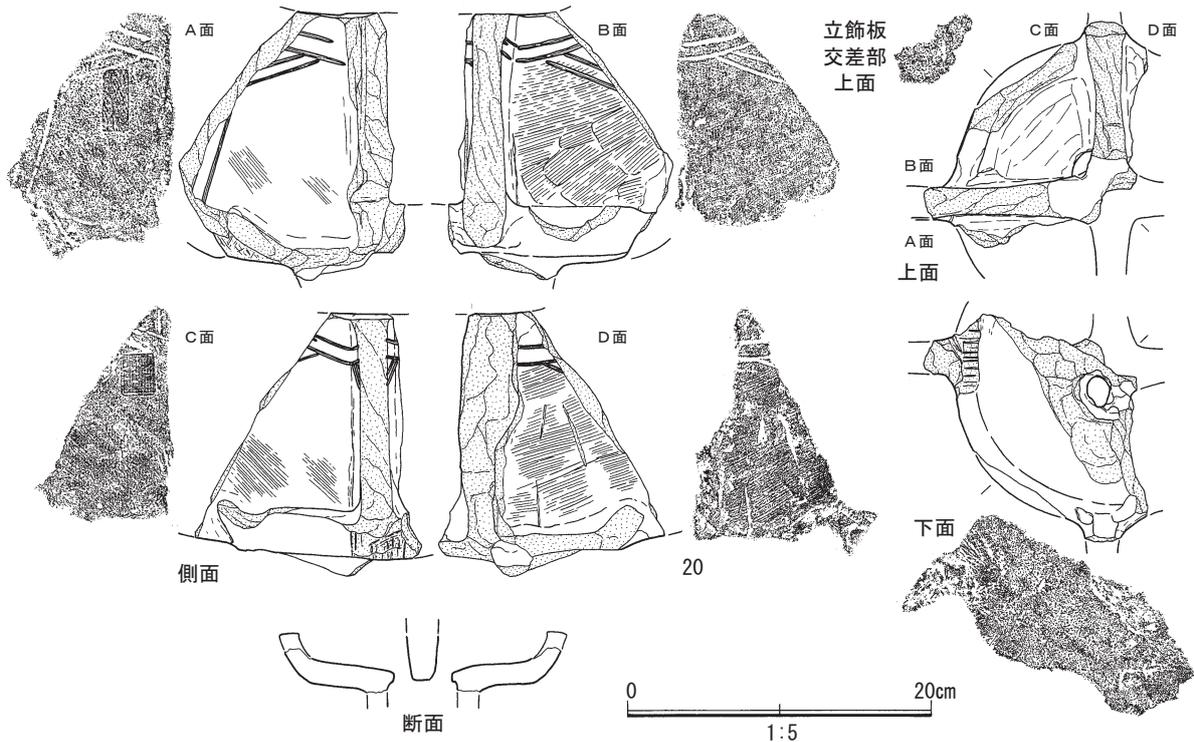


図3 西都原古墳群出土埴輪実測図(3)

参考文献

石川悦雄1988『西都原発掘75周年展図録』宮崎県総合博物館

石川恒太郎1969『宮崎県の考古学』郷土考古学叢書4、吉川弘文館

犬木 努2007「西都原の埴輪から見えてくるもの—カタチ・技術・工人・組織—」『巨大古墳の時代—九州南部の中期古墳—』宮崎県立西都原考古博物館、44~48頁

犬木 努ほか2008『西都原169号墳(遺構編) 西都原170号墳(遺構編)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第7集、宮崎県教育委員会

犬木 努ほか2010『西都原169号墳(遺物編) 西都原170号墳(遺物編)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第9集、宮崎県教育委員会

関 保之助1915a「第百十号塚」『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』宮崎県、77~86頁

関 保之助1915b「第百十一号塚」『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』宮崎県、87~92頁

高橋克壽1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第7号、宮崎県、39~59頁

浜田耕作・柴田常恵1915「第二百十号塚」『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』宮崎県、101~106頁

福尾正彦1985「女狭穂塚陵墓参考地出土の埴輪」『書陵部紀要』第36号、宮内庁書陵部、40~51頁

松林豊樹2003『西都原171号墳(第1分冊)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第4集、宮崎県教育委員会

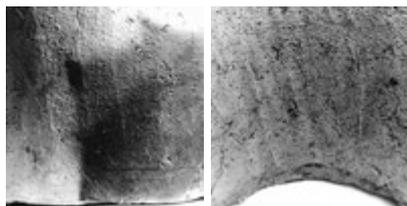
松林豊樹2004『西都原171号墳(第2分冊)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第5集、宮崎県教育委員会

三辻利一・近藤麻美2011「西都原古墳群出土埴輪の蛍光X線分析—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第7号、宮崎県立西都原考古学博物館、58~61頁

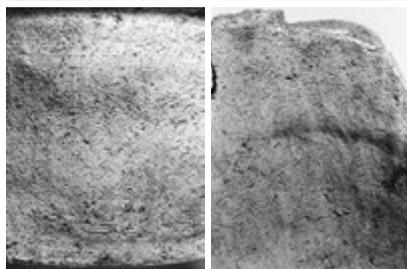
宮崎神宮社務所1941『宮崎神宮徴古館陳列品解説書』

宮崎県総合博物館1983a『宮崎県総合博物館 西都原資料館収蔵資料目録』

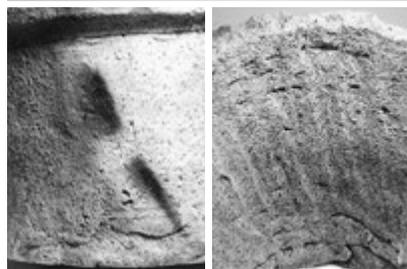
宮崎県総合博物館1983b『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』



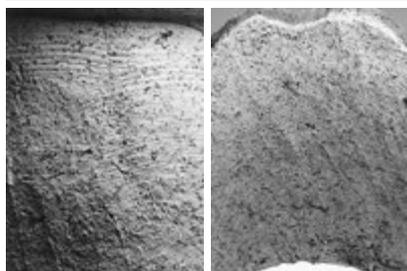
1 (No.1)



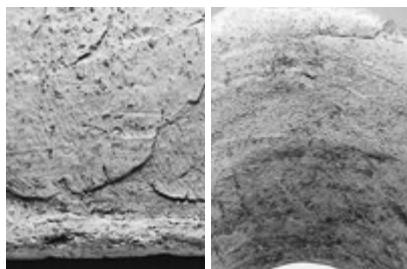
2 (No.2)



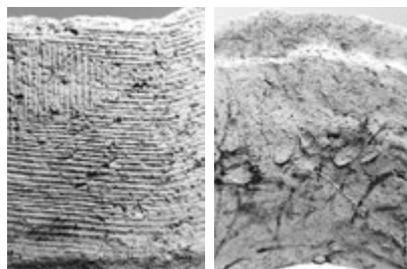
3 (No.3)



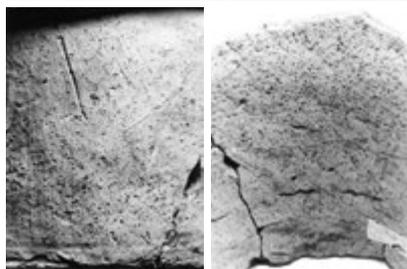
4 (No.4)



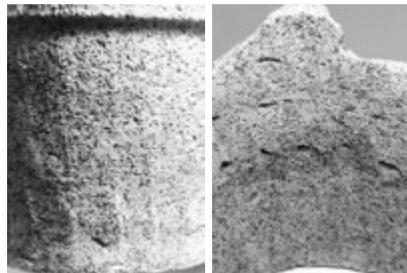
5 (No.5)



6 (No.6)

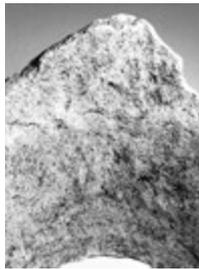
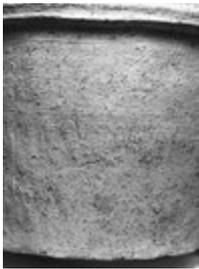


7 (No.7)



8 (No.8)

8 (No.8)



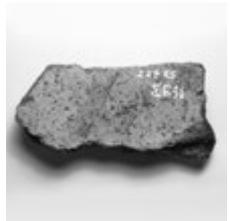
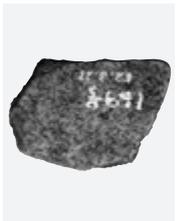
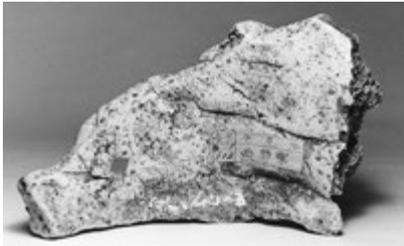
9 (No.9)

10 (No.10)

20



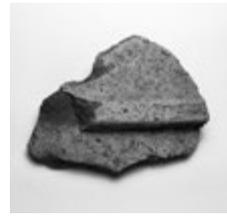
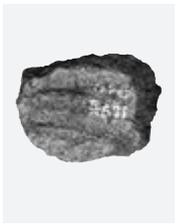
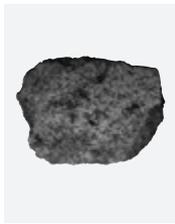
13



11

14

15



16

18



12

17

19

西都原古墳群出土埴輪の蛍光X線分析

—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—

三辻 利一・近藤 麻美

1. はじめに

現在、宮崎県立西都原考古博物館には、宮崎県総合博物館に所蔵されていた埴輪が移管されている。本稿は、これらの埴輪について実施した蛍光X線分析の結果を報告するものである。蛍光X線分析に際しては、可能な限り、全個体・全破片から試料を採取している。該当資料についての考古学的所見については、本紀要所収の別稿（犬木ほか2011）に譲る。なお、西都原169号墳および170号墳出土埴輪の蛍光X線分析結果については既報告を参照されたい（三辻2008、同2010a、同2010b）。

2. 宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪の蛍光X線分析

西都原古墳群出土埴輪の分析データは当初は1箇所で作られた埴輪という考えから、K-Ca、Rb-Srの両分布図では基準領域を描いてそれに対応させていたが、西都原169号墳出土埴輪についてのその後の分析では、a群埴輪の分布領域とb群埴輪の分布領域が異なることがわかった。両者の間には、Fe、Na因子ではほとんど差異はないが、K、Ca、Rb、Sr因子に違いがあることが見つけられている。a群領域の埴輪にはK、Rbが多く、Ca、Srがやや少ない傾向があり、これに対して、b群領域の埴輪にはK、Rbが少なく、逆にCa、Srがやや多い傾向にある。これで、改めて、a群領域とb群領域を描いて、西都原古墳群から出土する埴輪の胎土を対応させている。宮崎神宮徴古館旧蔵の円筒埴輪（図1-1～11：埴輪の実測図番号は犬木ほか2011より、以下同じ）および同形象埴輪（図3-20、図2-13）の分析データを表1に示す。このデータに基づいて作成した両分布図を図1に示す。Rb-Sr分布図より、7点の埴輪がa群領域に分布し、5点の埴輪がb群領域に分布した。長石系4因子にみられる両者の違いは素材粘土が異なることを示す。西都原古墳群周辺の別場所で作られた埴輪である可能性が高い。形象埴輪（図2-13）のみは他の資料集団から大きくずれて分布しており、別の胎土の埴輪である。器種も不明となっており、他の埴輪とは別の胎土をもつ埴輪である。

3. 「女狭穂塚」出土円筒埴輪の蛍光X線分析

今回分析した「女狭穂塚」出土円筒埴輪（図1-12）の分析値を表1に示す。また、その両分布図を図2に示す。参考のために、以前に分析した宮内庁書陵部所蔵の女狭穂塚古墳出土埴輪のデータもプロットしてある¹⁾。以前に分析した埴輪については、2点を除いて、大部分の埴輪がa群領域に分布することがわかる。それに対して、今回分析した埴輪は、b群領域に分布し、女狭穂塚古墳出土埴輪の中では少数派であることがわかる。少数派の胎土の埴輪の数は女狭穂塚古墳では西都原169号墳に比べて少ない可能性がある。もしそれが事実なら、その意味について再検討する必要がある。

4. 西都原169号墳採集埴輪の蛍光X線分析

西都原169号墳出土埴輪は、K-Ca、Rb-Srの両分布図上で2群に分かれて分布することが判明している（図3・4；三辻2010a）。それぞれ、a群領域およびb群領域と呼称している。両者は西都原古

墳群周辺の別場所で製作された埴輪であると推定されている。

今回分析した169号墳採集の朝顔形円筒埴輪（図2-18）、普通円筒埴輪（図2-19）および壺形埴輪（図2-17）、壺形埴輪ないし朝顔形円筒埴輪（図2-14～16）の分析値を表1に示す。また、両分布図を図5に示す。7点の試料のうち、円筒埴輪（図2-19）のみがa群埴輪の領域に分布し、他の6点はb群埴輪の領域に分布した。胎土を点検することが必要である。

5. おわりに

本稿で提示した分析値の比較データの一部については、既に別稿で報告済みであるが、西都原171号墳出土埴輪（宮崎県立西都原考古博物館所蔵）の蛍光X線分析値や、女狭穂塚古墳出土埴輪（宮内庁書陵部所蔵）の蛍光X線分析値については、近々報告の予定である。それを踏まえて、西都原古墳群出土埴輪全体の胎土について考察したいと考えている。また、あわせて同時期の西都原周辺集落出土土師器の蛍光X線分析値との比較検討も必要と思われる。

註

- 1) 宮内庁書陵部所蔵の女狭穂塚古墳出土埴輪の蛍光X線分析に際しては、所蔵元である宮内庁書陵部のご高配を得た。分析の詳細についてはあらためて報告の予定である。

参考文献

- 犬木 努・近藤麻美・金行美智子2011「西都原古墳群出土埴輪の補足調査—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第7号, 宮崎県立西都原考古博物館, 45～57頁
- 三辻利一2008「西都原170号墳出土埴輪の蛍光X線分析結果について」『西都原169号墳（遺構編）西都原170号墳（遺構編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第7集, 宮崎県教育委員会, 142～144頁
- 三辻利一2009「出土土師器の化学特性」『西都原46号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第8集, 宮崎県教育委員会, 17～18頁
- 三辻利一2010a「西都原169号墳出土埴輪の蛍光X線分析の結果について」『西都原169号墳（遺物編）西都原170号墳（遺物編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第9集, 宮崎県教育委員会, 73～83頁
- 三辻利一2010b「西都原170号墳出土埴輪および土師器の蛍光X線分析の結果について」『西都原169号墳（遺物編）西都原170号墳（遺物編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第9集, 宮崎県教育委員会, 84～87頁

表1 西都原古墳群出土埴輪の蛍光X線分析値

| 出土古墳 | 実測図No. | 器種 | 分析値 | | | | | |
|------------|--------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | | K | Ca | Fe | Rb | Sr | Na |
| 西都原古墳群出土 | 図1-1 | 円筒埴輪No.1 | 0.624 | 0.109 | 1.790 | 0.647 | 0.420 | 0.253 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-2 | 円筒埴輪No.2 | 0.611 | 0.085 | 1.590 | 0.646 | 0.415 | 0.283 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-3 | 円筒埴輪No.3 | 0.504 | 0.089 | 1.880 | 0.367 | 0.436 | 0.220 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-4 | 円筒埴輪No.4 | 0.589 | 0.096 | 1.810 | 0.659 | 0.380 | 0.262 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-5 | 円筒埴輪No.5 | 0.578 | 0.081 | 1.790 | 0.664 | 0.378 | 0.258 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-6 | 円筒埴輪No.6 | 0.623 | 0.087 | 1.730 | 0.681 | 0.424 | 0.264 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-7 | 円筒埴輪No.7 | 0.667 | 0.059 | 1.870 | 0.663 | 0.319 | 0.228 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-8 | 円筒埴輪No.8 | 0.536 | 0.112 | 2.110 | 0.342 | 0.403 | 0.201 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-9 | 円筒埴輪No.9 | 0.567 | 0.098 | 1.630 | 0.635 | 0.417 | 0.283 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-10 | 円筒埴輪No.10 | 0.465 | 0.126 | 2.070 | 0.409 | 0.419 | 0.226 |
| 西都原古墳群出土 | 図1-11 | 円筒埴輪 | 0.429 | 0.116 | 1.700 | 0.488 | 0.378 | 0.217 |
| 西都原古墳群出土 | 図3-20 | 蓋形埴輪 | 0.544 | 0.059 | 1.960 | 0.491 | 0.367 | 0.237 |
| 西都原古墳群出土 | 図2-13 | 形象埴輪 | 0.419 | 0.399 | 3.090 | 0.290 | 0.625 | 0.248 |
| 西都原169号墳採集 | 図2-14 | 壺ないし朝顔形 | 0.520 | 0.169 | 2.030 | 0.494 | 0.409 | 0.275 |
| 西都原169号墳採集 | 図2-15 | 壺ないし朝顔形 | 0.612 | 0.110 | 1.540 | 0.549 | 0.454 | 0.281 |
| 西都原169号墳採集 | 図2-16 | 壺ないし朝顔形 | 0.570 | 0.065 | 2.070 | 0.543 | 0.339 | 0.219 |
| 西都原169号墳採集 | 図2-17 | 壺形埴輪 | 0.458 | 0.194 | 2.120 | 0.447 | 0.393 | 0.247 |
| 西都原169号墳採集 | 図2-18 | 朝顔形円筒埴輪 | 0.490 | 0.164 | 1.830 | 0.490 | 0.454 | 0.249 |
| 西都原169号墳採集 | 図2-19 | 円筒埴輪 | 0.597 | 0.150 | 1.760 | 0.719 | 0.378 | 0.299 |
| 「女狭穂塚」出土 | 図1-12 | 円筒埴輪 | 0.496 | 0.170 | 1.780 | 0.385 | 0.456 | 0.324 |

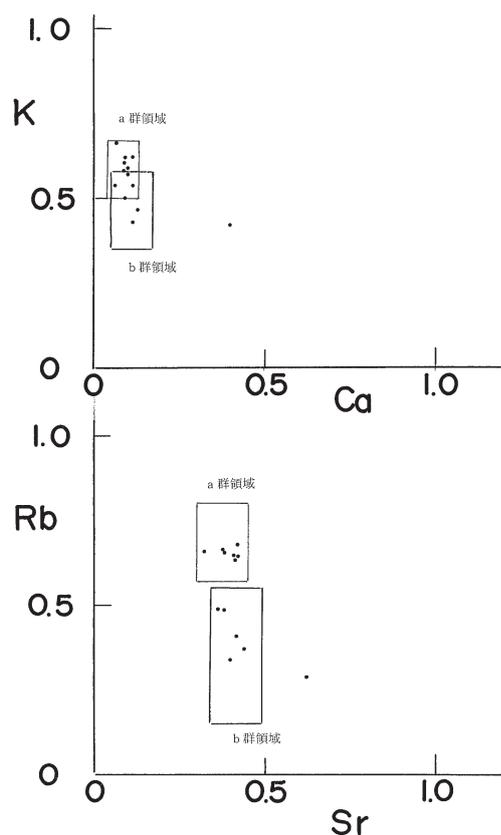


図1 西都原古墳群出土埴輪（宮崎神宮徴古館旧蔵）の両分布図

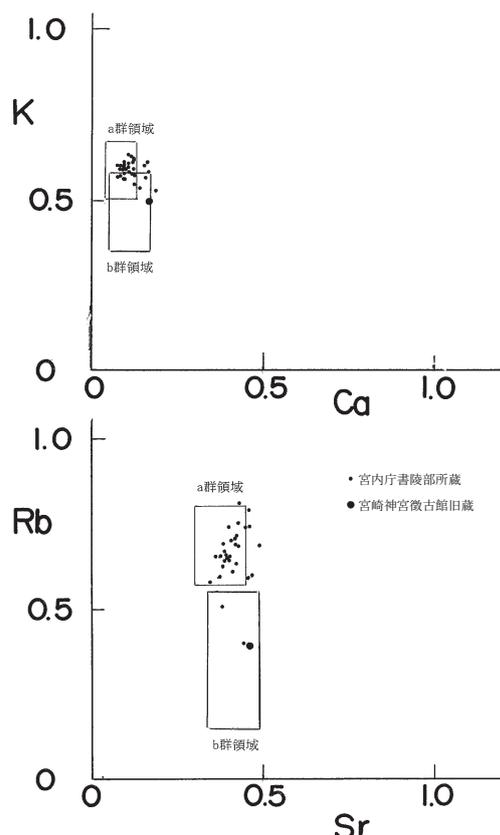


図2 女狭穂塚古墳出土埴輪（宮内庁書陵部所蔵埴輪・宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪）の両分布図

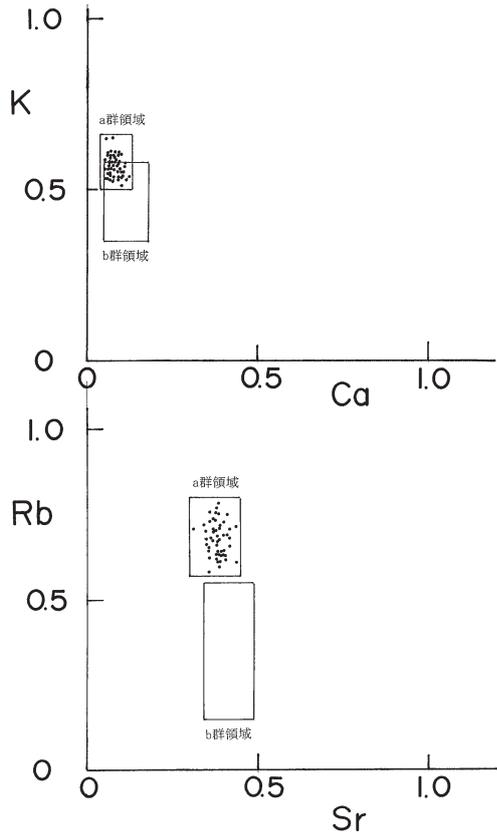


図3 西都原169号墳出土埴輪（a群）
（平成調査出土）の両分布図

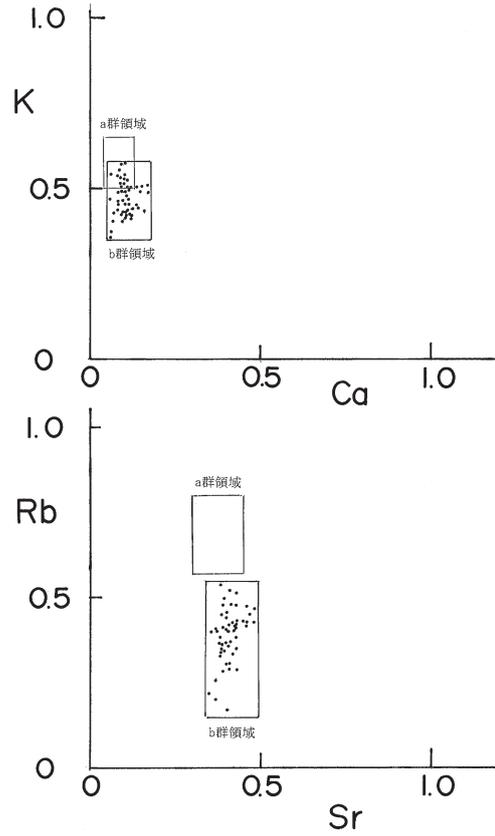


図4 西都原169号墳出土埴輪（b群）
（平成調査出土）の両分布図

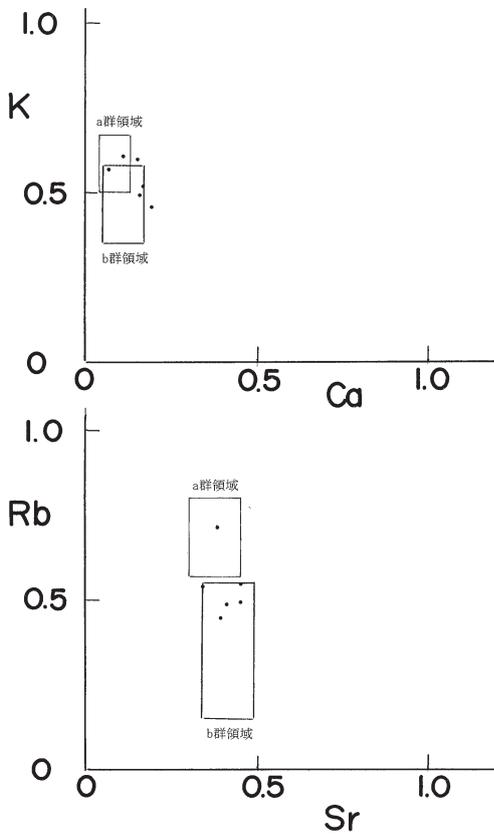


図5 西都原169号墳採集埴輪（宮崎県総合博物館旧蔵）
の両分布図

宮崎市松添貝塚出土の縄文時代晩期土器

吉本正典

1 はじめに

本稿では、西都原考古博物館が所蔵する宮崎市松添貝塚出土の縄文土器について取り上げる。それらは縄文時代晩期に属する資料であり、韓国国立中央博物館考古部との学術文化交流協定に基づく共同調査の際に、韓国済州島の無文土器との形態の類似が指摘された個体が含まれている。

今回、上記協定に基づく調査・研究の一環として、当該資料の紹介とその所属様式の検討、及び他地域の類例との比較を行う¹⁾。

2 対象資料の出土の経緯と松添式土器の研究史

松添貝塚は、名勝地「青島」近くの海岸線に沿って延びる標高約8mの砂丘端の一角にあり、縄文時代晩期の土器や石器、骨角器、自然遺物を含む貝層が確認されている。西～南西側の後背地には後期から晩期の遺跡が広がっており、その一帯は松添遺跡と総称されている²⁾。

当地での発掘調査は1953年に宮崎大学考古資料室（代表者：田中熊雄教授）が実施したトレンチ調査を嚆矢とする（田中熊1955）。1956年には賀川光夫によって「松添式」が設定され、縄文時代後期末葉に位置づけられた（賀川1956）。

また1962年に別府大学・宮崎高等学校によるトレンチ調査が行われ、縄文時代後期終末と晩期前葉の土器が層位的に分離される状況で出土した。このうち上層からは精製の黒色磨研系土器に加えて市来式の系譜上に連なる貝殻文系土器が出土しており、それらが共伴するとの認識のもと、鹿児島黒川式、大分の大石式と並行する晩期中葉の様式として松添式の呼称が用いられた（賀川1965）。

その後、1972年には宮崎市教育委員会を調査主体とする確認調査が実施された。その報告（宮崎市教育委員会1974）において出土土器の総括を担当した鈴木重治は、貝殻文系土器と黒色磨研系土器が共伴するという状況把握をもとに「本遺跡の資料を標式とする一形式」の設定を提唱している。松添式における貝殻文系土器の残存という現象については、賀川光夫も言及している（賀川1965）。さらに1997年には遺跡周辺の環境整備に先だつ確認調査が実施された（宮崎市教育委員会1999）。

このように松添貝塚では数次にわたって発掘調査が行われ、基礎資料が公表された。主要な土器は一括して松添式と呼称され、編年的位置の追究が続けられることとなった。

山崎純男と島津義昭は九州地方の縄文時代晩期土器編年案を提示する中で、松添式をⅢ地域（日向の南半・大隅・薩摩）の晩期前半後葉の様式として黒川式の次段階に位置づけた（山崎・島津1980）。そこでは松添式の各器種について、深鉢は胴部が屈曲し口縁部に1条の突帯が巡るもの、浅鉢は長い頸部を持ち口縁部が外に開くか、あるいは短い頸部と扁球状の胴部を持つもの、鉢は丸い胴部からそのまま立ち上がり口縁部に1条の突帯が巡るものと規定した。その上で「刻目のない突帯文土器が組み合わせの中で出現し、刻目突帯文土器の前段階としての様相を示す」として、刻目突帯文土器との関連に注目した。一方で「宮の本式にみるようにすでに刻目突帯文土器が伴出していることからみれば、Ⅰ地域、とくに北部九州の海岸部では刻目突帯文土器が成立していた可能性がある」と述べ、それら

の突帯の出現が北部九州より遅れる可能性に言及している。

坂口隆は西日本全域を視野に入れて刻目突帯文土器の出現を追究する中で、縄文時代晩期中葉土器の併行関係について検討を行った（坂口1996）。九州については黒川式を当該時期の広域様式と捉え、肩部が張り出す形態の「浅鉢A3類」を基軸に据えて3段階に細分する編年案を提示した。宮崎大学所蔵の松添貝塚出土資料に関しては、頸部から口縁部がごく短く立ち上がる浅鉢の器形を、相対的に新しい様相を示す特徴と捉えて「新段階」に比定している。

下山覚は、黒川式に並行する晩期土器群として松添貝塚出土資料を取り上げ、刻目の無い突帯文（以下「無刻目突帯文」）の出自について論及している（下山2000）。松添貝塚出土資料の深鉢の中で、口縁部を肥厚させる一群を「黒川式新段階前葉」に位置づける一方、1条の無刻目突帯を施すものを松添式と認定して明確に分離し、「黒川式新段階後葉」に併行するとした。その上で深鉢における前者から後者への円滑な型式変化を想定している。加えて「刻目突帯文土器の成立自体は九州において発現した見解も射程に入れておく必要がある」と述べ、松添式を「黒川式土器から刻目突帯文への変遷の中において、特に突帯文の成立に大きく関与した」と評価した。

このように松添貝塚出土資料の編年的位置を巡っては、縄文時代晩期中葉の黒川式に包括して扱う見解と、1条の無刻目突帯文などの特徴をもとに松添式を認定し、黒川式に後続する土器様式と位置づける見解がある。無刻目突帯文については、上述の下山覚のほか、山下大輔が関連資料を挙げて、刻目突帯文との関連を指摘している（山下2008）。ただし、現状では地域的様相としての評価にとどまっているように見受けられる。

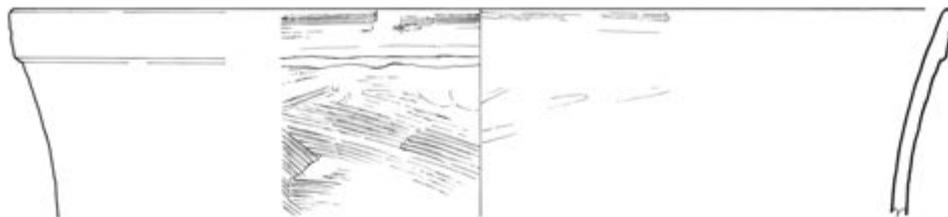
なお、今回紹介する資料は、もとは宮崎県総合博物館が所蔵しており、西都原考古博物館の開設とともに移管されている。土器の器面に貼られたラベルは宮崎大学所蔵資料のそれと同じもので、「採集年月日」の欄には「28年」と記されている。これは昭和28年（＝1953年）を指すと考えられ、宮崎大学考古資料室によるトレンチ調査年と一致する。ただし博物館での収蔵に至る経緯は明らかにすることができなかった。

3 資料の特徴

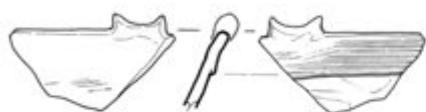
西都原考古博物館に収蔵されている土器を可能な限り図化した。図1がそれであり、深鉢・鉢・浅鉢の3器種が認められる。その他、人骨、クジラ・イルカ類・シカ・イノシシ・タヌキなどの獣骨やマダイなどの魚骨、アカウミガメ、貝類などの各種遺物がある。なお、図面の下部に、器面に貼り付けられたラベルの表記と色調、肉眼で観察できる胎土中の混入物を記した。

1は復元口縁49cmの大形の深鉢。接合箇所は明瞭でないが、口縁部の外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。その肥厚帯の下部は段を形成しており、接合の痕跡が残る。外面と内面の口縁部は二枚貝による粗い条痕、内面胴部は工具による器面調整を施す。

2は口縁部上端に鱗状の突起を付す深鉢である。口縁部肥厚帯の外面中央付近に横方向の二枚貝条痕を施すことで、わずかであるが凹部を形成する。その他の部位は外・内面とも粗いナデによる器面調整を施す。



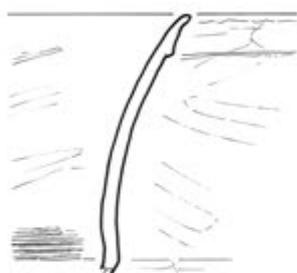
1 「宮崎市青島松添貝塚D・1185・28年11月9日」
灰黄・にぶい黄 灰色・白色の小礫



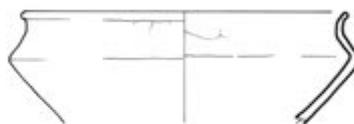
2 「宮崎市青島貝塚・575・28年5月31日」
にぶい黄・黄褐 微細な光沢粒



3 「宮崎市青島松添貝塚C・1058・28年11月29日」
にぶい黄橙 微細な光沢粒



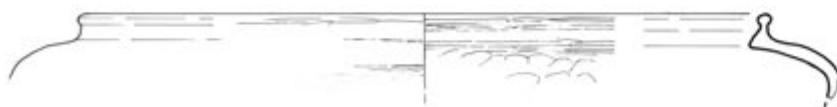
4 「宮崎市青島松添貝塚C・1141・28年11月28日」
灰黄・黄褐 微細な光沢粒・白色粒



5 「青島貝塚」※番号不明
にぶい黄橙 灰白・赤褐色粒



6 「宮崎市青島貝塚・579・28年4月19日」
黄灰 微細な光沢粒



7 「宮崎市青島貝塚・599・28年4月19日」
にぶい黄 微細な光沢粒・褐色粒



8 「宮崎市青島貝塚・28年4月26日」
※番号不明



図1 西都原考古博物館所蔵の松添貝塚出土資料（1：4）

3も鱗状の突起を付す深鉢。口縁部肥厚帯の外中央に横方向のナデ調整を施し、わずかな凹部を形成する。外・内面とも粗いナデによる器面の調整痕が残る。

4も深鉢である。胴部の屈曲部位まで残存している。屈曲部の内面には二枚貝条痕が認められるが、その他の部位は工具によるナデ調整である。口縁部の外面に横方向のナデ調整を施し、突帯状となる断面三角形の突出部を形成する。割れ口の観察の限りでは、粘土紐を貼り付けた突帯ではなく、口縁部肥厚帯の上部を押圧することによって作出されたものと判断される。

5は胴部が強く屈曲する小形の鉢である。口縁端部は緩く外反し、ごくわずかに肥厚する。外・内面ともナデ調整。

6は復元口縁約30cmの浅鉢である。頸部以上が外に開き、短く立ち上がる。口縁部の外・内面に浅い沈線文を巡らせる。器面はミガキによる調整が施される。内面の頸部下には指頭圧痕が認められる。

7も浅鉢である。復元口径は約36cm。扁球状の体部を呈するものと考えられる。頸部以上が上方に短く立ち上がり、口縁端部は玉縁状となる。胴部の最大径部付近で粘土帯の接合箇所が剥離している。外面と内面の頸部以上はミガキ調整。口縁端部のすぐ下にミガキ調整を施して凹部を形成した箇所があり、沈線の痕跡と考えられる。内面頸部より下は指ナデの痕跡が認められる。

8も浅鉢であり、口縁部が短く立ち上がる。7と比べて口縁端部下の凹部は弱く、沈線の形骸化が進んだものと考えられる。主に横方向のミガキによる調整がなされる。

4 資料の位置づけ

①黒川式における深鉢の3者

今回紹介した資料は任意に抽出されたものである上、母集団たる1955年の宮崎大学調査資料自体、一括資料としての（製作・使用あるいは廃棄時における）同時性が保証されていないため、個体間の細かな時間的・空間的關係は不明と言わざるを得ない。ここでは、深鉢（1～4）は共通する器形を有するものの、複数の口縁部形態が認められること、鉢（5）は型式的に刻目突帯文土器期まで下降する特徴を有すること、浅鉢（6～8）は扁球状の体部を有し、口縁部が短く立ち上がるもので、黒川式の特徴を備えていることを確認しておく。その上で、以下において主に深鉢の口縁部形態の変化と所属様式との関わりについて考察する。

1・2は口縁部の肥厚帯とその下部にみられる段状の接合箇所が目立つ。同種の深鉢は特に九州南東部に多く認められる。既に触れたとおり、下山覚はそれらを黒川式の範疇に収まるものと理解している（下山2000）。確かに黒川式には口縁部を肥厚させる深鉢が存在するが、それらは入佐式など前段階の口縁部形態の特徴を踏襲したもので、1・2とは肥厚帯の幅や厚さが異なる。

一方、4は断面三角形を呈する突出部を有するもので、従来、松添式に包括されてきた無刻目突帯文深鉢の特徴を備えている。3は、1・2と4の中間的な口縁部形態を示している。上述の下山覚の見解（下山2000）によれば、それらの口縁部形態（型式）は関連を有するもので、1・2から4への変化が想定されることとなる。また、少ないサンプル数ではあるが、その方向性は、近畿地方晩期中葉の篠原式深鉢における二枚貝条痕→板目ナデ・ケズリという器面調整の変化（家根1994）とも整合する。ここではその変遷観に従い、当該資料に特徴的なその系譜をA系列と命名する。

黒川式の深鉢は、薩摩半島地域では肩部が逆「く」字形に鋭く屈曲し、頸部から口縁部にかけて外方に開くものが主体をなす。またそれとは別に、胴部が全く屈曲せずバケツ状に外に開く形態のものがある。前者をB系列、後者をC系列とする。A系列を加えたこれら3種の深鉢は、別系譜に連なる型式群として並存し、様式内での位置を占めたと考えられる³⁾。その根拠となる一括遺物として、宮崎市上の原第1遺跡の26号土坑出土資料（宮崎県埋蔵文化財センター2000）を挙げておく（図2）⁴⁾。この共伴例に示されるとおり、それらの深鉢の分布状況は排他的とは言えないが、一定の地理的傾斜を示していると推定され、広域土器様式たる黒川式⁵⁾内部の地域性を表出している可能性が指摘できよう。

②松添貝塚出土資料・松添式の実態

前項で設定したA系列には、一貫して突帯・突起以外の文様は認められない。図1の1や2など口縁部肥厚帯を有する口縁部形態と、その次段階に想定される4のような断面三角形の突出部を作出する口縁部形態により構成される⁶⁾。

このA系列深鉢に属する資料については、近年、徐々にではあるが遺構内からの出土事例が増加しており、所属様式の推定が可能となっている。都城市山城第1遺跡A区の5号土坑（高城町教委2005）では、口縁部肥厚帯を有する深鉢と黒川式系浅鉢のセット関係を知ることができる（図3左）。浅鉢は口縁部がごく短く立ち上がるものであり、8に類似する。黒川式の中でも相対的に新しい段階に位置づけられる。川南町尾花A遺跡のS318（宮崎県埋文センター2009）では、A系列に属する上述の口縁部形態の両者が混在する形で出土している（図3右）。当該資料には、弧状沈線文を有する（おそらくは）B系列深鉢の口縁部や肩部屈曲鉢など黒川式の前段階に属する個体に加えて、黒川式新段階に多く認められる組織痕土器の鉢もあり、遺構内出土とはいえども一定の時間幅を有する資料であることが理解できる。一方で、壺や平底の波状口縁浅鉢など、後の刻目突帯土器期に出現する器種は見当たらない。従って、A系列深鉢が時間的な幅を持って変化を遂げたとの前提に立つならば、その存続期間は当該遺構出土資料が示す時間幅（すなわち黒川式の存続期間）と近似するものであった可能性が高いと考えられる。

また、A系列深鉢は、当地域の縄文時代晩期中葉の土器製作にあたっては、幅の広狭はあれ口縁部を強調する意識が一定期間共有されたことを示している。

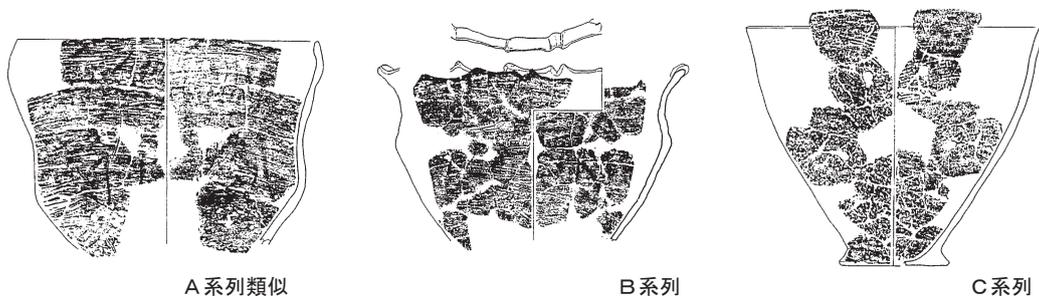


図2 宮崎市上の原第1遺跡26号土坑出土資料（1：6）

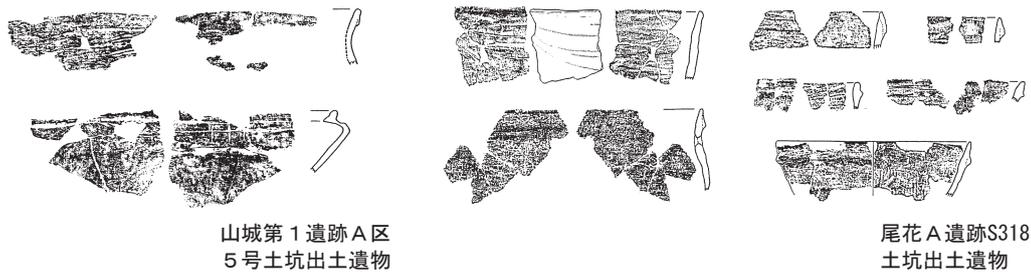


図3 A系列深鉢を含む遺構出土資料（1：6）

以上のことから、松添貝塚出土の縄文時代晩期土器群は、主として九州南東部の地域色を反映するA系列深鉢と、九州全域に分布する黒川式系浅鉢、及び組織痕土器を含む鉢により構成される集合体であり、精製器種を重視するならば、実態として黒川式に包括される様式群⁷⁾と規定できよう。これを広義の松添式と呼んでおく。広義の松添式には、深鉢や浅鉢の型式差からみて2～3の様式を含むと考えられるが、その細別が可能となるまで今しばらく資料の蓄積を待ちたい。なお、同様に貝殻文系土器が共伴する事例は確認できない。

③広域的視点から

冒頭で触れた韓国の資料との関連については、朝鮮半島の無文土器の二重口縁との形態的類似が指摘できる。済州島の資料に似るといふ所見もこの点を指してのものであろう。あくまで口縁部断面形の類似をもとに判断するならば、可楽洞類型（庄田2009）に含まれる斜沈線文の付かない二重口縁土器に近い。ただし単一の特徴の類似をもって直截的に集団の移動を伴う交流を想定することは危険である⁸⁾。広義の松添式においては、精製器種である浅鉢が様式内で健在であること、深鉢の胴部屈曲が根強く残ることなど、縄文時代後期後葉以来の土器製作の伝統が引き継がれており、劇的な変化は認められない。それに加えて、現段階では石器組成の違いが大きいと判断されることも考え合わせるならば、何らかの結びつきが想定されたとしても、もたらされかつ遺存し顕在化したものは器形の一部や付加文様などの土器製作に係る情報であった可能性が高いと考える⁹⁾。

一方、南西諸島に分布するトカラ列島・奄美諸島の宇宿上層式（国分・河口ほか1959）や沖縄諸島の宇佐浜式、カヤウチバンタ式（高宮1974）など、黒川式（及びその前後）に併行する様式においては、各器種とも器形の伝統は保持しているものの、口縁部肥厚帯が明瞭となり無文化が進行する状況が窺える¹⁰⁾。A系列深鉢とそれらとの類似は、朝鮮半島の無文土器との関係と同様の事象であるのかも知れない。ここではそれ以上踏み込むことはできないが、そのような土器様式構造の把握を進めることに加え、松添貝塚など当該期の石器や骨角器、自然遺物から当該期の海洋活動の在り方を捉えることが、交流の実態を解明する糸口の一つとなりうることを指摘して擱筆したい。

④結論

今回紹介した資料のうち、深鉢は同一系譜に連なるもので、土器製作上の特徴により図1の1・2から4への変化が想定される。

その上で、近年の遺構内出土資料で明確となったそれらの深鉢と黒川式系浅鉢との組み合わせを広

義の松添式と規定し、広域土器様式である黒川式に包括される様式群と位置づけた。その細分と併行関係の確定が今後の課題である。

韓国の無文土器との関係については、土器製作に係る情報がもたらされた可能性があるが、現時点で断定しうる材料はない。南西諸島も含め広域的に交流の実態を捉えていく必要がある。

5 おわりに

以上、松添貝塚出土資料の紹介を行い、その編年的位置について検討したが、もとより限られた資料をベースにした小文であり、他地域との併行関係や生業、気候変動など、縄文時代晩期中葉・黒川式期に横たわる諸問題について十分に論じることができない。また冒頭で触れた形態的類似についても議論を深めることはできなかつた。黒川式の様式構造を巡っては別項を構想中であり、詳細な考察は後日に譲りたい。

本文においては敬称を略している。先学諸氏に対する非礼を心よりお詫び申し上げたい。

また執筆にあたり、宮崎大学の柳沢一男先生には同大学収蔵資料の実見に便宜を図っていただき、今回の資料紹介に御理解をいただいた。さらに茂山護氏、岩永哲夫氏からは松添貝塚の調査について、本田道輝先生と新里貴之氏からは南西諸島の土器について有益な御教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

【註】

- 1) 本稿での「様式」は土器様式を指し、ある地域における時間的同時性を示す型式群と位置づける。一括資料によりその存在が実証される。また以下において「～式土器」は単に「～式」と略記し、器種名の「～形土器」も省略する。
- 2) 宮崎大学所蔵資料には「松添貝塚」「青島貝塚」の両者がある。調査に参加された茂山護氏にうかがったところ、当初、当該貝塚（貝層の認められる範囲）の名称として「青島貝塚」を用いていたが、後に付近の字名をとって「松添貝塚」と命名したとのことであった。今回紹介した資料のラベルを見たところ、「28年4月」の日付の土器は「青島貝塚」、「28年11月」の日付の土器は「松添貝塚」となっており、茂山氏の指摘と合致している。また、松添貝塚の背後（西側）にある高低差約120～200cmの海岸段丘崖を境として、上段にあたる畑地は、小字を冠して下箸方遺跡と呼ばれ、その「第一包含層」より松添貝塚と同類の晩期土器が出土している。下箸方遺跡が居住地で、貝類などが投棄された下段にあたる場所が松添貝塚という位置関係が想定されている（田中熊1958）。
- 3) 本稿では、胴部形態など他の形質については考慮せず、専ら口縁部形態を指標として型式を捉え、A系列の口縁部形態を有する深鉢の型式の連なりを「A系列深鉢」と表現する。
- 4) 図2で「A系列類似」とした個体は、後期後葉からの系譜がたどることが可能な資料であり、典型的な口縁部肥厚帯とは一線を画するが、段状となる外面口縁下部の特徴と口縁部肥厚帯との親縁性に注意を払っておきたい。
- 5) 黒川式は、設定時は南九州の様式であり（河口1972）、山崎純男・島津義昭による九州の晩期編年（山崎・島津1980）時点においてもそのような位置づけであった。現在では九州全域における晩期中葉土器様式として

広く認知されており（水ノ江2009）、細かな地域差を内包しながらも小林達男の「様式」（小林1989）に近い捉え方がなされている。

- 6) 水ノ江和同は九州の後期後葉～晩期土器を概括する中で、東北九州地域の上菅生B式における「断面二等辺三角形に肥厚する口縁」から「口縁部に刻目のない突帯文」への変化について論及しており、九州東部に広く認められる現象であると考えている（水ノ江1997）。本稿における「断面三角形の突出部を有する口縁部形態」の次段階の変化にあたると思われるが、松添貝塚出土遺物の中にあつては粘土紐を貼り付け、断面半円形の突帯を巡らせるものは少量にとどまる。なお、いち早く九州北東部～東部地域における無刻目突帯文土器に着目し、刻目突帯文土器とのつながりを指摘したのは高橋徹である（高橋1983）。
- 7) A系列における口縁部強調の特徴に着目するならば、小林達雄の「様式」（小林1989）にあたる。一方で広義の松添式を構成する様式は、様式間にレベル差を認める前提に立った場合の「ローレベルの様式」（田中良1982）に近いと考えるが、当様式に組み込まれた浅鉢は九州のほぼ全域に分布する型式群であるものの、いわゆる「外来系」の様式がある地域の様式内で高次の位置を占めて席卷するといった状況とは一線を画する。すなわち黒川式（精製器種を含む・上位）→松添式（粗製器種のみ・下位）という関係とは異なると考えている。
- 8) 端野晋平が朝鮮半島からの「直接的影響」が成立するための要件を示し、近年示されたいくつかの遠隔地間の直接交渉論を批判している（端野2009）。
- 9) 孔列文の流入現象について田中良之は、在来の土器の規制が健在であった中で、折衷土器として取り入れられたと表現しており（田中良1997）、その見解を踏まえて栗畑光博は、朝鮮半島からの組織的な集団の移動は想定しがたい状況であるが、「情報閉鎖系の社会ではなかった」（栗畑2009）と考えた。本稿で触れた現象も同様の理解の上に立っている。ただしそのような在り方は物質的な面での実証が難しい。
- 10) 晩期土器研究を進める上で、南西諸島の資料に注意を払うべきとの見解は、既に下山覚が提示している（下山1999）。

【文献】

- 賀川光夫 1956 「各地域の縄文土器 九州」『日本考古学講座』3 河出書房
- 賀川光夫 1965 「九州東南部」『日本の考古学』II 縄文時代 河出書房新社
- 河口貞徳 1972 『上加世田遺跡発掘調査概要 1972年 第5次』
- 栗畑光博 2009 「南部九州における刻目突帯文土器期の稲作の系譜」『古代文化』第61巻第2号 財)古代学協会
- 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義麿・原口正三 1959 「奄美大島の先史文化」『奄美の自然と文化』九州学
会連合
- 小林達男 1989 「縄文土器の様式と型式と形式」『縄文土器大観』4 小学館
- 坂口 隆 1996 「刻目突帯文土器の成立」『先史考古学研究』6 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 下山 覚 1999 「九州地方 晩期」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 下山 覚 2000 「いわゆる松添式の評価をめぐって -南部九州の資料を用いて-」『九州旧石器』4 九州旧
石器文化研究会
- 庄田慎矢 2009 「朝鮮半島青銅器時代の編年」『考古学雑誌』第93巻第1号 日本考古学会
- 高城町教育委員会 2005 『細井地区遺跡群』（高城町文化財調査報告書第14集）

- 高橋 徹 1983 「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談叢』九州古文化研究会
- 高宮廣衛 1974 「いわゆるカヤウチバンタ式および宇佐浜式土器について」『沖縄国際大学文学部紀要社会科学
篇』第2巻第1号
- 田中熊雄 1955 「青島松添貝塚発掘録」『宮崎大学学芸学部研究時報』第1巻第1号
- 田中熊雄 1958 「下箸方遺跡の研究」『宮崎大学学芸学部紀要』Ⅱ. 社会科学 第5号
- 田中良之 1982 「磨消縄文土器伝播のプロセス—中九州を中心として—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
- 田中良之 1997 「縄文土器と弥生土器 1. 西日本」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- 端野晋平 2009 「無文土器文化からの影響 —松菊里文化と弥生文化の形成—」『古代文化』第61巻第2号 (財)
古代学協会
- 水ノ江和同 1997 「北部九州の縄紋後・晩期土器 —三万田式から刻目突帯文土器の直前まで—」『縄文時代』
8 縄文時代文化研究会
- 水ノ江和同 2009 「黒川式土器の再検討 —九州の縄文時代晩期土器—」『弥生時代の農耕のはじまりとその年
代』新弥生時代のはじまり4 雄山閣
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000 『上の原第2遺跡 上の原第1遺跡ほか』(同センター報告書第25集)
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009 『尾花A遺跡I』(同センター報告書第185集)
- 宮崎市教育委員会 1974 『松添貝塚』(宮崎市文化財調査報告書第2集)
- 宮崎市教育委員会 1999 『松添貝塚Ⅱ』(青島歴史公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)
- 山下大輔 2008 「宮崎県における突帯文土器出土遺跡概観 —突帯文土器出土遺跡の集成作業から—」『南部九
州における水稻農耕受容期の様相』(平成20年度宮崎考古学会研究会資料集) 宮崎考古学会県
南地区例会実行委員会
- 家根祥多 1994 「篠原式の提唱 —神戸市篠原中町遺跡出土々器の検討—」『縄文晩期前葉—中葉の広域編年』
文部省科学研究費(総合A)研究成果報告書
- 山崎純男・島津義昭 1980 「晩期の土器 九州の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣

実験「古代の染色」Ⅱ ～藍と茜～

島 木 良 浩

1 はじめに

昔から人々は衣服を染めるために動植物・鉱物などの身近な素材の中から染料の色素を求めてきた。特に藍は、三原色の一つである青色を作り出すことのできる数少ない染色原料として、大変珍重されてきた。

BC2000年頃のエジプトのミイラにも藍染の巻布が使われている。また、中国の荀子は“青は藍より出て、藍より青し”との言葉を残すなど、藍と人との関わりの深さを今に伝えている。

藍は、タデ科の一年草で中国・朝鮮半島より伝えられたとされており、正倉院蔵品にも藍染製品が収蔵されていたことから、奈良時代にはすでに藍染料の加工方法が確立していたと考えられる。日本で発達した藍の色は特に、「ジャパン ブルー」と呼ばれてきた。

吉野ヶ里遺跡からは経糸が日本茜、緯糸が貝紫で染色された布が確認された。弥生時代から植物や貝を使って染色が行われていたと考えられる。

茜は、「アカネ科の蔓性(つるせい)の多年草。本州以南の山野に多い。茎は四角柱でとげがある。葉はハート形で先がとがり、4枚ずつ輪生するように見えるが、2枚は托葉(たくよう)。晩夏、多数の淡黄緑色の小花を円錐状につける。根は染料や薬用。」(yahoo辞書・大辞泉より)とある。

古代の染色は、昨年度から新しく始めた実験講座である。昨年は、基本的な「草木染め」と「赤色顔料」で布と糸を染めた実験の概要を報告した。

本年度は、「延喜式」でも使われている「藍」や「茜」を使い、「古代の染色」の実験を通して、古代の色について考えていきたい。

2 古代の染色方法について

(1) 藍

藍染めの始まりは、生の葉をそのまま摺りつける方法だったと考えられ、その後、生の葉から採った液汁に浸けて染める方法に移り、そして、広くよく知られている発酵建てが行われるようになったとされている。なお、その発酵建ては、奈良時代のころから行われるようになったと言われているが、当時はまだ、太陽熱を利用したものであったため、夏季に限定されていた。

「すくも」がつくられるようになった室町時代ごろから、人工的に加熱/保温されるようになり、四季を通して藍染めが行われるようになり、江戸時代になると木綿の栽培が普及して、「藍染め」が発達していった。

(2) 茜

延喜式の雑染用度には「浅緋(あさきあけ) 綾1疋。茜大30斤。米5升。灰2石。薪360斤。」と記されている。灰は「灰汁(あく)」を作るためであるが、なぜ米が必要なのだろうか。前田雨城氏は『色染と色彩』の中で次のように書いている。

この米がなくては赤い色。つまり緋に染まらず、褐色の黄味がかった汚い色になる。～中略～

茜から染料が出る温度が100度以上であるため、米という澱粉を入れる必要がある。そして、煮出した液が酢になるまで、毎日熱を入れ、酸性浴になったとき、初めて絹に赤く染まる染液ができていくわけで、この仕事を繰り返して緋という色相にまでするのが、茜の染法である。

また、茜染め染色家の田中ゆきひと氏は、染色教室（夏期講習）「つばきの灰を使って古法で染める」で、実際に茜にお粥をまぶして混ぜている。そうすることで、「赤を染めるのに不要なきたない色素が浮いてくる」のだそうである。

「浅緋（あさきあけ）綾1疋。茜大30斤。米5升。灰2石。薪360斤。」を今の分量にすると次のようになる。大1斤=160匁=600g、柝1升=現行柝4合として考えると、絹布2反分で茜大15kg、米1升6合、灰8斗、薪216kgとなる。膨大な分量である。現在、茜を15kg集めるのに相当な苦勞を要する。しかも乾燥させて使うのであるからそれを考慮すると膨大な量である。米を使うことで、緋色を作り出すということを平安時代の人々は既に知っていたのであろう。

3 染色の基本的な手順

① 布の前処理

布を染める前に、油や汚れを落とす目的で一度洗剤で洗う。

② 下処理

ア 大豆を一晩水につけておき、水とともにくだく。

イ 布でこして呉汁をつくる。（染料の定着を助ける働きと染まりをよくするため）

ウ 染める布を呉汁に30分間つけこむ。

エ 布を脱水する。

オ 布を天日陰干し乾かす。

カ 染める直前にぬるま湯にさらす。

③ 染液と媒染液をつくる

④ 染色と媒染を繰り返して染める。

⑤ 水ですすいで乾燥させる

4 藍による染色

藍の種は、古代生活体験館職員の知り合いの方から頂いた。藍の栽培から染色そして種の収までを藍による染色として紹介する。

(1) 藍を育てる。



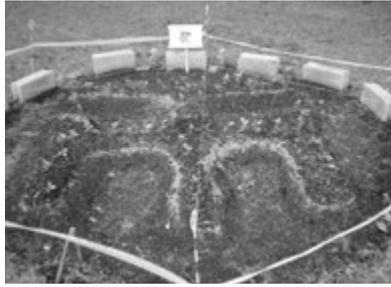
4月17日 種まき



4月24日 発芽



5月14日 植え替え



6月9日
花壇の藍



6月26日
プランターの藍



8月21日
元気に育った藍



9月25日
藍の葉を刈り取る



10月27日
種を採るための乾燥



12月4日
種の薄皮とり

(2) 生葉染め

①生葉の叩き染め

下処理した布をぬらし、新聞紙の上に布、布の上に藍の葉をのせる。新聞紙ごとクリアファイルに挟み込み、ファイルの上から木槌で静かに叩く。その後1時間太陽にあてて水洗いをして、干して乾燥させる。

②生葉染め

ア 藍を刈り取り、手で茎をしごいて葉を取る。(50g~60g)

イ 軽く水洗いをした後、はさみで葉を細かく切り刻む。

ウ キッチン用ネットの中に切った葉を入れ、口を輪ゴムでくくり中の葉がでないようにする。

エ ボールに水500mlを入れ、ネットに包んだ藍の生葉を10分程度揉み出す。

オ 染色液が緑になり、少し粘りがでて藍の葉がどろっとした感じになるまで行う。

(かなり、力が必要である。ネットが空気中に出ないようにする。)

カ ネットをよく絞って取り出す。これで染液の完成。

キ 下処理した布を水に濡らして、染液の中に入れて20分~30分間染色する。

(ムラにならないように布を染液の中でよく動かし、空気中に出さないようにする。)

ク カップから布を取り出し、軽く絞り空気中に十分さらす。

(空気中でしばらく広げて15分~20分ほど干して酸化させることが大切。)

ケ 水洗いをして、干して乾燥させる。



③生葉染め（塩揉み染色）

藍を刈り取り、汚れを落とすために水洗いをする。手で茎をしごいて葉を取る。塩をひとつまみ入れてひたすらもむ。葉から汁がでてきたら布で藍の葉を包みさらに30分揉み続ける。布が青く染まってくる。水洗い後に日陰で干すと完成である。

5 茜による染色

（1）茜との出会い

「吉野ヶ里遺跡から経糸が日本茜、緯糸が貝紫で染色された布が確認された。」弥生時代から茜はあったのである。では、茜とは、どんな植物なのだろう。『茎は四角柱でとげがある。葉はハート形で先がとがり、4枚ずつ輪生するように見えるが、…』とあった。職員との雑談の中で話をしていると「体験館の裏には昔あったという話を聞いたことがある。」と言うではないか。早速、体験館の裏を搜索した。すると、「茎が四角形、葉がハート型」の葉を発見。すぐに、根を掘り出した。名前の通り確かに赤い根をしていた。50g程採取して、煮出してみた。見事に茜の色がでた。茜との出会いであった。

（2）灰汁作り

茜染めには欠かせない物。延喜式にある「灰」である。その灰から灰汁をつくる。職員の知り合いから椿の枝をもらってきた。体験館の裏で燃やして灰にする。その灰を数回濾す。蓋付きのバケツに灰を入れ、灰の量の10倍の水を入れ、かき回す。1日に数回かき回すこと3日。その後1週間そのままにしておく。できた上澄み液＝灰汁を使用する。触ってみるとぬるぬるした感じがする。

（3）茜染め実際

- ① 茜草の根をよく洗う。
- ② 酢を少し入れた水に根を入れて煮出す。
※延喜式にあるように米を使うと時間がかかりすぎるため今回の講座では、米酢を使用した。
- ③ 20分煮出して火を止めて布で漉す。
- ④ 同じように二番、三番と数回煮出して合わせて染液とする。
今回は、一番と二番を合わせて染料液とした。
- ⑤ あらかじめ下処理した布を灰汁に30分つけておく。

- ⑥ 茜の染液を温める。(約80度)(染液を温めることで浸透力を高める。)
- ⑦ 布を染液に浸す。
- ⑧ 媒染液(灰汁)に浸す。(⑦・⑧はムラにならないように布を動かしながら15分間浸す。)
- ⑨ ⑥～⑧を3回繰り返し水洗いをして、日陰干しにする。

6 実験の結果と考察

(1) 藍染め

土作りからはじめて、種まき、染色、種取りまで約8ヶ月間の藍との付き合いであった。藍は絹やウールなどの動物性の繊維は染まりやすいが、木綿等の植物性の繊維は染まりにくい。しかし、絹等は高価なので木綿の布を使用した。木綿を使用するので呉汁での下処理を行った。

叩き染めは、薄かったが青く染まった。生葉染めは、途中空気に触れたからなのか、緑色に染まってしまった。2回挑戦したが、2回とも薄い緑色で青く染めることはできなかった。葉の量や水の量そして、いかに空気に触れさせないように揉み、染めていくか次年度への課題である。講座で使える別の染色方法を探していたところ、「塩を入れて揉む」方法をみつけた。手軽に染められて時間もかからず青に染めることができた。塩は食生活で切り離せないものである。藍も塩で揉んで染色した可能性は十分にあると考えられる。

(2) 茜染め

茜を見つけたときの感動は今も覚えている。また、布を茜の染液に入れたときはピンク色なのだが灰汁に浸すと茜色に変わった瞬間の驚きもあった。茜は、手順や媒染液等を間違わなければ多少の色の違いはあるが赤に染めることができた。しかし、茜の根を掘り出し、乾燥させ、必要量を確保すること、椿を燃やして灰汁を作ること等それまでの準備は大変である。古代の人の苦労や知恵のすばらしさを改めて感じた実験であった。

7 まとめ

昨年に引き続き草木染めの実験を行った。藍は花が咲くと色が出にくくなることや茜は酢を入れないと赤に染まらない事など失敗を重ねるたびに、染色の奥深さを感じてきた。現在、ウコンを使って染色の実験を行っており、黄色く染めることができた。次年度以降も、今回の反省を生かしながら、古代の色や衣について研究を続けていきたい。春先の茜は、鮮やかな緋に染まるという。ぜひ挑戦してみたい。

・本実験は、古代生活体験館体験学習指導員児玉幸子の協力を得た。

【参考文献】

- 前田雨城 1993 「色染と色彩」 法政大学出版局
- 角山幸洋 1974 「日本染色発達史」 田畑書店
- 竹内淳子 1991 「藍Ⅰ 風土が生んだ色」 法政大学出版局
- 竹内淳子 1991 「藍Ⅰ 暮らしが育てた色」 法政大学出版局
- 堤 洋 1997 「南方染織文化-アジア染織文化の源流-」 アグネ技術センター

【藍染め】



藍



藍の種



叩き染めによる染色



生葉染めによる染色



塩揉みによる染色

【茜染め】



茜



茜の根



茜の一番液



茜による染色

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第7号執筆者紹介 (五十音順)

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| ■ 赤田 昌倫 (AKADA Masanori) | 京都工芸繊維大学 ベンチャーラボラトリー |
| ■ 安藤 正純 (ANDO Masazumi) | 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査 |
| ■ 犬木 努 (INUKI Tsutomu) | 大阪大谷大学 教授 |
| ■ 甲斐 貴充 (KAI Takamitsu) | 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査 |
| ■ 金行 美智子 (KANEYUKI Michiko) | 大阪大谷大学 大学院文学研究科 研修生 |
| ■ 近藤 麻美 (KONDO Mami) | 大阪大谷大学 大学院文学研究科 研修生 |
| ■ 崎田 一郎 (SAKITA Ichiro) | 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査 |
| ■ 島木 良浩 (SHIMAKI Yoshihiro) | 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査 |
| ■ 嶋田 史子 (SHIMADA Fumiko) | 宮崎県立西都原考古博物館 整理専門員 |
| ■ 福田 泰典 (FUKUDA Yasunori) | 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 副主幹 |
| ■ 藤木 聡 (SATOSHI Fujiki) | 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査 |
| ■ 三辻 利一 (MITSUJI Toshikazu) | 奈良教育大学 名誉教授・大阪大谷大学 非常勤講師 |
| ■ 吉本 正典 (YOSHIMOTO Masanori) | 宮崎県埋蔵文化財センター 調査第二課 調査第三係 副主幹 |

////////////////////////////////////
宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第7号

Research Bulletin Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture
Vol.7

2011年3月30日

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館
〒881-0005 宮崎県西都市大字三宅5670番
TEL:0983-41-0041 FAX:0983-41-0051

印 刷：株式会社エスアイエス
〒880-0852 宮崎市高洲町50-4
TEL:0985-27-8899 FAX:0985-28-3025
////////////////////////////////////



Research Bulletin

Vol. 7

Thesis and Research Material Introduction

- Kai Takamitsu
Kofun Period Quiver Clasps Excavated in Miyazaki Prefecture: Two Cases
- Fujiki Satoshi
Yayoi Period Stone Chopping Axes (Discovered) in Hyuga
- Shimada Fumiko & Akada Masanori
Study of Fibers and Black Materials Found on Iron Arrowheads Excavated From Ohagi Underground Side Hole Tomb No.37
- Ando Masazumi
Ancient and Medieval Mirrors Excavated in Miyazaki
- Fukuda Yasunori
Ceramics from Changsha Kiln Excavated in Miyazaki Prefecture
- Fujiki Satoshi
Exploring the Relation Between Ancient Peoples in East Asia and Fire: Taiwan Edition
- Sakita Ichiro
Study of Hayato Shield Patterns
- Inuki Tsutomu & Kondo Asami & Kaneyuki Michiko
Supplemental Survey on Haniwa Excavated from Saitobaru Burial Mounds
- Mitsuji Toshikazu & Kondo Asami
X-ray Fluorescence Spectroscopy (XRF) of Haniwa Excavated from Saitobaru Burial Mounds
- Yoshimoto Masanori
Late Jomon Era Pottery Excavated from Matsuzoe Shell Mounds in Miyazaki City

Hands-on Lecture Accomplishment Report

- Shimaki Yoshihiro
Second Experiment Involving Ancient Dyes: Indigo and Madder